とある科学の自由選択《Freedom Select》

ウィルノ・ヘイム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある科学の自由選択《Ｆｒｅｅｄｏｍ　Ｓｅｌｅｃｔ》

【Ｎコード】
Ｎ４１９８Ｘ

【作者名】
ウィルノ・ヘイム

【あらすじ】
学園都市――最先端科学の集まったその街でその少年は溜め息をついていた。彼の名は神命（かみこと）　選（すぐる）。学園都市の中に7人しかいない超能力者の第六位であり、世界第二位の原石でもある。そんな彼を中心に起こる様々な出来事や事件を乗り越え成長していく姿を綴った話です。原作や超電磁砲の話に沿いつつ原作には大きな影響が出ないように改変していきたいと思っています。主人公設定は目次最下部にあります。
作者は小説を書くのは初めてなので過度な期待はしないように。よ

ろしければ感想・助言等送ってください。不定期更新です。

第一話　始点と終点は紙一重

学園都市――

東京都の西部に位置するその街は、東京都の3分の2の面積を占め、その人口は約230万人、その約8割が学生と言う学生の街。その内部は23の学区に分かれていて、学区ごとに特徴を持っている。またその科学技術は学園都市外部と比べ20年から30年ほど進んでいると言われる最先端都市である。

そこで行われているのは、「記憶術」や「暗記術」という名目での学生達での超能力研究。そしてその過程で特殊な能力を得た学生は、七つの段階でその力の程度を区切られている。

無能力者《レベル0》　測定不能や効果の薄い力
低能力者《レベル1》　スプーンを曲げる程度の日常では役に立たない力
異能力者《レベル2》　レベル1とほとんど変わらない程度の力
強能力者《レベル3》　日常生活において活用可能で、便利と感じられる力
大能力者《レベル4》　軍隊において戦術的価値を得られる程の力
超能力者《レベル5》　単独で軍隊と戦える程の力

そして学園都市の目的とされ、未だ誰も到達した者がいない領域である

絶対能力者《レベル6》　神の領域の能力

学生達はそのレベルに見合う環境を提供され、その力をより向上させるべく日々努力しているのである。

故に学園都市が彼らを評価する基準はその能力のレベルに因るところが大きく、レベルが低いと他にどんな特技を持っていようとその評価が上がることは稀にしかない。そしてその中にはそのことを不快に思う輩もいる訳で……

その少年は、ある裏路地を歩いていた。

ここは第十九学区――再開発に失敗し急速に寂れてしまった学区である。故に廃ビルや廃屋が多く。スキルアウトという多くがレベル0で構成された不良達の巣窟でもあり、あまり治安がいいとは言えない。

そんな学区の裏路地をその少年は歩いていた。当然そんな場所を歩いていれば不良に囲まれてしまうし、彼の体付きからして返り討ちにしてしまうなんてことできるとは思えない。

そして案の定、

「ねぇ、君。こんな所一人で歩いてちゃダメでしょ」

「そうだよ。ここらにはね、僕らみたいな恐〜い人達が沢山いるんだから、用心しなきゃ。と言うわけで、君には少しばかり痛い思いをしてもらうんだけど準備は出来てるかな？」

とまあ、こんな感じに話しかけてくる訳だが、肝心の少年の方はというとそんな言葉は気にも留めず真っ直ぐ道の真ん中を歩いていく。

「おい何とか言ったらどうなんだ？」

しかし少年は答えず不良のいる方へ向かっていく。

「こりゃあ、少しばかりじゃ済みそうにねぇなぁ」

そう言って不良の一人が少年に殴りかかる。しかし、少年は身構えるどころか不良の事すら視界に入れようともしない。

そして不良の拳が少年に触れた時思わぬことが起こった。不良の拳が、腕が、体が、少年の体をすり抜けたのである。その出来事に不良は一瞬だけ呆然とした後に叫ぶ。

「てめぇ、能力者だったのか。くそ、一体何だこりゃあ幻影か」

そこでようやくその少年は口を開いた。

「違ぇよ。幻影なんかじゃない、俺はちゃんとここにいる。だがお前は俺に触れられない。待ち合わせをしているんだ、邪魔しないでくれるか？邪魔するんだったらここで全員殴り倒すがそれでもいいか？」

「へっ、威勢のいい餓鬼だな。お前にそんなことできんのかよ？」

少年はうんざりしたような顔をし、はぁという大きなため息をついた後「やっぱりお前ら、俺の事知らないのか。情報開示してないだけ知名度は全然高くないみたいだなぁ」と残念そうに呟く。

「ごちゃごちゃ、言ってんじゃねぇぞ」

再び不良達が襲い掛かると少年は、

「って言うかお前達が付けた『万物透過（リアリティゴースト）』って言う呼び名はどうしたんだ。まぁいいか。そろそろ本格的に活動しようとしてた所だし。じゃぁまぁお前達にはここでご退場願おうか？」

そう言ってその少年は不良の群れの中に突っ込んで行った。

第二話　待ち合わせと唐突な遭遇

神命　選は、第十九学区の裏路地に立っていた。
もう少し正確に言うと、彼は裏路地に倒れている不良達の中心に立っていた。

「おいおいどうした。もう終わりか」

彼はまだ意識のある不良の一人に話しかける。

「まさかお前が本当にあの『万物透過』だったのか。た、助けてくれ。もうこんなことしねぇよ。だ、だから……」

彼が怯えているのも無理はない。彼らの攻撃は一発も当たらなかったのだ。いや当たらなかったと言うよりはすり抜けた。まるで幽霊が壁を無視して進むように。そして此処からは一方的に殴り続け今に至る。

「なんだなんだ。俺のこと知ってんじゃねぇか。まぁ、それが俺の能力名って訳じゃないんだが。大丈夫だ、別に殺すなんてことしねぇよ。だがここで俺にこんなことしたってことは、他の奴にもしたってことだよなぁ」

「わ、分かってる。も、もう一切こんなことしない」

「うんうん。物分かりが良い奴で良かった。おかげで自宅で出来る簡単人柱を作る羽目にならなくて良かったよ」

そう言って彼は急いでその場を後にする。ある喫茶店で待ち合わせをしているのだ。不良に絡まれた所為で5分ほど時間に遅れてしまった。よって彼は少し急ぎ足でその喫茶店へ向かっている。

喫茶店と言っても大通りに面し多くの客で賑わっているような所ではない。こんな裏路地を通らないと行けない様な寂れてしまった店だ。客の出入りはほとんどない。こんな店を経営している店主はと言うとこの店の利益で生計を建てている訳ではなくあくまで趣味である。まぁ彼がこんな店を目指していた訳ではないのだが……

神命はいつもカウンターの一番右端の席に座る。そこが彼の専用席のようなものになっている。

「店主、いつもの紅茶を頼む」

彼がそう言うと店主は慣れた手つきで紅茶を用意する。

「また紅茶か？たまにはコーヒーとか飲んでみたらどうだ。一応ここはコーヒー中心の店ってことになってるんだが」

「別にいいだろ？ここに来る客なんて俺以外に両手の指で数えるほどしかいないんだし。って言うかあんな泥水誰が飲めるか。何であんな物存在してるんだ」

何かこんな言葉を聴いたらどこぞの第一位が襲い掛かってぐちゃぐちゃじゃ済みそうにないことになりそうだが、気にしないでおく。

「あ、今おじさん傷ついちゃったなぁ。今すぐ謝れ。全世界１５０億人のコーヒー愛飲者に今すぐ謝れ」

「おい、何か世界人口が物凄いことになってるんだが」

紅茶をすすりながら神命は言う。その態度に店主は呆れた様に呟く。

「ったく、俺はコーヒー店がやりたくてこの店を開いたんだ。なのに何で俺はこんな餓鬼に紅茶を淹れて、その上コーヒーを馬鹿にされなくちゃならんのだ……」

「いいじゃないか。どうせ話相手なんか俺くらいしかいないんだし。はぁ」

「どうした？溜め息なんかついて」

「あんたってさぁ、『６』て数字についてどう思う？」

「どうしたんだ、突然」

『６』――素因数分解すると２×３であり１，２番目の素数を掛けると出来る数字。その数字は自然界の中にも多く現れており、蜂の巣や亀の甲羅等の六角形、いわゆるハニカム構造と言う奴だ。六角形はその他色々なところに現われる。例を挙げると味噌汁などの汁の対流などだ。（暇があったら一度よく見てほしい。少し感動する。）また素数と『６』を使って円周率を表現できるなど兎に角とても有り触れた数字である。そして何より……

「地味だと思わないか？」

「確かに少し地味って印象が無くも無いな」

「無くも無いじゃなくてあるんだよ。なんかさぁ、音楽とかのランキングで第六位とか言われてもピンと来ないと思う訳。第三位とか第五位とかまでなら曲名覚えてると思うんだけど第六位となると一気にぼやける様なきがするんだよね。第七位だって『あ、七位だから覚えよ』とかなるだろ?でも六位って地味だろ。覚えてもらえないんだよ」

「何?6に何か恨みでもあるの?何で6でそんなに悩んでるの?俺に相談してくれてもいいんだぜ」

ほんの少しだが店主が心配そうな顔をつくる。

何故彼がこの『6』と言う数字を嫌っているかと言うと彼が学園都市の超能力者の第六位であるからだ。彼が本当に『6』と言う数字を嫌っているかと言うとそうではないのだが、第六位と言う称号を与えられた所為で低レベルの能力者に舐められるのが彼にとって非常に不快なのだ。また自分が戦った相手に自分がレベル5だと言っても「誰だっけ?」と言われる始末である。

「いやまぁ、相談する程のことでもないんだがな。まぁ気にしないでくれ。そう言えば、この店に高校二年生くらいの女が来なかったか?待ち合わせをしているんだが」

店主との会話ですっかり忘れていたが彼はここに待ち合わせで来ていたのだ。

「いや見てないな。そもそもここらをうろつく高校生なんてスキルアウトかお前ぐらいのもんだろ」

「そうか」と神命は呟き紅茶を一気に飲み干す。その後、店主の「彼女か何かか？」という問いに対しては華麗にスルーし代金を置いて店を出る。

（さて、何処から探そうか。あいつの居そうな場所って何処だったっけ）

そう思いながら店に入る前に殴り飛ばした不良達がこちらを見て苦笑いしているのを他所に路地を抜け学区を移動する。

ここは第七学区のとある通りである。

いつもなら人通りもありそれなりに賑わっている筈なのだが、今日はいつもとは違う。この通りには『いそべ銀行』と言う銀行があるのだが昼間にも関わらずシャッターが閉まっている。しかもそのシ

ャッターにはつい先ほど突然起きた銀行内部から爆発により強引に人一人が通れるほどの穴が開いてしまっている。

「初春、現場に着きましたの。ですが犯人には逃げられてしまったみたいですわね」

突然空中に姿を現した少女の腕には緑の腕章が付けられている。

風紀委員（ジャッジメント）だ。風紀委員とは学生（レベルは問わない）によって形成され、学園都市の治安維持にあたる組織だ。風紀委員になるには「九枚の契約書にサイン」し、「十三種の適正試験」と「４ヶ月に及ぶ研修」を突破しなければならない。

そして今回この第七学区で起きた能力者による強盗事件を解決すべく彼女は駆けつけて来たのだ。

「初春、状況はどうなっていますの？」

「ちょっと待ってください、白井さん。今、情報が出ました。犯人は３人、その内の一人はレベル３相当の発火能力者（パイロキネシスト）です。現在は銀行のシャッターを破壊して外部へ逃走、南東方向へ向かっている様です」

「分かりましたの。これからその犯人達を追いかけますのでサポートして下さいですの」

彼女に初春と呼ばれているこの少女、実は凄腕ハッカーで守護神（ゴールキーパー）と呼ばれそこらの監視カメラの映像を盗み見るのは超楽勝だったりする。

「白井さん、先ずはそこから通り沿いに南下して三つ目の角を右へ曲がって下さい。そうしたら……」

神命　選は第七学区に来ていた。

（おいおい、これだけ探してんのに居ないぞあいつ。携帯も通じないし拉致られでもしたのか）

ここに来るでに彼は結構な距離を歩いている。正直疲れているし面倒くさいと思っているのだが。

（授業の時間もとっくに終わっているし、忘れて寮にでも帰ったのか？もういいや、そうに違いない。帰るか）

そう思って通りを歩いていると、前からなんか知らないけどすごい形相で走ってくる3人組がいる。彼らの顔にはバンダナが巻かれており、手にはナイフを持っている者もおり、恐らく現金が入っているであろう大きな鞄を持った者もいる。

（ああ、ええとあれか。銀行強盗的な奴か。ったく不良に絡まれる

わ強盗が現われるわ、今日は凶日か。それもこれも俺が第六位のレッテルを貼られているからだ……）

止めようか止めまいか迷っている彼に走りながら強盗の一人が叫んでくる。

因みに彼は考え事をしているとあまり周りの音や様子が入って来なくなる。だが……

「てめぇ邪魔だ、退けよ屑が。引っ込んでろ」

何故か知らないけどこの言葉だけははっきりと聞こえた、何故か知らないけど。要するに頭にカチンと来たのだ。

「てめぇ聞こえなかったのか。早く退けって言ってんd……」

その言葉を言い切る前に彼の体は3メートル程後ろへ吹っ飛んだ。神命が一瞬にして彼の前に移動し思いっきり腹部を殴ったのだ。それでも3メートルは飛ぶことは無いと思うが。

「く、くそ。いったい何が……」

もう一人の男が叫び直後ナイフを振り回してくる。しかし神命は動じない。動じないと言うより動かない。ただ……

「拒絶」

と呟くだけ。

がやはり男の体は神命の体をすり抜け体勢が崩れる。そこへすかさず蹴りを入れ気絶させる。気絶するような蹴りでは無いはずなのだ

が。

「お、お前はまさかどれだけ殴ろうとしても、拳銃で撃とうとしてもその体を通り抜ける。故に現実味のある幽霊――『万物透過（リアリティゴースト）』と呼ばれるあの……」

その言葉に神命は少し感動を覚える。そして思う、ああこいつだけは生かしてやってもいいか……

そう思う前に男の方が余計な言葉を挟む。

「く、くそ。こんなところで終わるってのか。こんな、この程度の小説で、この程度の奴に……いや俺はここで止まる訳にはいかない。俺は原作で……数多の小説で……様々な奴の解説役を務めてきたんだ。こんなところで俺は立ち止まる訳にはいかないんだあぁぁぁぁぁ」

よく分からない事を男が叫んだ。

（ああ駄目だこいつ、俺だけでなく作者まで侮辱した。こりゃあ……）

男が手を前に掲げると手のひらに火の球が発生した。それを男は選に向かって投げつけてくる。

狙いは正確だった。

しかし彼はこう呟くだけ。

「炎を選択、その軌道を操作」

すると彼の体に近づくにつれ横へそれていく。そして彼の横を通り過ぎたと思ったら火の玉は彼を中心として半円を描きUターンして男の元へ向かっていく。

「な、何ぃ！」

そう叫ぶ強盗の腹部に投げる前より明らかに加速した火の玉が直撃し後ろへ吹っ飛ぶ。

「『万物透過（リアリティゴースト）』がこんな力使うとは聞いてないぞ……」

それだけ呟くとその男の意識も遠のいていく。

「はぁ、もう終わりかよ。どうしよこいつら、何か一方的すぎて俺が悪者みたいになってる気がする」

そう言うと神命は男達の体を近くの路地に投げ込む。

（現金はどうしようか。これくらいは風紀委員の支部にでも持って行った方がいいな）

そう思って彼は鞄（何か黒地にＰＵ○Ａと書かれている）を拾い上げると足を近くの風紀委員の支部へと向ける。

「（って言うかさっきの強盗俺の事知っていたのに襲って来たな。やっぱり第六位と言うレッテルが……上位陣でも潰していった方が手っ取り早く……）」

等とぼやいていると、後ろの路地から一人の少女が飛び出してきた。

ここでもう一度だけ言っておこう、彼は考え事をしているとあまり周りの音や様子が入って来なくなる。例えば、このくらい考え込んでいると。

「それで初春、犯人が持っている鞄は黒地にＰＵ○Ａと書かれているのですのね。分かりましｔ……遭遇してしまいましたわ。これから捕縛します。至急応援を」

そう無線に叫ぶと彼女は腕章を付けている腕を前に突き出し腕章を見やすくもう一方の腕で吊り上げると

「ジャッジメントですの、大人しくお縄に……って聞いていますの？」

当然神命は反応しない。彼は今どうやって自分の名を広めて行こうか考えているのだ。反応している暇などない。

その姿を見た彼女は素早く走り彼に近づくと彼の背中に触れる。その瞬間立っていた筈の彼は地面と水平に空中に現われ地面に叩き付けられる。

「痛ってぇ、何だ、また不良か？」

「ジャッジメントですの、大人しくお縄について下さいですの」

「お前風紀委員のくせに一般人に攻撃していいと思ってんのか。そもそも俺がなにしたってんだ。こりゃあ気絶だけじゃ割りに合わないぞ」

「あら、ようやくお気づきになりましたの？強盗のくせに鈍いですわね。戦う気は満々みたいですけど」

「お前そんなこと言っていいのか？俺本気でやっちゃうよ？」

そう言うと神命は彼女に向かって走り出し持っていた鞄で叩きつけようとするが、一瞬で彼女の姿が消えた。

「そうか。お前、空間移動能力者（テレポーター）だったのか」

「今頃、お気づきになりましたの？」

「ああまぁ。ならこっちもそれに対応するだけだから」

「只のレベル３の発火能力者に相手できるほど私は甘くありませんのよ」

「何言ってんだ？じゃあ、そろそろ本気でも出すか」

すると彼は呟く。

「空間移動能力者を選択、空間に固定。
空間移動によって移動した物体を拒絶、身体を透過」

その言葉を聴くと彼女はこれは少しやばいですのと感じ素早く身構える。

「な、何ですの？あなた発火能力者のはずではなかったですの？」

その言葉に神命は反応せず一直線に走って来る。

彼女はスカートの中に隠し持っていた金属矢を数本手に取り

「大人しくしなければこの金属矢を体内に直接テレポートさせるだけですの」

彼女の手にあった金属矢は消え走って来る神命の体内に移動した筈だった。しかし彼女は彼の足元にカンと音を立てて金属矢が落ちているのに気がついた。

（な、何ですの？確かに演算は合っていましたの。でも彼の体には傷一つないと言う事は……彼の体をすり抜けた？となるとこれは少々厄介ですの）

そう思って走って来る彼の攻撃を避けようとテレポートしようとしたが、

（テレポートが出来ませんの！？ま、まずい。このままでは……）

彼女の予想は的中した。拳が彼女の腹部に突き刺さり痛みが走る。しかし今回はさっきの強盗達とは違い体が吹っ飛ぶなんてことはなく、ただみぞおちにパンチが入っただけだった。それでも彼女を気絶させるには十分だったのかドサッと地面へ倒れこむ。

そこで神命は我に返る。

「はぁ、やっちゃったよ……いくらこっちから仕掛けた訳じゃないとはいえ、これはなぁ……」

（どうしよう、支部へ行くのに荷物が増えちゃったなぁ）

などと考えていると、

「黒子！！」

叫び声がした。

「あんた、私の後輩に何してくれてんのよ！！」

そう言ってもう一人の少女が神命の方へ向かってくる。

第二話　待ち合わせと唐突な遭遇（後書き）

選と強盗のやり取りで少し遊びすぎた。後悔はしていない。

第三話　電撃姫との対決

「あんた、私の後輩に何してくれてんのよ」

神命　選は、不意に後ろから声を掛けられた。

常盤台中学の制服を着たその少女。神命は彼女の名前を知っている。

学園都市の７人のレベル５の第三位――超電磁砲（レールガン）の御坂美琴である。

「あんた一体何したのか分かってるんでしょうね？」

（何したって言われてもなぁ。何か襲って来たので返り討ちにしただけなんですけど……なんてどうせ言っても信じないだろうな）

はぁと大きな溜め息をつく神命。

「あんた、溜め息なんかついてないで何か答えなさいよ」

（って言うかよく考えたら寧ろこの状況って都合が良いんじゃないか？ここで第三位を倒したら……いやでもそんなことしたら今度こそ完璧に悪役だな）

神命はもう一度大きな溜め息をつく。

「何だ、こいつ第三位の知り合いなのか？」

「後輩だって言ってるでしょ。それにしてもあんた、私がレベル5だって知ってるのに随分と余裕かましてるのね」

「俺にとってお前はさほど脅威ではないからな」

「へぇ、私じゃ相手にもならないと？」

「そういうことになるな」

「じゃあ戦う気があるってことで相違ないのよね」

「戦ってもあんまりメリットはなそうだけど」

案外挑発に乗りやすいんだなぁと思いながらだるそうに神命は喋る。

「何だ、掛かって来ないのか？」

「言われなくても！」

その直後、御坂がビリビリと帯電したかと思うと勢いよく放たれた電撃の槍が神命目掛けて襲い掛かる。

しかし神命はと言うと相変わらずダルそうに頭を？き立っている。ただ「電撃を拒絶」と呟くだけで。

だがそれだけで異変は起こる。電撃は彼に直撃せず、いや直撃はしたのだがそこに何もなかったかの様に彼の後ろ通り抜ける。

その光景に御坂は一瞬唖然としたが再度電撃で複数の槍を形成し飛ばした。

そして彼に電撃の槍到達しようとした瞬間、彼は何かを呟く。直後、彼の体が大きくぶれ電撃の槍全ては外れていた。見るとさっき立っていた位置から１０ｍほど離れた位置に彼は立っている。

（何なのあいつの能力、偏光能力（トリックアート）か空間移動と思ったけどぶれる寸前に少し足を動かしていたからどちらかと言うと肉体強化っぽいわね。少し様子を見てじっくりと見極めてやる）

御坂は今度は彼に雷撃を浴びせようとするが、それを遮る様に選がまた呟く。

「空気を選択、空間に固定。光を拒絶、身体を透過」

すると今度は彼の体の色が次第に薄れ完全に見えなくなってしまった。まるで気体が霧散するように。

（消えた！？見えなくなったってことはやっぱり透視能力（クレアボイアンス）か偏光能力みたいな視覚か光学操作系能力者の可能性が高いわね。これならさっきの現象も説明がつく！）

「ちょこまかと逃げ回ってじゃ勝負にならないでしょ。正々堂々と勝負したらどうなの。それともそうして逃げ回ることが、さっきのあんたの余裕の源だったの？」

すると頭上から声が聞こえてくる。

「いや別に逃げ回ってた訳じゃないんだが。少しは攻撃に転じて欲しいのか？」

神命は御坂の頭上でうつ伏せの様な状態で浮いていた。

「あんたの能力は相手の五感を狂わせて幻覚・幻聴を起こさせ自分の位置を誤認識させる能力。これでさっきあんたの体がぶれた様に見えたのも、霧散するよう消えたのも、今あんたが私の頭上に浮いているのも説明がつく。ならば私にだって対策はある。あんたが攻撃に転じようとしても、あんたの能力なら高が知れてるわ」

自信有り気に答える御坂だが、

「残念ながらそうじゃないんだ。まぁそう考えるのが普通だけど。因みにその対策って一体どんな奴なんだ？」

「知っての通り私は発電能力者（エレクトロマスター）のレベル５。１０億ボルトの出力を誇る電撃をはじめ強力な電磁波によるジャミングや電波傍受、磁力操作によって砂鉄を操ることが出来る。だから電磁波を使ってレーダーのようにして死角からの攻撃にも対応できる。あんたの攻撃は私には当たらないのよ」

「あぁそういう使い方もあるのか、流石に発電能力者は応用性が高いな。まぁ、こっちもそれに対応するだけなんだが。　電磁波を拒絶　」

その直後、彼女の視界からだけでなく感知していた電磁波ですら選の姿は消えてしまった。

（そんな……あいつこんなことにまで対応できるの。一体どんな能力なのよ）

そんな彼女の思考を他所に再び地面の上に現われた神命は喋り続け

る。

「んじゃ、そろそろ攻撃しますか。若干逃げ回るのにも飽きてきたしな」

そう言うと彼は腕を空に向けて掲げる。

「光を選択、手の平の一点に圧縮」

すると彼の手のひらの先に黒い物体が現われた。黒と言っても色としての黒ではなく漆黒、光沢など全くなくただただ黒い。

「超電磁砲を撃つなら今だぞ。今なら隙だらけで当たるかもしれないし、出し惜しみするくらいなら撃ってしまった方がいいんじゃないか」

彼の言葉に美琴は驚いていた。これまで何人もの能力者と相手をしてきたが、自ら超電磁砲を催促してきた相手などいなかったからだ。

「どうした、撃たないのか？こっちは後十数秒で完成するんだが」

十数秒で完成すると彼は言った。それが自分に残された猶予だと彼女は悟った。しかし、たとえ超電磁砲を撃ったところで彼に当たるのか？恐らくそれは”否”だ。彼の居場所すら正しいのかどうか分からないし、たとえ見えている場所にいたとしてもすり抜けてしまうだろう。

「ようやく完成したな。これ作るのに時間掛かるからあまり使いたくないんだよな」

そう言いながら彼は掲げていた手を前は動かし黒い物体は球体から刀のような形へ姿を変えていく。

「どうだ？日光で作った剣だ。見た目は黒くてあれだがそれは目に剣からの視覚情報が入って来ないだけで中は、レーザーで構成されているから切れ味は抜群だぞ」

そう言って彼はそれを地面に突き刺すと地面のアスファルトはいとも簡単に溶けていく。こんなものに触れたらいくら第三位の超能力者と言えどひとたまりもない。

「正直、俺より序列が高いからもう少しやってくれると思ったけど、やはり相性的には最悪だからこんなものかな。どうする？降参するか？」

「わ、分かったわよ。降参すればいいんでしょ」

「分かればいいんだ」

そう言って彼は黒い剣を蒸発させる。そこへタイミング良く気絶していた白井　黒子が目を覚ます。

「あれ、何でお姉さまがこんなところに？確か私は連続発火強盗を追いかけて……ってそこにいる殿方が３人の強盗の一人ですの！」

「あんた、強盗だったの？」

御坂が神命に疑いの目を向ける。

「違う違う。俺はただ走ってきた強盗3人を返り討ちにして、現金の入った鞄を風紀委員の支部に届けようとしたら、そいつが俺を強盗と間違えて襲い掛かってきたんだよ。まぁ、そいつも返り討ちにしたけど……ほらっそこの路地に3人捨ててあるから確認してみろ」

白井が確認しに行くと確かに男が3人気絶して倒れており神命の無実は証明され、男達は警備員達に補導されていった。

「黒子…ろくに確認もしないで攻撃を仕掛けたの？」

「だって初春に聞いていた通りの特徴の鞄を持っていましたし、地味な外見と言うのも一致していたんですもの」

「おいっこいつ今さらっと地味って言ったよな地味って」

神命にとってこの言葉が今日最大の傷になったことを彼女が知る由もなかった。

「そういえば、あんた私より序列が低いってことはレベル5なの？」

「ああ、第六位――――『自由選択（フリーダムセレクト）』の神命　選だ」

「第六位がこんなに強いなんて聞いたことないわ」

「序列が高いほど強くなる訳じゃないからな。あくまで能力研究の応用が生み出す利益が基準だから、ほらお前だって『妹達』の件で……いやこれは流石に言わないほうがいいな。まぁそういう訳だ」

「って言うか、結局あんたって一体どんな能力なの？」

「それは私も聞きたいですわ。私のテレポートも無効化されてしまいましたし、正直検討がつきませんわ」

「詳しいことは言えないが俺の能力はは主に二つに分けられるんだ。先ずは『拒絶』。これは自分が触れたくないと思ったものをすり抜けることが出来る。使うには少し条件があるがすり抜けたい対象の形状や大きさ、性質などさえ把握していれば使うことができる。例えば無色の液体でも別に塩酸なのか硫酸なのかそれともただの水なのかは把握してなくてもあの液体ってだけですり抜けられる。御坂の電撃を避けたのはこれだな」

「じゃあ私の金属矢を避けた原理もこれですわね」

「そうだ」

「ですが、これでは私のテレポートを無効化したことについては説明できませんわね」

「それは二つ目の『選択』で説明できる。これは結構話すと長くなるんだが、簡単に言うと遠くにある物を近くに引き寄せたり、普段は触れることができない物触れることが出来る、例えば気体とか光とかだな。後は物体の位置の固定だな、これは固体だけでなく気体にも使うことが出来る。対象物の座標を固定させるんだ。自分の足元にある空気を固定して乗ることが出来たり、空間移動能力者を今いる座標に固定して能力で移動できなくしたりできる」

「それで中に浮いたり黒子の能力を無効化したり出来た訳ね」

「主な説明はこんな所かな。はぁ今日は結構疲れたな、そろそろ帰るとするか」

「またお会い出来たら良いですわね」

「いやもう、いきなり襲われるのはお断りだけどな」

そう言うと彼は二人の前から急ぐように立ち去ってしまった。

「それにしてもお姉さまが負けてしまうなんて、あの方随分とお強いですのね」

「べ、別に超電磁砲も撃たなかったし、手加減してあげたのよ」

「まぁ、お姉さまが御見栄を張るなんて珍しいことですこと」

「うるっさいわね、こっちだってプライドってものがあるのよ、プライドってものが」

そんな会話を交わしながら二人は人ごみの中へ消えていった。

第三話　電撃姫との対決（後書き）

三話目にしてようやく能力名が出せた。
ぐだぐだにも程がある……
後もっと文章力を上げたい。

神命の能力はこれだけではありません

第四話　追憶と甦る約束

七年前、此処は学園都市のとある研究所のある一室。

薄暗くじめじめとしたその部屋には多くの子供達がいた。彼らの顔からは生気というものがほとんどと言ってもいい程感じられない。彼らはある実験の被験者だった。しかし彼らは望んで実験に参加している訳ではない。彼らは『置き去り（チャイルドエラー）』だった。

『置き去り（チャイルドエラー）』――入学した生徒が都市内に住居を持つ事となる学園都市の制度を利用し、入学費のみ払って子供を寮に入れその後に行方を眩ます行為、またはその子供の事を指す。

ここではよくあることだった。

定期的に呼び出される彼らが次にこの部屋に戻ってくる時、その人数は明らかに変化している。しかし、それでもこの部屋から子供が居なくなることはない、絶対に。

この部屋には防音機能が施されているのか外部の音が入ってくることも、内部の音が漏れることもない。そんな中でも何か悲鳴のような声が聞こえるような気がする、聞こえるはずがないのに。

此処には死が溢れている。呼び出され部屋を出て通路を歩いている時、大きな袋を……そう丁度此処にいる子供達くらいの人間が入れそうなくらいの大きな袋が運ばれているのをよく見かける。その袋にはよく見ると赤いシミが付着していたり、生臭いような臭いがする。中を確認する必要はない。どうせ死が詰まっているだけだ。

そんな場所で生きている彼らの瞳の中には希望の文字はなかった。

「私達……此処で死んで行くの？」

茶色の長い髪を持った、いつも物静かな少女が言った。やはりその少女の瞳にも輝きはなく濡れている。

それに対し少年の眼にはやる気や気迫の様なものは感じられない……しかし何処となく野望に満ち、少なくとも絶望に埋め尽くされている様には見えない。そんな瞳で彼は彼女を見返す。

「もう二度と外に出られないのかな？」

出ることは出来ない。

そんなことは有り得ない。

いずれ死ぬ、その時が来たら死ぬのだ。

少年は答えた。

「そうだろうな。このままだとここにいる全員殺される」

少女は彼の瞳を見つめながらもう一度少年に呟いた。

「……怖くないの？」

「……」

少年は少し考え込むように間を空けてから言った。

「そりゃ怖いさ。だけどそう思っていても何も始まらない。ここで死にたくなければ、何か行動を起こすしかない」

「死ななくても済む方法があるの？」

少女は呟く。

「分からない。だがこんな所で死にたくはない、死んでたまるか。俺はここを脱出する。脱出して……それから奴らを、この町を出し抜く」

少年は自分の手を見つめてそう言った。

その言葉に少女は驚き頬を垂れていた液体を拭うと、ほんの少し希望を取り戻したかのようにその瞳を見開き少年に問う。

「もし……もしそんな時が来たら、私も……連れて行ってくれる？」

そんな少女の問いに少年は「もちろんだ」と、そう答えた。

「だから、そんなに泣くんじゃねぇ。後これからはもう死ぬとかそういうことを言うのは無しだ。言っただろ？死ぬつもりはないって。だからお前も生きる努力をしろ。そうすればここから出してやる、絶対にだ」

「うん、分かった」

少女は到底元気などとは言えないがそれでも希望には満ちた声で返事を返した。

七年前、ある少年と少女が交わした遠い昔の約束。

そんな約束を交わしたわずか数日後、この研究所は突如としてその姿を消した。

学園都市第六位の超能力者である神命　選は、第十八学区にある彼の学生寮に帰ってきた。

彼も一応は学園都市からは学生と言う扱いを受けており、書類上だけだがこの第十八学区存在する長点上機学園という学校に在籍していることになっている。

長点上機学園とは能力開発において学園都市ナンバーワンを誇る高校であり、学園都市の「五本指」の一つに数えられる超エリート校だ。またこの学校の学生寮は学生寮とは思えないほどの広さと高級感を兼ね備えセキュリティー等も万全である。

神命はそんな学生寮の3階に位置する自分の部屋の前にやって来た。そして彼は鍵を取り出すこともなく自身の能力を使い部屋に入る。しかし、自分の他にも誰かがこの部屋にいることに気がついた。

彼はその能力故に開ける為の用途しか持たない鍵は持ち歩かない。正直このドアもコンクリートで塗り固めてしまった方がより安全なんじゃないか、そもそもドアなんて必要ないんじゃないか等と考えてしまうほどだ。よって彼はこの部屋の鍵をある少女に渡している。

（強引に奪われたと言っても過言ではない）

そして案の定、彼の予想は的中する。

「選、遅かったじゃない」

部屋の奥から少女の声が聞こえてきた。

彼女の名前は月極（つきぎめ）　高嶺（たかね）、長点上機学園と同じく五本指に数えられる霧ヶ丘女学院に通っている。

「何処へ行ってたのよ？探したのよ」

「それはこっちの台詞だ。ここにいるなら連絡の一つでも入れるだろ普通」

「だって携帯に繋がらなかったんだもん」

「って言うかいくら鍵を渡しているからってそう何度も入って来られるとなぁ。お前は霧ヶ丘女学院の生徒だろ。いくら俺が許可してるからって少しは遠慮したらどうなんだ？」

「いいじゃん別に。此処のほうが広くて過ごしやすいだから」

彼女とは二年ほど前からの付き合いだ。（断じて付き合っていると言う意味ではない）七年ほど前とある研究所で出会い五年ほど離別していたが二年前に再開したのだった。彼女に鍵を預けっぱなしであるためこの部屋には入り放題で半自宅状態である。また彼女が在籍する霧ヶ丘女学院は長点上機学園と同じく第十八学区に存在するためここからでも余裕で通えたりする。

「まぁいいけど。じゃあ俺疲れてるから寝るわ、おやすみ。帰るんだったら帰るで戸締りはきちんとしていけよ」

そう言って神命はベッドに横たわる。

「ちょっと、女の子が部屋にいるのにその態度は何？何かこうもっと気を使いなさいよ」

しかしそんな言葉は気にせず夢の世界に旅立つ神命。

仕方なく彼女は彼の布団を綺麗に掛け直しぶつぶつ呟きながらベッ

ドに腰掛けそのまま横になってしまうのであった。

第四話　追憶と甦る約束（後書き）

今回はヒロイン登場回でした。
彼女の能力は後ほど紹介します。

第五話　虚々実々の大計画

神命　選が時計を見たとき既に針は8時を回っていた。

ここは長点上機学園の学生寮。昨日、彼は学園都市中を歩き回り、二度も不良に絡まれてそれを返り討ちにした挙句、何故か襲ってきた空間移動能力者と学園都市第三位の少女二人を相手取って、またもこれを返り討ちにしてかなり疲労した後ようやくこの学生寮にたどり着いたのだ。

何故かその時誰かいたような気がするが帰ってからすぐに寝てしまったためよく覚えていない。いたとしても今は8時20分、普通ならば学校はそろそろホームルームを始める頃であるから既に彼女はこの部屋にはいないだろう。

しかし今、彼はこんな事を気にかけている暇はない。これから彼は彼自身の名声を上げる為ある計画を実行に移さなければならないからだ。

現在、彼はある目的の為に学園都市暗部に関する様々な情報を必要としており、まずはその情報の収集から始めようと彼は考えている。

そしてその方法なのだが、学園都市には「書庫（バンク）」と呼ばれる総合データベースが存在し、その内容にはこの都市の学生ほぼ全ての個人情報や暗部組織などに関する様々な情報が記録されてある。しかし、神命にはその情報を見る権限や、ハッキングすることが出来る能力はない。ならば何処から情報を入手するか。学園都市には、表向き

は全うに運営されている様に見えて、裏では公にすることの出来ないような非人道的な実験を行うと言う実験施設が数多く存在する。そしてそこには書庫にすら存在しない裏の情報が存在する。

つまりどうやって情報を入手するかと言うと、そういった研究所に片っ端から侵入しそこにある情報を頂くのである。また彼の能力は隠密行動に特化しており、その計画を実行に移すには十分すぎると言っても過言ではない。

後はそこらで不良に襲われている一般人を助けたりや、能力者による無能力者狩りを妨害するなどして地道にポイントを稼ぐとしよう。

そんな訳で神命は、外出する準備を始める。服は昨日着たまま寝てしまって今もそれを着たままだ。やろうと思えば能力で身体や服についた汚れを拒絶できそれでお仕舞いだが、気分的にそれはよくない為着替えを始める。着替え終わると彼は自身の能力の弱点を補うための道具を二つ用意する。

彼の能力名は自由選択（フリーダムセレクト）であり指定したものをすり抜けたり、引き寄せる、一定範囲内でその物体を操るなどがあるが、やはり欠点と言うものがある。

まず一つ目に遠距離の攻撃が出来ないことだ。彼は遠くにある物体を引き寄せることが出来るが、その範囲は彼を中心として半径が約３２ｍ程の球の内部である。だが、引き寄せた物体を操ることが出来る範囲は彼を中心としてわずか７ｍ程にまでに限定されてしまう。その為いくら大量の水を操ろうが、周りの光を圧縮してそれを放とうがその範囲を抜けると能力の効力を失われ攻撃力は激減してしまう。そのため彼は、いつもハンドガンを持ち歩いている。しかし、ほとんど使わずに済んでしまうし、弾丸も消耗品である為使用する

場面は滅多にない。

二つ目に挙げられるのが、呼吸である。彼は指定したあらゆるものをすり抜けることが出来るが、当然のことながらその中に空気はない。その為、分厚い壁を抜けるときや地中、水中での呼吸は不可能となる。よって彼はいつも酸素ボンベを所持している。酸素ボンベと言ってもよくダイバーが背中に背負っているような巨大なものではなく、ペットボトル大のものに液体酸素が入っており呼吸する都度に気体へ戻して使うものだ。これ一本で、約３０分の呼吸が可能であり普段彼はこれを二本持ち歩く。

そんな物の準備も済ませた神命は、早速寮を出て町へ繰り出す。途中でコンビニに立ち寄り今日の昼食を手に入れると、それを食べる為の場所を探す。

数分後、なかなかいい場所が見つからずに歩き回っていると幸か不幸か路地裏から悲鳴が聞こえてきた。恐らく不良が一般人相手にカツアゲでもしているのだろう。

（おいおい、いくら何でも不良多すぎじゃね？こんなに不良ばかり出てたら読者に飽きられるぞ……）

そんな神命の心の声も知らず５，６人の不良のものと思われる声が聞こえてくる。

（仕方ない、助けに行くか……）

そう思って彼は面倒くさそうに路地へ足を向ける。

「よし、財布も手に入れたし何かお財布ケータイなんかも手に入っちゃったよ。最近の携帯って便利だよなぁ。番号さえ聞き出しちゃえば限度額なんか知ったこっちゃねぇしな」

そう言われながら路地に座り込んでいる学生はそこらの建物の外に設置されているパイプに手を縛り付けられている。そこへまぁタイミングよく神命が現われる訳だ。

「おいおい6人で一人を襲うとか近頃の不良はめっきり臆病になったもんだなあ」

「あ？なんだてめぇ、文句あんのか。お前一人で俺らに敵うってのグルボァ！？」

「あ～はいはい、そんなのはもう聞き飽きたから簡単に済ませちゃいますので適当に掛かって来てくださ～い」

やる気の全くない声で適当にあしらう神命。

数分後6人全員を倒しきり、まぁこんなもんかと思って不良がもっていた財布や携帯などを縛られていた学生に返す。そして学生がお礼を言って帰って行き自分も帰ろうとしたその時だった。

「ふっ。やはり雑魚どもではこの程度が限界か」

暗闇の中から新たな気配。ザリッザリッという足音。そして近づいてくるこの町が生み出したモンスター。もう見るからにお前外国人用兵部隊として3ヶ国以上渡り歩いてきただろと突っ込みたくなるような巨漢むきむき人間兵器が、その姿を露にする。

「俺は内臓潰しの横須賀。あいつらを可愛がってくれたようだな」

とこれまたそんなに偉そうならこんなところでカツアゲなんかやってないで、俺の知らないどこかで世界を根底から覆すような計画でも練っていなさいよと突っ込みたくなる神命。

だがしかし、まずい所へ首を突っ込んでしまったようだな。ここは後悔の通じない場所。対能力者のエキスパート、この内臓潰しの横須賀サマの前に立っちまった以上、貴様はここで」

「あの～すいません。モツ鍋の何さんですって?」

「おーい、ちょっと待て。人の話は最後まで聞けって。って言うか全然違うし!俺サマの名前は内臓潰しの横須賀だって言ってるじゃん。だから、あの、何だ。どこまで話したっけ?そうそう、こほん。内臓潰しの横須賀サマの前に立っちまった以上、貴様はここでブギュルワ!?」

突然神命の周辺か発生した空気の塊がモツ鍋ナントカ横須賀さんの身体に直撃し壁に叩きつけられる。

「……ちょ、げぶっ。何でいきなり?人の話は最後まで聞けって言ってるじゃん。なのに何でそう途中で邪魔をしてビブルチ!?」

モツ鍋さんが何か言ってるけどそんなことは気にしないで神命は馬乗りにって追撃を入れていく。それはもう、がすがすと……。

「ちょ、待って、グボォ……ちょっとだけでも良いから話を聞いて、ひでぶっ……あ、謝るから、ぶべらっ……」

「ああ、すいません。ちょっといらいらしててついやりすぎちゃいました」

そう彼が言ったときにはモツ鍋さんはぴくぴくと小刻みに震えているだけだった。

よしっと一言だけ言って満足した彼が立ち去ろうとした瞬間唐突に後ろから大きな声が響いた。

「根性ってモンが足りてねえな、兄ちゃん。そんなんじゃ誰も満足しねえぞ」

第五話　虚々実々の大計画（後書き）

今回は（今回も？）少し短め。
最近試験があったりして忙しいので仕方ないんです。
しかも来週はまた色々と都合で４日間くらい投稿出来ない……

最後に誰が出てきたかは言うまでのないね！

第六話　説明不可能な生物

「根性ってモンが足りてねえな、兄ちゃん。そんなんじゃ誰も満足しねえぞ」

唐突に響く大きな声。
そっちを見ると、路地の出入り口辺りに仁王立ちする一つの影。

その影を見るなり神命　選は今朝用意していた拳銃をおもむろに取り出し躊躇うことなくその引き金を引く。

その銃声は正確に相手の心臓を捉えそしてそれに命中した。
ばったり倒れる謎の影。

何故躊躇いもなく彼が引き金を引いたのか、それは彼がその影の正体を知っているからだ。

「ふるわァァあああああああああああああああああああああ」

むくぅと起き上がるその影。此処までの所要時間、わずか三秒。ほとんど起き上がりこぼし状態の人影はさきほど明らかに心臓に一発もらったはずだが、まるで徹夜明けのおかしなテンションみたいな足取りでズンズンこちらに近づいてくると、

「何の前触れもなく一発くれるとは、やっぱ根性が足りてねえな。

あるいは我慢か？我慢が足りねえのか？総合的に判断するに、さてはお前、近頃のキレやすい子供のような類だろう！！マスコミから好き勝手言われるような立場になって哀しいと思ったことはねえのか！？」

しかしそんな言葉なんかお構いなしに三発ほどの銃声がこだまする。が、もはや人影はビクンビクンと震えるだけで倒れはしない。

「やっぱ死なないんだな」

「根性だよ、根性」

「いや別に聞いてないんだけど」

「強いて挙げれば学園都市の超能力者の一人、七人の内の七番目、ナンバーセブンの削板（そぎいた）軍覇（ぐんは）という事もある訳だが、そんなのは些細な事だ。――今ここで論じるべきは、このオレの中には怒涛の如く煮えたぎる根性が満ち溢れているという事だーっ！！」

両手を大きく広げ、背中を弓のように反らし、天に向かって吠えるように宣言する削板もしくは謎の根性熱血漢。どういう理論か知らないが、彼の背後がドバーン！！と爆発して赤青黄色のカラフルな煙がもくもく出てくる。

それを呆然として眺めている神命だったが、ふと我に返って首を振る。

「あのさ、そこまで大々的に宣言したのはいいんだけどさ、何で今更出てきた？」

「それはお前のような奴ががこんな路地裏で弱い者いじめをしているからだろうが！！」

その言葉を聴いて後ろで倒れていたはずのモツ鍋の横須賀さんがいつの間にか目を覚ましていた。

「あれ？何で俺弱い者扱いされてんの？そう言えばそこの第七位……この前はよくもやってくれたな……」

知らない内に起き上がっていたモツ鍋さんだが削板の言葉で相当傷付いていたのだが当の本人はそのことを全く自覚していない。

「何だ第七位、モツ鍋さんの知り合いなのか？」

「いや、全く覚えにないな。どこかであったことあるのか？」

「いやっ、大分前盛大に殴り飛ばしてくれたじゃねぇか。って言うかお前またモツ鍋って言そげぶっ」

言い切る前にまたも神命は拳を挙げる。全く、最初に出てきたあの都市型モンスター横須賀さんは一体何処へいってしまったのだろうか。実はこの横須賀さん、三ヶ月程前の３月１５日に削板にぼこぼこにされている。

「おいお前、この削板軍覇の前でまたも暴力を続けるのなら容赦はせんぞ」

「いや明らかにこいつの方が悪人面だよね。どう見てもこっちが暴力振るいそうだよね」

「しかし実際、殴っているのはお前の方じゃねえか」

「まぁそうなんだけど、一々説明するのも面倒だしもう俺帰っていいか？俺より下位の超能力者と戦っても俺には何の利益もないんだけど」

「何？お前、超能力者か」

「まぁな。俺は第六位の神命　選だ」

「第六位か、こんな根性の無さそうな男が俺より上とはな。よし俺がお前の根性を叩き直してやろう」

「根性が無いは余計だ。掛かって来るなら早くしてくれ。こっちは文字通り朝飯前なんだ」

「なら早速始めるとするか」

うおォォおおおおおおおおおおおおとまたもすごく五月蠅い叫びを上げる削板。そしてこれまた彼の背後がドバーン！！と爆発し煙を上げる。

「では行くぞ、すごいパーンチ」

そう叫んだ直後彼らの間には１５ｍ程も距離が空いていたはずなのだが、謎の衝撃波か念動力のようなものが飛んできて神命は３ｍ程吹っ飛ばされる。

「痛ぇ」

「んっふっふーん。これぞ学園都市第七位の真骨頂。どういう理屈かは知らんが何かしらの余波を遠距離まで飛ばす必殺技。『念動砲弾（アタックカノン）』とはこのことだァァあああああああああああああああああ！！」

ドバーンと明かされる新事実。だが一番大事な所が抜け落ちている。どうやってこの現象を起こしたかだ。以前彼はあえて不安定な念動力の壁を作り、それを殴ることで壊して遠距離まで衝撃を飛ばす必殺技だと説明していたのだがその時助けた学生――原谷矢文にそれは不可能だと否定されていたためもう適当にしか説明しなくなっている。

「もう色々と突っ込みたくなるような所満載なんだが。まぁ少しはどんな技か分かった。それじゃあ早々にやるとしますか」

神命は一呼吸置いて呟く。

「削板軍覇から発する力及び地面、周辺建造物を拒絶、身体を透過。電子を選択、自身に帯電」

そう言うと彼は地面に手を伸ばし地中から電気配線のような物を引っ張り出す。そして彼はその中から最も電圧の高そうなものを選びそれを引き千切り中の導線に触れる。するとビリビリと音を立て配線から漏れ出した電流が彼の周りを漂い始める。

「流石にこの程度では第三位には程遠いな。だが電撃の一つや二つくらいなら飛ばせるんじゃないか」

そう言うと彼の周りに漂っていた電流はその形を槍状に変化させていく。そしてその直後その神命は削板に向かって走り出し距離を詰

め、その距離が５ｍ程になった所で電撃の槍を放つ。近距離で放たれたそれは正確に削板の元へ向かっていく。

そして削板は少し後ろへ下がりながらこう叫ぶ。

「すごいパンチガード！！」

そう叫ぶと同時に彼の腕が蜃気楼のような謎の波動を纏う。この間、わずか四秒。そしてその腕は飛んでくる電撃の槍を地面に叩き落す。しかし、完全に防ぎきれた訳ではないらしくプスプスと彼の服が音を立てる。

「何だそれどういう仕組みだよ全く」

そう言いながらも神命はその距離を徐々に詰めていく。

「これぞ俺の真骨頂。念動力によって地球の磁力線を自らの手に集中させ、その誘電磁力の反発で電流を跳ね返す磁力戦線（オーロラガード）とはこのことだァァあああああああああああああああ！！」

「さっきのパンチが真骨頂じゃなかったのかよ。しかもまた飛んでも法則が作る出されてるし。でも完全じゃあないらしいな、大丈夫なのか？」

「根性だ、根性」

「明らかにそれじゃ無理だろ」

そして距離を詰めきった彼は叫ぶ。

「大気を選択、腕に纏い圧縮」

すると彼の腕の周りに空気が圧縮されていき、彼はそのままその拳を削板の腹部へ入れる。すると銃弾をも受け付けなかった彼の体が大きく殴り飛ばされる。が、信じられない速さで起き上がる削板。

「お前、この俺に直接拳を入れてくるとは案外根性あるじゃねえか」

「そりゃどうも」

「だがこの至近距離で俺のパンチを喰らったらどうなるだろうな、すごいパーンチ」

またもそして今度は至近距離謎の衝撃波のようなものが飛んできて神命に直撃する。しかし今回は先ほどとは違い少し怯みはしたものの盛大に吹っ飛ばされることはなかった。

「やっぱり少しは痛ぇな。やはり定義が曖昧な力だけに完全に防ぐことは出来なさそうだ。まぁこれだけ防げりゃ上出来ってとこかな」

「よく俺のパンチを一度だけで見破ったな、流石は第六位と言った所か」

「まだ続けるか？もう痛み分けってことでこの場を収めてくれるとありがたいんだが」

「そうだな。そう言えばまだ俺も飯を食っていなかった。腹が減っては戦は出来ぬと言うし今日の所は此処までにするか。第六位――神命　選覚えておこう。次会うときまでにはもっと己を鍛え直さなければな」

「そうかい」

そう言って二人は分かれた。

（何で二日続けて超能力者と戦わなければいけないんだ。朝飯食う前にこんなに疲れるとはな）

そう思って帰ろうとした神命はあることに気づく。手に持っていたコンビニ弁当が無い。辺りを探すと無残にも散乱してしまっていた。恐らく最初に吹っ飛ばされた時だろう。

そして彼は心に誓う。

「あいつ次あったら殺す」

第六話　説明不可能な生物（後書き）

削板は後々キーパーソンにしようと思っているので早めの登場。
途中で出てきた技は完全に原作って訳じゃないけどそこはオリ設定と言うことで。

今回一気にサブタイトル変えちゃいました。流石に二文字だと限界を感じたので。そんなこと考えるくらいなら本文に力入れろって事ですが……

第七話　費える事のない物

異様な光景だった。

数十分前、ある研究所に一人の侵入者が入った。何十ものセキュリティが張り巡らされ通常なら蟻一匹たりとも通さない筈なのに、その侵入者はいとも簡単に入ってきた。しかも現在は昼の二時頃、とても正気とは思えない条件だった。

異様、とにかく異様。

研究員達はすぐにその異常に気づいた。そしてそれに抵抗した。ある者は銃を撃ち、またある者は爆薬を投げつけた。

しかし当たらない。別に手が震えていたとか、狙いが雑だったとか、徹夜明けだった訳ではない。

しかし当たらない。侵入者は近づいて来る。フードを被り全身が黒で包まれた人間が。

そいつは次々と研究員達を捕まえ、顔を確認していく。何が基準なのだろうか？ある者は気絶させられた。そしてその他の人間は全員何の能力かは分からないが地面の中に消えて行く。

消えていった後に悲鳴は無い、そんな暇は無かった。そして最後の

一人。

「た、助けてくれ……頼む……」

声が聞こえる。恐怖に怯え死を覚悟し切実に助けを乞う声が。侵入者は答える。

「いや、それは無理な相談だな。この研究に参加していたって事は、お前は既に人としての道を外れている。生かしておいたら死んでいった奴らが可愛そうだろう？」

「何が目的だ……お前がこんな事をして何の得がある？」

「別に損得の問題じゃねぇよ。俺はただ自分の目的のものを漁りにきた。そしてここでそれを達成し気に食わない奴を消そうとしているだけだ。何か問題があるか？」

「あんな模造品の……『妹達』についての情報が目的か？それならもっと情報を教えてやる。だから他の奴のように俺を消すのだけは……」

「『妹達』？そういえばここはそれを研究してたんだったな。だが俺にとってそんなものただのおまけに過ぎないな。俺が欲しい情報はそんな程度のものじゃない。お前が聞いたことも無いような、この街のシステムを根底から覆すアレ……そして俺と同じ境遇に置かれ苦しんでいる仲間の情報だ」

「『妹達』に関する情報がその程度だと？お前何を……」

「まぁお前程度が知っている訳が無い。無駄話が過ぎた、そろそろ時間だ……今日はまだ後一箇所寄らなければならないからな。お前には文字通り人間、いや既存の存在から外れてもらおうか」

「や、やめろ……た、助け……消えたくな……」

そしてその研究員の一人もまた他の研究員達と同じ様に地面の中に消えていった。もちろん悲鳴を上げる暇は無かった。

神命　選は、第七学区の通りを歩いていた。

空には昨日昼、複数の研究所が立て続けに襲撃され一部研究員が行方不明になっており、施設や設備の損傷が激しく再び研究を始めるには時間が掛かると言う内容のニュースが流れている飛行船が飛んでいるが彼は気にも留めない。

彼は今日既に一度第二十二学区不良に絡まれていた。そのせいで彼はとても苛ついている。何か面白い物は無いものか、そう思っていた彼のすぐ脇を一台のステーションワゴンが猛スピードで通り過ぎていった。後ろには沢山の警備員（アンチスキル）の車両を引き連れている。

一瞬しか見ることが出来なかったがその中には見知った顔があった。駒場利徳――ここ第七学区のスキルアウトを取り纏める男だ。破壊の権化のような人相をしているが情に厚く、冷静沈着で不要な争いを好まない。

神命が彼と知り合ったのは一ヶ月程前のことだ。

神命　選は、パソコンのモニターを見つめていた。彼が今見ているのは掲示板だった。そこにはこう書かれている。

『バカ校発見。生徒はみんな無能力者揃い。こういう学校があるから治安が悪くなる。悪の権化に鉄槌を。ゴミ掃除の参加者求む』

掲示されたのはどこにでもあるような小学校。

何の目的で書き込まれたかは、一目で分かる。リスクのない暴力ほど楽しいものは無い。そして一部の書き込んだ人間、参加する人間は報復としてそれを行う。別に小学校に通う生徒達が何かした訳ではない。

事の発端はスキルアウトにあった。スキルアウトとは無能力者の事を指す。学園都市には潜在的に一万人程のスキルアウトが存在しているが、その大半は寮に住んではいるが学校には通わない者や、学校には通っているが夜になると行動を開始する者で、簡単に言えば不良やチンピラの様なものでごく一部だが武装した輩もいる。

そんな彼らがいつも社会から馬鹿にされる腹いせとして最初に手を出した。殴りあった訳ではない。それは単なる口論だった。偶々スキルアウト側が複数人いたため優勢に立ったのだ。

しかしその報復はスキルアウトだけに留まらなかった。気に食わない無能力者ならすぐにその矛先を向けられた。また、被害に遭っていた人間は武装したスキルアウトではなかった。

下は小学生から、上は大学生まで標的の種類に区別はなかった。

そしてネットで呼びかけられた『正当なる報復』には面白半分のレスポンスが集中した。

ただ暴れたい、ただ殴りたい、リスクも罪悪感もなくストレスを解消したい。そんな目的のために大勢の人間が闇討ちを始めた。そんな中で生まれたのものの一つがこの書き込み。

「面白そうだから参加しようかなぁ……」

神命は呟く。勿論彼に無能力者を狩る趣味はない（よくスキルアウトに絡まれ返り討ちにはするが）。彼はその日暇を飽かしていた。よってこの非常に面白そうな企画に参加する能力者を退治してやろう、そう思ったのだ。

その後その小学校で四人のレベル2を再起不能にしたところで駒場利徳と言う男が出てきた訳だ。駒場も無能力者狩りを行う能力者を快く思ってなかったらしく、その時から神命と駒場はしばしば連絡をとってはそんな能力者を止めてきたのだ。

そんな男が何故猛スピードのステーションワゴンに乗って警備員と壮絶な鬼ごっこを演じているのかは神命には簡単に想像がついた。

「わおわお。これ一台で二千万位入ってんだって？」

そのステーションワゴンには三人の少年が乗っていた。駒場利徳、そして半蔵、浜面仕上である。また彼らの乗っているステーションワゴンの後部座席には重機で拾ったＡＴＭが無造作に突っ込んである。

「ああ、でもこの前は黄泉川の奴にしょっぴかれたからな。今回は成功させてやろうぜ」

半蔵の質問に答える浜面。

黄泉川とは語尾に「じゃん」をつけ警備員でもあるとある高校の巨乳体育教師のことである。

「やっぱお前がいると仕事がはかどるなあ。耐震補強具毟り取って機材盗むには、建設重機動かせるヤツが必要だし、それを運ぶにも車が必要だから車盗まないといけないし」

因みにこのステーションワゴンはやはり盗難車である。

「まあ、この俺に掛かればこんなこと朝飯前よ。にしても今日もまた沢山の警備員に追われてるな」

「ああ、このままだとあんときの二の舞だぞ。まあ、それでもいいけど……」

「半蔵、お前……あんな女の何処が良いんだよ。会うために捕まるとかは勘弁してくれよな。やるなら一人でやってくれ」

「分かってるよそんなこと。それより今日もしつけえな、やつらは。

振り切れるか？」

「分かねえ。でも黄泉川のやつも来てねえみたいだし多分大丈夫なんじゃ――――」

会話が途切れた。何故なら少年達の車の後ろからなんか超でかい特殊車両が飛び出してきたからだ。そんな車両の窓から顔を出しメガホンみたいな拡声器を片手になんか言ってくる。

『あっ、あー。こちらは警備員第七三支部の黄泉川愛穂。テメェら盗難と器物損壊と殺人未遂その他もろもろで地獄行きだくそったれじゃんよー』

「くそっ、結局来んのかよあの巨乳。何でそんなに仕事熱心なんだよ……まあその態度は評価できるようなもんじゃないけどな」

もの凄い勢いで迫ってくる大型車両を振り切る為ハンドルを懸命に操る浜面。しかしその途中別に壁に当たった訳でもないのに急に乗っていた車体が揺れ、後ろを走っていた大型車両との距離が大きく開いていく。

「何だ何だ？」

そう言った直後その原因がフロントガラスから顔を覗かせる。

「よお、久しぶりだな」

「なんだ神命かよ、驚かせんなよ。とりあえず中に入れ。前が見にくい」

「悪い悪い。じゃあ遠慮なく」

そう言って車内にすり抜けて入ってくる選。

「いやぁ悪いな突然で」

「本当だぜ。でも来たって事は助けてくれるんだろ？」

「面白そうだから来たんだけどな。まあ助けてやってもいいんだけど」

「お前がいたら警備員なんか敵じゃねえしな。で突然なんだけど目の前にバリケードが迫ってるんだよね」

彼らの走っている道路の先にはバリケードが張られている。警備員の使うバリケードはあくまで『子供を保護するための』のものでありコンクリートブロックのように衝突＝即死と言うほどの強度は無い。よって力押しでなんとか行けるものもあるが『車体を潰してでも止める』タイプや、『わざと通過させてタイヤをパンクさせる』タイプなど逆効果となるものもある。今回はこのタイプであった。

「どうすんの？」

「こんなくらいなら簡単かな。どうせすり抜けても追いかけて来るし空にでも逃げるか。浜面、思いっきりスピード出してみ」

「いいのか？既に１００キロオーバーなんだが」

そんなスピードを出している車に飛び乗ってくるこいつはどういう神経してんだよと心の中で突っ込む三人。

「大丈夫大丈夫。そんくらい出さないと飛べないから」

「飛ぶ？」

半蔵の質問に答える前にバリケードが迫ってくる。しかしその前に何故か車体がまるで見えない坂道を走っているかのようにゆっくりと浮いていく。それをぽかーん見つめる警備員達。

「うわっ本当に飛んでるよ。どういう原理？」

「単にこの車体の下にある空気を固定して車体をその上に乗せて走ってるだけだ」

「なんかさらっと凄い事言っちゃってるよこの人。お前が駒場のリーダーと知り合いでよかった。やっぱレベル５ってすげえよな」

「お褒めに預かり光栄です。そんなことより早くしないとヘリとかが飛んでくるぞ？流石にあの『六枚羽』が来ないにしてもこのままだと目立ちすぎる。ここは第七学区だろ、どこか隠れ家とか無いのか？」

「隠れ家ならあるぞ。すぐその先だ」

そう言って浜面はハンドルを回し始める。

「そう言えば駒場は何で一言も喋らないままＰＤＡをずっと見つめちゃってる訳？」

「あー。この前小学校に侵入しようとしたボウガン男を、駒場のリ

ーダーがコブシで５ｍほど吹っ飛ばしたの。ガラにもない事して小っちゃな女の子から懐かれて激しく照れてんじゃね？」

「えっ？でも駒場ＰＤＡでネット通販サイト見てるっぽいけど。ＸＬサイズのサンタ衣装と白ひげセット見たまま、かれこれ十五分は固まってるぞ」

「あれだろー。言われちゃったもんなリーダー。サンタクロースってホントにいるんんだよね……？とか何とかさー。だからよー、今年の年末には来るんじゃね？暴れん坊のサンタクロースがさーっ！！」

ぎゃははないわそれーっ！！と三人が大笑いしていると、不意に駒場は手の中にあるＰＤＡを雑巾のように絞り上げて、

「ふがァァあああああああああああああああああああッ！！」

「ひっ、ひぃぃ！！駒場のリーダーが羞恥心から御乱心！？」

そして前しか見ていなかった神命の頭部に振り上げられた駒場利徳の拳が襲い掛かる。そしてその拳は神命の後頭部にクリーンヒットし、その衝撃でフロントガラスにおでこを勢いよくぶつける選。ぴくぴくと動いているものの意識はないらしい。

「駒場のリーダーちょっとやりすぎじゃね？ほら神命のヤツが頭ぶつけて動かなくなってんじゃん」

その直後急に車体が降下を始めた。

「あれ？なんかこの車ものすごい勢いで落ち始めてる気がするんだけど」

「おいどうなってんだ神命？っておい、こいつ気絶してるぞ！！おい起きろ、早く起きろって」

ゆさゆさと半蔵が揺するものの選は起きない。

「ここ地上２０ｍだからこのままだとやべえぞ。って言うかもう無理だ、落ちる～」

「駒場のリーダーは恨みで呪い殺してやる～」

「ふがァァあああああああああああああああああッ！！」

「……」

その後、四人の乗るステーションワゴンは幸いにも近くにあったある程度の深さのある実験用のプールの中に思いっきり突っ込んだ。

そしてその後四人がどうなったかは言うまでもない。

第七話　費える事のない物（後書き）

結構間が空いちゃいました。
しかも眠いまま書いたから内容がいまいち……
でも見てくれる人は見てくれるよね？

第八話　放縦不羈な計略

「ねぇ、選ってこんな服着てったっけ？」

「ああ、それか。それはあのあれだ、研究所に忍び込む時着てったやつだな」

ここは長点上機学園の学生寮のある一室。その部屋の中で話している二人の人物は、神命　選と月極　高嶺だ。高嶺が持っているのは全体的に黒いフードの付いた地味な服。

「なぁ、『妹達（シスターズ）』って知ってるか？」

「『妹達』？突然何？」

「知らなかったか？じゃあ第三位の軍用クローンについての噂とかは？」

「あっ、それなら聞いたことがあるー」

「そうか。まぁぶっちゃけアレって本当に行われてたんだよね」

「本当？」

「ああ、最初は『量産型能力者（レディオノイズ）計画』って言う計画で、さっきも言った通り第三位のＤＮＡマップを使って軍用クローンを作ろうって

計画だったらしいな。でもその結果は尽く失敗。なんでも出来上がったクローンはオリジナルの１％にも満たない欠陥品だったんだと。で、遺伝子操作・後天的教育問わず、クローン体から超能力者を発生させることは不可能と判断されて、すべての研究は即時停止、研究所は閉鎖され計画は凍結されたらしい」

「そうなんだ。でも、生産されたクローンはそのままなんでしょ？しかも、人体のクローンは国際法で禁止されてるから公にも出来ないし、公になったとしても彼女らに居場所は無いんじゃないの？」

「そうそうそれなんだが、俺も何度かその『妹達』の研究機関に侵入して潰して来たから分かったんだが、奴らはそのクローンを有効活用する方法を見つけたらしい」

「どんな？」

「これがまた面白い話でな、そのクローン達はまた違う実験に投入されることになったんだ」

「その実験って言うのは？」

「この実験はこの学園都市の最終目的である絶対能力者を作る『絶対能力進化（レベル６シフト）計画』って呼ばれてる。で、そのお待ちかねの実験内容なんだが、樹形図の設計者（ツリーダイアグラム）の算出したプランに従い、学園都市で最強の超能力者『一方通行（アクセラレータ）』を絶対能力者（レベル６）へ進化させるってふざけた内容だ」

「絶対能力者？本当にそんなもの出来るの？」

「方法としては『二万通りの戦闘環境で量産能力者を二万回殺害す

る』とか言うとてもじゃないが正気とは思えないような方法だな。しかも、もう既に約半分ほど順調に進んでいるんだそうだ。笑えて来るだろ？」

「確かに話だけなら嘘っぽく聞こえるけど、実際に行われてるのだから笑えないわね……」

「そうだな。そんで当の本人はつい最近気づいたらしくて、一方通行に直接喧嘩を売ったらしいな」

「結果はどうなったの？」

「もちろん言うまでも無く一方通行の圧勝で、その方法では実験を止められないと悟った第三位は、今大急ぎで研究所を潰して回ってる。最近、飛行船に研究所がサイバーテロに遭ったとかそう言うニュースが流れてたが多分と言うか確実にそれだろうな」

「手伝ってあげたら？」

「お前……簡単に言うけどな、こっちだって結構忙しいんだぞ？まあこの前久々に第三位に会って来ようとしたら疲労感満載の顔で友達と話してたな。とても話しかけられるような状態じゃなかった」

「じゃあ尚更……」

「でも、奴にそんな義理はないし、そもそも初対面でいきなり襲い掛かって来たんだぞ。しかも一方通行って言ったら運動量・熱量・光・電気量等のあらゆるベクトルを観測して触れただけで変換する力だぞ。とても奴に敵うとは思えないな」

「でも選なら出来るんじゃない？」

「確かに俺の能力は一方通行の能力とは相性がいいかもしれないけど、それにしてもリスクが大きすぎる。俺に出来るのは研究施設を潰すのを手助けするくらいか……まぁほとんど情報収集の為だけど。ここであいつに少しでも借りを作っておくのも悪くないかもな。そろそろ研究所の方も、第三位対策に暗部か何かを雇う頃だし」

「じゃあ早速行ってきたら？」

「完全に他人事だな。どうせ高嶺はここで俺が帰ってくるのを待ってるだけだろ？そんなんだから、いつまで経っても高嶺は……」

「製薬会社からの依頼～～？」

髪を弄りながら電話で話す彼女の名は麦野（むぎの）　沈利（しずり）。暗部組織『アイテム』のリーダーであり、学園都市第四位の超能力者『原始崩し（メルトダウナー）』である。

「それってウチの管轄じゃなくない？まあ別に……」

「でもさー結局水着って人に見せ付けるのが目的な訳だから、誰もいないプライベートプールじゃ高いヤツ買った意味がないっていうか」

この金髪碧眼で『結局』口癖の女子高生の名はフレンダ＝セイヴェルン。

「でも市民プールや海水浴場は混んでて泳ぐスペースが超ありませんが」

フードのを被りやたらと『超』を話の中に盛り込んでくるこの大人しそうな少女の名は絹旗（きぬはた）　最愛（さいあい）。そして彼女の能力は『窒素装甲（オフェンスアーマー）』だ。

「ん――確かにそれもあるのよねー。滝壺はどう思う？」

「…浮いて漂うスペースがあればどっちでもいいよ？」

「そ…そう」

そしてジャージを着たいつも眠たそうにぼーっとしているこの少女の名は滝壺（たきつぼ）　理后（りこう）。彼女の能力は『能力追跡（ＡＩＭストーカー）』。

「はーい、お仕事中にだべらない。新しい依頼が来たわよ」

ぱんぱんと手を鳴らしながら彼女らに近づく麦野は続ける。

「不明瞭な依頼だけどギャラは悪くないしやる事は単純かな」

「やる事って？」

「謎の侵略者達からの施設防衛戦！」

所変わってここはキャンピングカーの中。アイテムのメンバーの四人はこの中に乗り込んでいた。

「発電能力者ねぇ…」

彼女らが見ているのは『ｓｏｕｎｄ　ｏｎｌｙ』と表示されたモニター。そこからはある女の声が聞こえてくる。

『侵入者の内の片方はその可能性が高いって話ね。通信回線を使っ

たテロと、電気的なセキュリティに引っかからない所からそう推測されているみたい』

この声が暗部組織アイテムと学園都市上層部とを繋ぐ連絡係となっている。

『てゆーか依頼主はどうもこっちの犯人は特定できてるっぽいんだけどねー』

「目星がついているならなぜこちらから超襲撃しないのでしょう？不意を討った方が超楽勝だと思うのですが」

『「手出しはターゲットが施設内に侵入した時のみ、襲撃者の素性は散策しない事」ってのが依頼主のオーダーよ』

「はぁ、何それ？結局意味分かんないんですけど」

『こいつらときたら私だってやりたくて受けたわけじゃないわよ！！それにこの手の依頼には相手にも色々事情があるんだっつーの！それよりヤバイのはもう片方。こっちの方はかなり厄介っぽいのよね』

「何がどう厄介なわけ？」

『さっきの侵入者の方は休日を除くと夜間しか襲って来ないのに対して、こっちの方は昼夜問わず襲撃してくるのよね』

「でもそれなら超厄介って訳じゃないですよね？襲撃の時間帯は単に学生じゃないってだけかも知れませんし」

『普通侵入するなら昼は避けるでしょ。でもこっちはそんなものお構い無しに平気で突っ込んでくるの。その手口も本当に単純で正面突破。なのにどんなセキュリティにも引っ掛からないの』

「じゃあ相手には侵入に対してよほどの自信とそれを可能にするだけの能力があるのね」

『それだけじゃないわ。一番厄介なのは戦闘時。報告によると研究者側の攻撃は一度も侵入者に当たらなかったらしいわ』

「攻撃が当たらなかったのはその侵入者が単に超避けまくったと言うだけじゃないですか？」

『実際に戦った研究者の証言によると侵入者は特に避けるような動作も無く、全ての攻撃がすり抜けていったらしいのよ。それも生体反応や音源はちゃんとそこにあったのに』

「なんか超気味が悪いですね」

『そして襲われた研究者の死体は何故か無くって、運良く生き残ったヤツによると、皆地面の中に消えていったとか何とか言ってるのよね。で、研究所によっては全員が消えてたり、一人も消えてなかったり、一部だけが消えてたりとバラバラで、これも人的被害が少ない最初の侵入者との大きな差よね』

「地面の中に消える……結局それって何なの？幽霊？」

『それだけ聞くと本当に幽霊に思えるわよね……しかも情報を抜き取るような行為をした後は念入りに研究設備を溶かして回ったそうよ』

「溶かす？」

『ええ、設備が全て超高温で溶かされてるの。もう何の情報も残らないし復旧出来ないくらいにね』

「そもそも何が目的なんでしょうね？」

「最初の方は最近になって活動を始めたみたいで、その目的は実験の妨害工作ってのは眼に見えて分かるのよね。で、問題の侵入者の方は結構前から色々な研究施設を潰して回っていたようで、単に情報を集めてるっぽいのよね。だからこの侵入者同士には何の繋がりもないってのが上層部の考え。でも次狙われれるっぽい場所は二基の内のどちらかの可能性が高いから防衛するのは二箇所』

「でも結局そんな説明受けたら気味悪くて依頼受ける気無くなっちゃう訳なんだけど」

『その分報酬も高いんだから。ほら、ごちゃごちゃ言ってないでちゃんと仕事しろーっ！』

第八話　放縦不羈な計略（後書き）

アイテム登場回。
でも麦野と神命が戦うのは大分後になります。今回は他の誰かと。
後半会話しかしてないな……

やっぱり主人公設定とか作ったほうがいいのかな？

第九話　暗躍者と襲撃の夜

Sプロセッサ社脳神経応用分析所――

話しているのは二人の研究者。他にも彼らの目の前では何十人もの研究者が施設移転の準備に追われている。

「侵入者は病理解析研究所に現われたようです」

「やはり来たか……」

「だが、向こうに現われたという事は当面こちらは安全……移送作業を急がせるんだ」

「あっちの方上手くやってますかね？」

「カメラをはじめ外部からの確認手段はすべて切断してるからなあ」

「応援に来た戦力、こっちに来たのは年端もいかない女の子が二人でしたが……」

「暗部の掃除屋だ。外見なんかあてにならんさ。それより今晩中…

いや今から数時間以内に施設内の全ての研究データを他所へ移す必要がある……」

「間に合いますかね？」

「トラブルさえ起こらなければ大丈夫なはずだが……」

そんな事を言った途端、突然研究所全体に大きな警告音が響き渡った。

「何だ、何が起きてる？」

「侵入者です。この研究所にも侵入者が入りました」

「何だと？くそっ、これではとても全てのデータを運び切れるとは思えん……早くしろっ！！出来るだけだ、出来るだけ多くのデータを運び出せ！！呼んでおいた暗部が時間を稼いでくれるはずだ。その間に我々はより多くデータを運び出す必要がある。とにかく急げ！！」

Sプロセッサ社脳神経応用分析所　某一室――

「ん？見つかったかな？」

全身に黒を基調とした服を着たこの少年の名は神命　選だ。

（意外と早かったな。正面突破はしてないにしてもやっぱり大胆に動きすぎたか？まぁさほど行動に支障はないが……）

未だに警報は鳴り止まない。

「でも、誰も駆けつけて来ないって事はそれだけ準備に手間取って俺に構ってる暇は無いか、それとも雇った暗部がここに向かって来てるとかなんだろうな」

はぁと大きく溜め息をつく神命。

「面倒くせぇ。結局ここまでやったけど集まった情報は絶対能力進化実験のデータか、妹達のデータだけだし……まぁ当然と言えば当然なんだけど。今回くらいは何か見つけて帰らないと全くの無駄骨だよなぁ。」

そう言いながら神命は、少し周りを見渡してみる。

「って言うか本当に誰も来ないな。この部屋にはもう重要な物は無

いのか？さっきから物音一つ聞こえないんだけど」

話すのを止めるとただきちんと並べられた机と棚があるだけの部屋はしーんと静まり返る。

「何これ、盗み放題？本当に誰もいないのか？」

ふざけて呼んでみたりする。

「……」

返事はない。

「居ないの？」

「……」

だがやはり返事はない。それを確認すると選は仕方なく部屋から出ようとする。しかし何故か扉は開かなかった。何か強い力で押さえつけられている様で。

「なんだ、やっぱり居たのかよ」

そう呟いた瞬間、突然その扉が吹き飛び外から二人の人影が飛び込んできた。

「説明だけ聞いたら超気味が悪いと思っていましたけど、思ったより超早く済みそうです」

「本当に幽霊じゃなくてよかった……」

入ってきたのは高校生と中学生っぽい少女が二人。彼女らの顔は見たことがある。

「アイテム……窒素装甲と能力追跡か……」

「よく知ってるじゃないですか」

「これでも結構情報通なんだよね、俺」

「それもここで超終わりですけど」

「何が終わんの？」

「それは超決まってます。あなたの命ですよ」

「それは楽しみだな」

そこまで話したところで突然音が鳴った。警報ではなく、緊迫感のようなものは感じられない軽快な音楽だ。携帯の着信音だろうか。神命の物ではない。音は少女達の方から聞こえてくる。

「もしもし絹旗ですけど、麦野ですか？」

『そうそう、もうこっちは侵入者の発電能力者と交戦してるけどそっちは？」

「こっちもたった今、侵入者と超遭遇した所です」

『あらそう？こっちは戦いの邪魔になるからフレンダは追い出した

けど、そっちは？滝壺にはもう相手のＡＩＭ拡散力場は記憶させた？』

「今から超やる所です」

『じゃあ早くしてね。やばそうだったら記憶だけしてずらかってもいいけど。こっちは……くそっ、第三位の奴……生意気な……』

そこで電話は切れたらしい。

「向こうは超荒れてるみたいですね。滝壺さん、あいつのＡＩＭ拡散力場はもう記憶しましたか？」

「それが……今やってる所なんだけど……」

滝壺が何かとても困ったている様な顔をしている。

「超どうかしましたか？」

「……何故かあいつからは……ＡＩＭ拡散力場が感じられない……」

「どういうことですか？」

「多分……能力者じゃないとか、幻影だとか……」

「でもさっきあいつ扉を超開けようとしましたよ。その時ちゃんと力が加わっていましたし。報告からも能力者じゃないことは超あり得ません」

「でも、この部屋からはあいつのＡＩＭ拡散力場が感じられない……」

二人はこいつ本当に幽霊なんじゃないかという目で神命に顔を向けてくる。

「どうした？俺の顔に何か付いてるか？」

「あなた私達をおちょくってるとしか思えません」

「そう見えないのか？」

「あなた超むかつきますね」

「そりゃ挑発してるからな」

「まあいいです。滝壺さんは相手のＡＩＭ拡散力場が観測出来ない以上、ここにいても仕方が無いので超急いでここから逃げてください」

「分かった……」

肩を落として残念そうに部屋から出て行く滝壺。

「お前だけでいいのか？」

「あなた如きなら超十分でしょう」

「そうかい。そろそろ、話し疲れてきたから終わりにしたいんだけど」

「じゃあお望み通り終わりにしてあげましょうかね」

「そりゃあ助かるな」

そう言うと二人はそれぞれ身構えて相手の出方を見ようとする。先に動いたのは絹旗だ。絹旗は手近にあった机を軽々と持ち上げて神命の方へ勢いよく投げつけてくる。

彼女の能力は『窒素装甲』。空気中の窒素を自由に操ることが出来る。その力は極めて強大で、圧縮した窒素の塊を制御することにより、自動車を持ち上げ、弾丸を受け止めることすらできる能力だ。

その能力で投げられた机は神命に凄いスピードで近づいて来る。

しかし選は動かない。ただ呟くだけ。

「投擲物を拒絶、身体を透過」

ただそう呟くだけで、投げられた机は彼の体をすり抜け、後ろにあった別の机に大きな音を立ててぶつかる。

「当たったらいたそうだよなぁ」

当たるはずもないのに彼は呟く。

「確かに報告にあった通り、攻撃は超すり抜けてしまいますね。これでは少々時間がかかりそうですね」

「そこは『超』じゃなくて『少々』なのか」

「別に私の口癖を気にしてもらわなくても超結構なンですが」

「相手の行動を観察するのは大切なことだが？」

「あなたは本当にむかつく人ですね」

「褒め言葉だな」

そして間を置いて神命は続ける。

「でもまあそんな冗談は置いといて、そろそろ本当に面倒になってきたからさっさと終わりにしますか」

そう言って彼は、一度大きく深呼吸をした。

第九話　暗躍者と襲撃の夜（後書き）

絹旗と交戦開始ですね。
絹旗は結構人気あるけど、この戦いが終わったらあんまり出す予定無いんだよね。それについて何か意見があったら教えて欲しいです。

第十話　月下での余興の対峙

「でもまあそんな冗談は置いといて、そろそろ本当に面倒になってきたからさっさと終わりにしますか」

神命　選はSプロセッサ社脳神経応用分析所に侵入していた。彼と対峙しているのは、絹旗　最愛である。

「どうやって倒されたい？」

「そんな質問に応える超バカがどこにいますか？」

「そこは『どうやって殺されたい？』じゃないことに感謝して大人しく質問に答える所だろ？」

「随分と余裕ですね」

「ほら、俺って強いし。暗部の一人や二人問題じゃないからな」

いかにも余裕そうな表情を作って選は話している。

「さっきから超気になってたんですが、あなた一体何者ですか？」

「俺ってこれでも一応侵入者だからさ、そんな質問に素直に答えると思ってんのか？」

「超思ってませんが」

「じゃあ何で聞いたんだ？」

「それはあなたも同じでしょう」

「確かにそうだな」

確認するが、神命と絹旗は侵入者とそれを迎撃しに来た暗部であり、とてもこんな会話を交わす程の余裕は無いはずなのだ。

「って言うか本当にそろそろ始めないとさ、ここに来た意味が無くなるからもう始めるぞ？」

「お好きにどうぞ」

「じゃあまあ、お言葉に甘えまして」

そう言うと、神命は突然壁に向かって走り出しこう呟く。

「現在いるこの建築物を選択、引力を発生」

壁に到達する前にそういい終えた選は止まることなく壁に足をかける。するとまるで重力を無視しているかのように垂直に壁に張り付き、そのまま天井まで走って行き逆さまになって見せる。

「どうだ？面白いだろう？」

「確かに、たったそれだけと言うのなら超笑えますね」

しかし、どちらも笑うどころか口元に全くほころぶ様子は無い。

「確か、さっき出て行った方が能力追跡だったな。で、残ったお前は窒素装甲って訳だが……資料によれば、お前圧縮した窒素を操って大きな力を生み出すとかなんとかだったな。でも裏を返せば、窒素しか操ることが出来ないってことになるけど……」

そう言って神命は絹旗の方を再度見つめる。

「な、何ですか？」

「拍子抜けだな。これじゃ簡単に勝敗が着きそうだ」

「そんなに勝手に決めてもらっては超困るんですが」

「じゃあ遊んでみる？」

そう言うとまた彼は何かを呟いた。

「窒素を拒絶、身体を透過」

呟くと彼はゆっくりと扉のあった方へと天井を歩き始める。そこへまた絹旗は、手近な机を神命へ向かって投げてみる。が、先程と同じく机は彼の体をすり抜け勢いよく床へ落ちる。

それを絹旗は見届けると、今度は常人では有り得ない跳躍で選に拳を入れようとする。そして今回は絹旗の拳が神命の身体に触れたのを感じた。

「！？」

そこで彼女は驚いた。

何故なら、普通ならば彼女の拳が相手に当たるはずがないのだ。確かに彼女は窒素を操って巨大な力を生み出すことが出来る。しかしその範囲は彼女の身体からわずか数ｃｍ程であり窒素越しで物を持つ姿は彼女が直接持っているように見える程だ。

だからこそ彼女は驚いた。

当たるはずが、触れるはずが無いのだ。技が決まれば神命の身体は遠くへ吹き飛んでいるはずだ。しかし、肝心の彼は微動だにせず、彼女の拳が優しく彼の服を押さえつけているのを見て笑いながら言った。

「だから効かねえって」

そう言った時、彼は既に床の上に立っており先程破壊された扉の前に来ていた。

「やっぱ無理だって言ってもやりたくなるのが人間の性分なのか？まあでもどうせ、ここで人間としての一生を終えるんだけどな、お前は」

そして神命は扉があったはずのこの部屋唯一の出入り口の外へ手を伸ばす。

「これで人を殺るのは初めてだな。

窒素の拒絶を解除。

大気を選択、右手の平に圧縮。

外部からの熱を拒絶、身体を透過　」

すると突然部屋の外から中へ向かって風が生じた。

「流石に室内だと時間が掛かるか。遊んでやる、何処からでもいいから掛かって来いよ」

「言われなくても超ぼっこぼこにしてやりますよ」

そう言うと絹旗はさっき彼が呟いた言葉を思い出す。

（先程彼は『窒素を拒絶』と呟きました。そしてその直後の私の攻撃は窒素の層は彼には当たらず手だけが彼に超触れました。と言うことは『〇〇を拒絶』言ったものは彼に超触れることが出来ないと

言うことになります。でも彼はその後拒絶を解除と言ったという事は今なら超攻撃が当たるはず）

そう考えた彼女はすぐさま彼に攻撃を仕掛ける。それに対し神命は部屋の外の廊下へ素早く移動する。

（今回は私の攻撃を移動して避けましたね。という事はやはり今は超攻撃のチャンスのようです）

確信した彼女は、彼を追いかけるような形でさらに攻撃を仕掛ける。しかし、神命はそれに対してただ背を向けて走るだけだ。

ここは研究所の丁度中心の様で廊下には外を見ることの出来る窓は一つもない。ただ蛍光灯が薄暗く照らしているだけの廊下を二人は走ってゆく。

「超逃げてばかりじゃないですか。どこまで逃げるつもりですか？」

「別に逃げてる訳じゃ無いんだけどな。中心部だとこの攻撃の準備に時間が掛かるんだよ。だからもう少し待ってくれないか？もう後少しであれが完成するから」

「誰がそんな技を使わせると思いますか？」

「でもそれにしては攻撃が温いな。その程度の攻撃が俺に当たるとは思えないんだが」

そう言いながら、彼は顔面目掛けて絹旗が放ってきた拳を避ける。

「どうした？疲れて来たか？動きが鈍いぞ」

「ちょこまかと動き回って……避けることしか能がねェ超クソ野郎が、私から逃げられるとでも思ってンですか」

「なんだかいきなり口が悪くなったな。あれか、『暗闇の五月計画』で一方通行の思考パターンを移植された影響か？」

「私が『暗闇の五月計画』の被験者ってことまで知ってンですか。なら尚更逃がす訳にはいきませんね」

「そうかい」

結構走り回った。そろそろ研究所の端の方まで着いた頃だろうか。窓からは淡い月明かりが差し込んでいる。その光景が見えた途端に、神命は進行方向を変え絹旗に向かって突っ込んで来た。

「でももうそろそろだ。待ってな今面白いもの見せてやるから」

突然神命は右腕を上に掲げた。

するとさっきまで何も無かった空間に眩い白光が生まれる。先程まで薄暗く照らされていた廊下は、その溶接のような純白の光によって明るく照らされた。

「な、何ですか……これは……」

「どうだ？こんな綺麗な高電離気体（プラズマ）だ、この月明かりの中でも負けず劣らず映えるだろ？」

「……プラズマ？」

高電離気体（プラズマ）――空気は圧縮されることで熱を帯びる。あまりの圧縮率で凝縮された大気は、摂氏一万度を超える高熱の塊と化し、周囲の空気中の『原子』を『陽イオン』と『電子』へ強引に分解してしまう。

そしてその超高温の物体はその形状を剣の様なものへと変えて行った。そのあまりの高温は絹旗の皮膚にまるで火傷を負ったようにじりじりとした痛みを植えつける。

「研究設備が超高温で溶かされていたと報告を受けていましたが……そういう事だったのですか……」

「御明察。まぁほとんど夜しか使わないから半分程しか正解と言えないがな」

最後まで余裕しゃくしゃくな表情で語る神命。

「流石に私の窒素装甲でもそんなもの振り回されたら超一溜まりもないですね」

「結局の所振り回すんだけどな。まぁ月並みには楽しかったよ。欲を言うともう少し知恵を振り絞って欲しかったくらいか」

そう言うと神命は一歩一歩絹旗の方へ近づいて来る。

そして後ずさりする絹旗の上に容赦無くプラズマの剣は振り下ろされる。

第十話　月下での余興の対峙（後書き）

絹旗との交戦。
まあ最初からこれくらいにはなると予想はしてましたが、流石に一方的すぎた気がしないでもない。

第十一話　着信が知らせる終末

高電離気体（プラズマ）、あまりの圧縮率で圧縮された空気は一万度を超える高温になる。

そして今そのプラズマで出来た剣が絹旗の頭上に振り降ろされた。

彼女にこの攻撃を止めることは出来ない。それどころか腰が抜けたのかまともに足が動かない。

絹旗は死を覚悟した。

しかし、その剣が絹旗に切り掛かる前に誰かの携帯がなった。絹旗の物とは違う何の変哲も無いただ初期設定ようなの着信音。

神命の物だ。そしてその突然で何ともタイミングの悪い着信を確認

するため彼は攻撃の手を止める。

へっ？となりへなへなと座り込んでしまう絹旗だが、選はそんなことには構わず携帯を確認する。

絹旗からは見えなかったが画面には月極　高嶺と名前が表示されていた。そして神命は面倒くさそうに携帯を耳まで持って行く。

『……あっもしもし、選？』

「そうだが？」

『今何所？』

「Ｓプロセッサ社脳神経応用分析所だけど」

『ああごめん。今お仕事中？』

「ああ、今仕事の真っ最中だな」

お前がやれって言ったんだろ！！と突っ込みたい衝動を選は抑えつつ、電話の理由を聞く。

「何で電話したんだ？」

『ああ、後でいいよ。仕事中だったら。それより今どんな状況？』

「今？研究所に雇われてた暗部と交戦中」

『……あれ？私かなり悪いタイミングでかけちゃった？』

ようやくそのことに気づいた高嶺。

「ああ、かなりまずい時にかけてきたな。このままだと俺死んじゃうかもね」

嘘付け！！と絹旗は心の中で叫ぶ。

『本当？でも選がそう言う時は大抵無傷で帰ってきたりするのよね』

「本当だって。今にも敵の攻撃が襲い掛かって来てんだよ」

『それでもどうせ選なら敵の攻撃全部避けちゃうでしょ』

「ばれた？」

『最初から。それに約束だってしたんだから……もしかして選……あの時の約束忘れてなんかいないよね？』

「約束？……。ああ、あれか。俺から言ったんだ、忘れるわけないだろ」

『そうよね、忘れるわけ無いわよね。ところで、選ってどうやって敵を処理してるの？』

何か思春期真っ最中の女子が絶対に聞いてこない質問ベスト１０くらいには入りそうなこと平然と聞いてくる。

「『ところで』では処理しきれない程の話の変わりようだなおい。敵か？いつもはお手軽人柱で済ましてるけど、今日はちょっと焼こ

うかなとも思ってるが」

『焼くの？』

「ああ、こんがりとな」

『え～何で？人柱で良いじゃん。グロくないし』

「人柱も十分むごくね？俺の攻撃って地味じゃん。だからそれを打開しようとしてだな……」

『ほら、私グロいの苦手だし』

「人の話は最後まで聞けって親に言われなかったか？ああもう面倒くさい。いいよやらないから。どんだけ我がままなんだよ」

『分かればよろしい。じゃあ選、お仕事頑張ってね～。お休み』

そこで電話は切れた。

「高嶺の奴、絶対休ませる気無いだろ……」

神命は溜め息をついて携帯を閉じポケットに仕舞うと、再び絹旗の方に目を向ける。

「そういうことなんだが、一体どうしようか？」

「どうしましょうかね？」

黙り込んでしまう二人。

それもそうだ。さっきまで遂に勝敗が着きそうなと言うか着いた所まで行って、しかも一人は最高の決め技で仕留めようとし、そしてもう一人は死ぬ覚悟までしたのだ。

「ああうん、何か邪魔して悪かったな」

「ああ…いえ超お構いなく……」

(何で俺はこんな所でこんなことになってんだよ……)

神命は心の中で再度溜め息をつく。

「あの、それ超熱いんで止めてもらってもいいですか?」

「ああ、悪い」

そう言うとせっかく苦労して作った剣は蒸発していく。

「あのさぁ、もう気絶で許すから行ってもいいか?」

「別にいいんじゃないですか?もう超疲れましたし」

「そう?」

「ええ」

「そこは『私は最後まで戦う』とか『いっその事殺せー』とか言うとこじゃないか?」

「超面倒くさいんで早く終わらせてくれませんか？」

冗談のつもりで言ったら嫌な顔をされたので適当に終わらせることにする。

「そうか、じゃあまたな」

「あなたとは二度と会いたくありません」

「そこまでかよ、まあ普通そうなるな。じゃあ窒素を拒絶、身体を透過」

直後後頭部に一撃を喰らい気絶する絹旗。そしてそれを見届けると神命はその場から去って行く。

（何かとても寂しい終わり方だったな。さて、そんな事は置いといて、さっさと終わりにしますか）

翌朝、アイテムのアジト

「で、結局その侵入者ってどんな奴だったの？」

「何かよく分かりませんでしたね。攻撃の特徴は報告にあったものや違ったものと超色々ありましたけど、性格や目的は全然です。それと滝壺さんがＡＩＭ拡散力場を観測できなかったみたいで、それもあいつの能力かと」

「結局、絹旗はそいつに惨敗しちゃった訳？」

「何か超むかつく言い方ですね。まあ仕方ないんですが。結局その侵入者は私を倒した後、研究所を荒らしまくったようで研究設備の移転はわずか四分の一程度しか成功しなかったようです。では逆に、フレンダはどうだったんですか？」

「わ、私？そ、そりゃあもう侵入者なんか余裕で……」

そう言いかけた所で麦野が、

「こいつ……第三位にボロくそにやられてから何の後片付けもせず、のこのこと逃げ帰って来やがった……」

「ちょっ麦野ぉ～、ばらさないでよ～」

フレンダは至って平然としているが、麦野は凄い目つきで彼女を睨んでいる。

「第三位？それは超初耳ですね。でも一体何故、第三位が多くの研究所を潰して回っていたんでしょう？」

「ああ、それなんだけどさぁ、なかなか面白れぇ事知っちまったんだけど」

「えっ？何々？私気になる訳よ」

「私も超気になります」

「それがさぁ……」

第十一話　着信が知らせる終末（後書き）

流石に絹旗に死んでもらっては困るので生存ルート。
どこまでいっても締まらない信頼のクオリティですね。
でもこんいう銀魂的なノリは好きなので反省はしません。

第十二話　目覚め始める世界の絶望

神命　選は、長点上機学園の学生寮に戻って来ていた。そしてそこにはやはり月極　高嶺の姿もあった。

「お仕事お疲れ様～選」

「ああ」

彼は昨晩ある研究所に忍び込んでいた。その研究所とはSプロセッサ社脳神経応用分析所とかいう長ったらしい名前で、絶対能力進化計画の一端を担っていた研究所である。

「やっぱ徹夜とからしくない事するもんじゃないな」

「でもそのおかげでしばらくは実験も停止するんでしょ？」

「いや、多分今もやってると思うぞ」

彼はすぐさま否定した。

確かに、昨晩神命は忍び込んだ研究所で暗部に所属する少女と交戦し、設備を移転する為に動いていた研究者や車両のかなりの数を潰

した。その後、第三位が第四位と交戦していたらしい場所にも寄り、ちょっとした後始末もした。が、

「昨晩の時点で残っていた研究所は二基、その内の一基は俺も第三位も行かなかった。俺らが行った方も結局俺が潰せたのは全体の7割強程度だしな。あいつ等ならこの短時間でも実験は再開してるんじゃないか？それに……」

「それに？」

「恐らく奴等はこの実験を外部の研究施設に引き継ぐだろうな。そかもその引き継ぎ先の数やその利権をかなり分散させてるはずだ。数は……１５０、いや……２００程度か。結論としては研究所を潰す形での研究の妨害はもう意味を成さないな」

「じゃあもう実験は止まらない？」

「手段がない訳じゃないが……前も行った通り一方通行自体を倒すか、妹達の製造の妨害か殺害くらいか」

「それだけしかないの？」

「樹形図の設計者が出した演算結果の誤認の誘発もしくは、新たな演算で実験はすでに破綻していると機械に言わせるってことも少し前までは出来たんだがな……」

「少し前までってことは今は出来ないってこと？」

「ああ、樹形図の設計者は七月の終わりに地球からの謎の攻撃で破壊されてる」

その破壊した犯人は、とある不幸少年とシスターなのだがここでは触れないことにする。

「だから先に言った方法しかない訳だが、やっぱり無理だな。こういう言い方をするのは好きじゃないんだが、妹達はいくらでも量産できる人形みたいなものだ。全てのＤＮＡマップの情報をこの世から消し去るか実験が終わるまで生産は続く。だがそれを止めるのは不可能だ」

「じゃあ一方通行を……」

それを聞いた神命は呆れたように溜め息をつく。

「お前……俺に死ねと？」

「いやそういう訳じゃないけど……でも、そうするしかないじゃない」

「つまり死ねと？」

「だ～か～ら～」

「でも本当に死ぬぞ？高嶺、お前あいつのことよく知らないだろ」

聞いてみると高嶺は困った顔をして答える。

「そりゃあ確かに知らないけど……」

「前も言っただろ。奴は運動量・熱量・光・電気量等のあらゆるべ

クトルを観測して触れただけで変換する力を持っている。しかも常時、起きていようが寝ていようが奴は全ての攻撃を反射する。いくら俺が攻撃を全て避け続けても奴に攻撃は通らない。まあ手段はあるが準備に時間が掛かるし、とにかくリスクがでかい」

「諦めるしかないのね……」

「今回は仕方ない。一応これからも情報収集は続ける。それと監視、特に一方通行をだ」

「大丈夫なの？」

「監視だけならな。潜入と逃亡はこっちの専売特許だ。その点は心配はない」

彼の能力はあらゆる壁を透過できるし、いざとなれば空へも地下へも逃げられる。また監視や追跡に関しては、流石の一方通行でも彼から逃げ切ることは至難の業だろう。

「でだ。また今から出るつもりなんだが……高嶺ってさぁ、俺が帰って来る時いつもこの部屋にいるような……本当にお前ってここが好きだよなぁ」

「何？嫌なの？」

「まぁ別に良いんだけど……」

少し間を空けて神命は続ける。

「よく考えてみたら……まさか高嶺、俺に能力使ってね？」

さてここで今更ながらの彼女の能力紹介に入るとしよう。

このロングの茶髪であるこの少女、月極　高嶺の能力はレベル４の『精神妨害（メンタルジャミング）』である。

『精神妨害』の主な能力はその名の通り精神の妨害、特に感情や演算等の妨害だ。自分を中心として半径２０ｍ以内にいる相手に使用でき、その感情の一部を相手に抱かせないことが出来る。

これを使えば攻撃手段をもたない彼女でも相手に対処することが出来る。

例えば、相手に怒りや不満の感情を抱かせないことで余計な戦いを未然に防ぐことができ、また災害などで混乱することを防いだり不安を取り除くことなども出来る。しかし、あくまで消去法であり相手にある感情をピンポイントで抱かせるなんてことは出来ない。

また相手の演算、思考の妨害も出来る。これは２０ｍ以内で距離が近ければ近いほど効果が強まり、触れることが出来れば相手の思考を邪魔もしくは停止することが出来る。

例を挙げると、自分に対してボールが飛んでくるとする。普通なら取って投げ返すなどの行動を起こすが、彼女が能力を使うと飛んでくるボールを認識できてもそれにどう対処すればいいのか分からなくしたり出来る。

以上二つの効果はどちらも能力を行使する相手の力量・器量等によって効果が薄れたりする時があり、また同時に行使できる相手の数にも制限がある為過信は禁物である。

そして彼女の能力には、後もう一つ重要な力がある。

それは同じ精神系能力を受け付けないことだ。これは触れている対象にも効果を付与することができ、『読心能力（サイコメトリー）』や『洗脳能力（マリオネッテ）』、さらには学園都市第五位の超能力者である食蜂操祈（しょくほうみさき）の『心理掌握（メンタルアウト）』ですら受け付けない強力なものだ。

ただし、代わりに上記の全能力は同じ精神系能力者には効果がない。

ということを踏まえてだ。

「よく考えたら……まさか高嶺、俺に能力使ってね？」

「ほぇ？」

まるで意標を衝かれたような気の抜けたような返事が返ってきた。

「だから、高嶺が俺に能力を使って俺の感情とかを操作してるんじゃないかってことだよ」

「そ、そそそんなことないわよ！！」

動揺した。今、明らかに動揺した。というかここまで動揺するとは思わなかった。

「おい……やっぱりお前……」

「だ、だから……ち、違うって言ってるでしょ！！」

「お前今明らかに動揺したよな？なんか凄く滑舌に乱れが感じられたんだが」

「いいじゃない。か、滑舌が乱れることくらい普通にあるわよ」

「まぁいいか、別に……」

ここで神命はん？、と思う。

「……なぁ言ってる傍から能力使われた気がしたんだけど？」

「そう？」

「そう？じゃねぇよ。絶対使ってるだろ」

「はいはい、使ってますよ～」

「こいつ……開き直りやがったよ」

「何？使っちゃだめなの？使っちゃいけないの？」

「って今度は逆ギレかよ！！何かここに来て高嶺との接し方が一気に分からなくなってきた……」

そして聞こえるのは大きな溜め息。

「もういい、行くか。ここで話していてもいたちごっこが続くだけだしな」

そう言って神命はドアの方ではなく正反対の窓側の壁に消えていく。

そして神命が出て行ったのを見届けると、高嶺は部屋にあるベッドにばたんと倒れ込み残念そうにこう呟いた。

「何でバレちゃうのかなぁ……」

第十二話　目覚め始める世界の絶望（後書き）

コメディ回？

第十三話　紅と白の最強

「お、いたな……」

現在の時刻は午後一時半を回った程度。

ここは第二十二学区――約2キロ四方の広さを持つ学園都市最小面積の学区であるが、地表面積が狭い代わりに地下数百メートルまで開発が行われており、その内部では地下施設が発展している。その構造は調べれば調べるほど驚かされるが、この学区の地上には一般的な家屋やビルは存在しない。

そんな学区に神命　選はたたずんでいた。

大きな建築物が存在しないこの学区には、ただ一つだけ一際目立つ建築物が存在した。太陽光発電や風力発電に頼れない地下街で用いる大量の電力を補うために設置された、ビル３０階分程度の高さを持つ風力発電施設だ。その至る所に『巨大なジャングルジム』のように立体的に組み合わさった多くのプロペラが設置され、今現在も発電を行っている。

そんなビルの頂上に神命　選は座っていた。

彼の手には黒の双眼鏡、腰には小さな酸素ボンベが二つと資料が入っているポーチとカモフラージュされてそうは見えない拳銃のホルダーが装備されている。

別に彼はこんな真昼間から覗きをしているのでも、バードウォッチングをしているのではない。彼の視線の先には一人の少年。その少年の髪は真っ白で、その眼は双眼鏡越しでもはっきりと赤色だと認識できる。

その少年の名は一方通行（アクセラレータ）。そしてそれは当然、本名ではない。彼がそう呼ばれているのには彼の能力が起因する。

彼の能力は名にもなっている通り『一方通行』。

触れただけで、運動量・熱量・光・電気量等のあらゆるベクトルを変換する能力だ。よって彼には物理的な攻撃はおろか、精神操作系、空間移動系など存在するあらゆる能力でも傷一つ与えることは出来ない。

故に彼はこの学園都市から『最強』の称号である第一位の座が与えられている。

そしてそんな誰もが憧れるような地位に着いているにも関わらず、彼は彼自身のレベル５という座の更に上、レベル６になるべく絶対能力進化実験に参加している。

そんな第一位から序列が五つ下の第六位である神命　選は、５００ｍと遠く離れたこの位置から一方通行を発見したのだった。何故こ

の場所が分かったのかと言うと事前に入手していたその実験の資料から、次行われる実験の位置を数学区程度に見積もっていたからだ。

（少し離れてるな。見失わずに追いつけるか？）

さっきも言った通りここは第二十二学区で地下施設が非常に発展している。いくら一方通行でも夏休みの昼間という時間帯で賑わっているこの学区の地下でその実験の一部を行うとは思えないが、万が一でも地下に潜られ見失ってしまったら流石の神命でも見つけ直すのは面倒だ。

（さてさて、早く近づいておきたい所だが、流石に空からじゃ少し目立つな……かと言って地上からじゃ見失う可能性があるし……）

あれこれ考えるのも時間の無駄なので、４００m程は空を進み距離を縮めることにした。

「そうと決まれば早速……指定した大気を選択、空間に固定」

そう呟いて彼は立ち上がり少しビルの上を移動すると、何もない空間に足を踏み出した。普通ならそのまま３０m下へ落下しお陀仏なのだが、彼はその何も無い空間にまるで足場があるかのように二歩三歩と歩き始めた。

神命の能力は指定した物体を空間に固定し、それがたとえ流体であろうと触れたりその上に乗ったり出来る。

そして彼は強い風に煽られながらも一方通行に接近すべく歩を進める。

「流石に風力発電を行ってるだけあって風が強いな」

そう言うと彼は更に能力を発動する。

「風を選択、その方向を操作」

そう呟いた直後、彼の周り約３０ｍの範囲を吹いていた風が一気に彼に集まり始めた。そして集まった全ての風はその勢いを相殺し合うことなく一つの風として束ねられていく。

「こんなものかな」

その束ねられた風は風速４０ｍ程になっていた。そして追い風のように歩いていた彼の背中を後押しし、その進行速度を加速していく。

その加速は４００ｍという距離をあっと言う間に移動することを可能にし、実際僅か数秒程しか掛からなかった。

ここからは地上を進んで近づく。高層建築に乏しいこの学区では空にいると一方通行に簡単に見つかってしまう可能性があるからだ。空中で一方通行の位置を確認した神命はとりあえず人目につかないように地上に降りる。

「ここからは完全に自分の足で移動する訳だが……地上には本当に人が少ないな」

地上を歩く人間や走る車をあまり見かけない。先程一目につかないように降りてきた自分が馬鹿馬鹿しくなる程だ。

そして彼は一方通行がいた方向へ走り出す。道路や鉄橋等を渡り数

分間走っていると遂に白髪の少年の姿を遠目に確認することが出来た。

（少し近づきすぎたか）

神命と一方通行との距離は約１５０m。結構開いているようにも感じられるがそれは誤りである。選にとってこの程度の距離は、簡単に0に縮めることも縮められることも出来てしまう範囲、いわば既に相手の射程圏内だ。

そして彼は双眼鏡を手にし前を自分から遠ざかるように歩く少年が一方通行であることを確認する。

上半身に黒地に灰色の模様の入った趣味の悪いシャツを着た少年は間違いなくターゲットだった。

（さて始めるとしますか）

しかし、いくら一方通行の監視とは言ってもただの監視。ただ遠目に双眼鏡片手に尾行するのでは詰まらない。と言っても暇を潰す暇はない。

（退屈だな……）

そんなことを思っていると、いつの間にか二人は学区をまたいでいた。第二十二学区に隣接する第七学区へだ。少し歩くとそこには先程とは打って変わって人通りが多くなり、地上の風景が賑やかなものへと変わる。

それに伴い１５０mあった距離を三分の一程度に縮める選。

ちょうど通りに面するコンビニを通り過ぎた時だった。突然、思い立ったかのように一方通行がこちらに進行方向を変えたのだ。

（まずい、バレたか？）

思わず身体が強張り距離を広げてしまう神命だが、それは杞憂に終わることになる。

（何だ……コンビニかよ……）

一方通行が向かったのは通り過ぎたコンビニだった。そして彼は買うものを事前に決めていたのか一分程でそこから出てきた。

彼が手にしていたのは缶コーヒーだった。彼はそれを歩きながらに開け、飲み始めた。

因みに、もう忘れ去れている人が大半だと思うが、この神命　選という少年、コーヒーが大嫌いである。何故コーヒーなんて物がこの世に存在するのか、何故コーヒーなんて物が考案されたのかは、彼にとって永遠の疑問である。

そんな彼は一方通行が缶コーヒーを飲み始めたのを見てこう思う。

（うわっ、一方通行の奴……コーヒーなんてクソ不味い泥水飲み始めやがった）

と。もう確実に全世界のコーヒー愛飲者全員を敵に回した彼だが気にする様子はない。

しかし、そんな彼でも気にせざるを得ない出来事が起こった。先程彼が心の中で呟いた言葉を察知したかのように一方通行がこちらの方を凄い形相で確認してきたのだ。

またも身体が強張ってしまい、路地に身を隠す神命。周りを歩く人々は誰も一方通行のことを気には留めなかったが、神命にとっては死活問題である。

そしてもう皆さんお気付きだろうが、一方通行は大のコーヒー愛飲者である。さっきのような台詞を直接言われたら確実に殺される程の。

（何なんだよあいつ。一方通行ってこんな相手の思考を読む能力だったのか？）

もう本気でそんな能力の一つや二つ持っていても不思議だはないと思い始めた神命。

そんなことは知らずに再び歩き始める一方通行。

その後を慌てて追いかける神命だが、ここで一方通行がとある人物と接触し会話しているのを確認した。相手は少女、常盤台の制服の夏服を来たどこかの第三位と瓜二つだが頭に軍用ゴーグルを装着している少女。

誰が見てもあの御坂　美琴に見えてしまうその少女の正体を彼は知っている。

「妹達（シスターズ）か」

思わず声に出してしまった神命だが、そんな事を知らず会話を続ける二人は、その後裏路地へと消える。

そして彼はポーチに入っていた資料を見て呟く。

「絶対能力進化実験、第１００３０次実験開始か……」

第十四話　狂気は更なる狂喜を呼ぶ

第七学区の裏路地で一人の少年と一人の少女が対峙していた。

少女と対峙する少年の髪と肌はとても白く、その目は鮮血の様にどこまでも赤い。その身体はとても華奢で、その腕や足は年齢に合わず細い。

彼の名は一方通行（アクセラレータ）。学園都市に七人しかいない超能力者の第一位である。

その彼と対峙する少女は、この学園都市の五本指に数えられる名門校である常盤台中学の夏服を身に纏い、その頭には軍用ゴーグルが装着し肩にはＡＫ系列の銃が掛けられている。

彼女に与えられた名前は検体番号１００３０号。彼女の顔はどこからどう見ても学園都市第三位の御坂　美琴ではあるが、彼女はその第三位の軍用クローン『妹達（シスターズ）』である。

そしてその二人の頭上から眺める人影が一人。

彼の名は神命　選。彼もまたこの学園都市に七人しかいない超能力者の一人、第六位の『自由選択』だ。

「絶対能力進化実験、第１００３０次実験開始か……」

選は手に取った資料を見ながら小さく呟いた。

彼が持っている資料に書かれている内容は『絶対能力進化実験』に関するものだ。そして一方通行と御坂第１００３０号が対峙する理由もそれと同じであった。

「十五時〇〇分になりました。これより第１００３０次実験を始めます」

そのあまりにも不釣合いな銃を構え、少女は散文的な口調で言った。

先に動いたのは一方通行だった。

彼はまず路地を形成する周辺の建物を一発殴る。通常殴っただけでは殴った本人が痛い思いをするだけだが、彼が殴った場所は大きく凹んでいた。その衝撃は壁に設置された室外機に的確に向かいそれを少女の頭上へと落下させる。

そしてその落下物を少女は軽い身のこなしで避け、室外機は大きな音を立て地面に落下しバラバラに砕ける。しかし一方通行の攻撃は止むことはない。

今度はその細い足からは考えられない程の跳躍で５ｍもの高さまでジャンプし、そこから少女へと狙いを定めその小さな頭蓋骨を踏み潰しに掛かる。

さっきの攻撃で少女の足はふらついたままであった為次の攻撃は難無くとはいかず、彼の蹴りをぎりぎりの所でかわす少女は、その体勢のまま持っていた銃の標準を一方通行へと合わせた。

その気味の悪い笑みを浮かべる悪魔へと標準をあわせた銃からは複数の銃声が発せられる。あまりにも震えるその標準では放った弾丸の多くは大きく空を切る。

しかしその中にも、彼の胸部へと向かっているものがあった。だが、少女がその弾丸を確認した瞬間、彼女が付けていた軍用ゴーグルに大きな穴が開いた。一方通行は何の攻撃の動作も見せなかったが、彼女のゴーグルは粉々になっている。

その一瞬の出来事に少女は呆然とし、そこへ歩んで来る一方通行の姿に怯えていた。そしてその恐怖は彼女の持っている銃をより強く握り、再び複数の銃声を響かせる。

しかしその銃声は今回も彼女自身に突き刺さった。彼女の右肩と腹部には風穴が開き、肉が抉れ、真っ赤な鮮血が溢れている。

そのあまりの激痛により手放した銃は地面へと転がり、血の池に浸っていた。

「何だァ？その程度かァ？オイオイ勘弁してくれよ。こっちはこのクソ詰まンねェ実験に参加してやってンだ。もっとオレを楽しませる努力ってもンをしてみろよ」

だが、詰まらないと言っているその口は大きくにやけ、有りもしない希望を踏み潰す様に一歩一歩少女の方へ近づいて来る。

「もう一万三十回目だぞ？ちったァましな戦い方でもしてくれりャあ、楽に死なせてやったのになァ」

そう言いながら少女の前まで来た彼は先程彼女の腹部に開いた風穴に指を粗雑に突っ込む。悲鳴が聞こえた。それもそうだ、重症の傷に指を突っ込まれ中をかき回されているのだ。ぐちゅぐちゅと肉が削れるような音がし、さっきより多くの血が溢れ出てくる。

しかし悲鳴はすぐに止んだ。突然少女の全身から血が噴出し、辺り一体が地の海へと姿を変える。

少女の命は消え、呆気無く第１００３０次実験は終了した。

その光景を神命　選は彼らの頭上から見ていた。途中少女の外した弾丸が流れ弾として飛んできたりもしたが、そんなことは大した問題ではない。

この実験、神命には容易にその展開が予想できた。

別に彼には未来を予測できる能力が備わっているだとか、人並み外れた洞察力があるとかそういう訳ではない。彼はこの実験が始まる前にある資料を目にしている。その中に今回の実験の筋書きが書かれていた。そしてそれと全く同じ出来事がたった今、目の前で起こった。

人間、予期せぬ出来事が起こっても当然驚くが、予期していた事と全く同じ事が目の前で起こると更に驚いてしまうこともあるものだ。

それは神命にとっても例外ではない。正直ここまで再現されるとは思わなかった、というのが今の彼の心境である。それほどまでに完成された筋書き、否、予言と言ったほうがいいだろう。樹形図の設計者（ダイアグラム）（ツリー）が出した演算結果はあまりにも完璧すぎ、この実験を馬鹿馬鹿しく思っていた選に大きな衝撃を与え、そして彼にこう思わせた。

「この実験は何としてでも止めなくてはならない」と。

そして彼は行動に出た。本来彼が描いていた計画にはない、成功する見込みはない行動。

別に今ここで終わらせる必要はない。この実験が終了するまでにはまだ時間がある。それは樹形図の設計者のお墨付きでもある。

彼がここで行うことは唯一つ。

少しでもこの実験に狂いを生じさせる。樹形図の設計者が組み立てたこのあまりにも正確な実験、しかしそれ故に、あまりにも繊細なものになってしまった実験。すでに樹形図の設計者が何者かに破壊されている現在の状態で、少しでも狂いを生じさせる。ただそれだけ。

しかし、たったそれだけの狂いがより大きな狂いを呼び寄せる。それを演算し直すには更に膨大な時間を要し、そしてそれは更に多大な損害を生み出すことを意味する。

現在、行われたこの実験の後始末に何人かの別の妹達が来ている。この場で戦闘を行えば確実に妨害される。つまり、戦闘を行うべきは一方通行がこの場を去ってしばらくした時だ。

神命は、すでにこの場から立ち去ろうとしている一方通行に目を向けると、すぐにその後を追った。

一方通行は川原の近くにある土手を歩いていた。先程、退屈な実験を終わらせたところだ。しかし今日はまだ二つの実験を残している。今はその実験を行うポイントへ向かっている所だ。

そんな彼を邪魔するように後ろから一つの石が飛んできた。そんなに力は込められてはいない、しかし正確に頭部に命中するように放物線を描くその小さな石。一方通行はそれを視界に入れることすらなく反射し、その石は先程描いた放物線を逆に辿るように地面に落下した。

彼は投げてきた犯人を捜そうと後ろを振り返る。しかし、そこには誰もいなかった。

すると今度は振り返った彼の背中にさっきの様な放物線ではなく、力が込められ直線的に石が投げられた。しかしそれも彼は視界に入れることなく反射し、石はまた逆の軌跡を辿るように飛んでいく。

彼はまた振り返る。しかしやはり、そこには誰の姿も無い。

（何だァ？）

一方通行は苛つきながらに思う。どうせまたそこら辺の不良が喧嘩を吹っかけて来たのだろうと。

「面白ェ、隠れてねェで早く出て来いよ三下ども。とっとと肉の塊

にしてやるからよォ」

そう言うと突然目の前の何も無い空間から滲み出るようにして一人の人間が現われた。

「肉の塊にされるのは困るな」

腑抜けたような声で返事をしてくるその男の顔はフードを被っておりよく見えない。そして完全にその姿を現した人影は言葉を続ける。

「まぁ三下どころじゃなくて、五下なんだけどな」

自嘲気味に話すその声はそこらの不良のものとは全く違っていた。

「てめェ、オレが誰だか分かってそんな口利いてンだろうなァ？」

「勿論知ってる。学園都市最強の超能力者の一方通行だろ？それどころかさっきまでやってた事も、これからやる予定の事も全部知ってる」

「実験のことを知ってるってことは、オマエ暗部か実験関係者か？」

「さあな」

余裕がこぼれるほどの男の口調。

「さて、そんなどうでもいい事なんか置いといて、これから俺と一戦交えないか？」

なんだコイツ、結局その辺の不良と変わんねェ馬鹿か？と疑問に思

う最強は、退屈しのぎにそれを承諾する。

「いいだろう面白ェ。さっきの言葉は撤回してやる。代わりに肉も残さず消してやるよ三下ァ」

第十四話　狂気は更なる狂喜を呼ぶ（後書き）

一方さんとの接触。
一方さんの口調って案外難しいもんだね。

第十五話　絶対可避の勝負の結末

「イイぜ三下ァ、どっからでも掛かって来イよ」

神命　選はとある川沿いの土手である少年と対峙していた。

その少年の呼び名は一方通行。学園都市最強の超能力者である。

何故選が学園都市最強と対峙しているのか、それは彼が目の当たりにしてしまったからだ、絶対能力進化実験の実態を。最初は無理だと小馬鹿にしていた程だった。しかし先程見てしまった、この実験が単なる夢物語ではないことを。

そして思った。この実験は何としてでも止めなくてはならない、と。

そして彼は今、実験を止める為にその実験の核である一方通行と対峙していた。

ここで最強を倒す訳ではない。ただこの実験に歪みを与えるだけ、ただそれだけの為に今ここに彼は立っている。

どこからでも掛かって来いと、そう言われた。だが正直な所、こちらから相手に攻撃を加えるつもりは無い。しかし、無いからこそ相手から掛かってきて欲しい、寧ろそっちの方が自分としてはやり易い、そう思っている神命。

どうせ普通の攻撃は反射されるのだ。攻撃する手段が無い訳ではないが、倒すつもりの無いこの戦闘で、いずれまた戦うかもしれない相手に、数少ない有効な攻撃手段を見す見すばらして仕舞う程の余裕は無いし、それ程馬鹿でもない。

こんな状況でこちらから無駄だと分かっている攻撃を放ちたくはない。弾丸も有限だ。

（全く……我ながら面倒な奴を敵に回したものだな……）

そうこう言っても仕方が無い。既に戦いは始まっているのだ。

神命は川の方へと走り出した。そしていつもの様に彼は呟く。

「水を選択、その形状・座標を操作」

そう呟くと彼は河原を横切り水面へと足を伸ばす。普通ならば水の上に立とうとすれば沈んでしまうが、彼は違う。彼はその能力によ

って何にでも触れることが出来る。例えそれが水や空気等の流体であってもだ。

彼は水面に立つ。その姿を一方通行は関心しながら見ていた。

しかし、神命の動きはそれだけに留まらない。突然彼の立っていた水面が揺れだし始めた。そう思った瞬間、彼の周辺に存在する川の水が彼を乗せて５ｍ程浮き上がり、彼を包み込むように球体へとその形を変えた。その直径約１０ｍにもなる。

「何だてめェ、レベル４クラスの水流操作系能力者かァ？」

一方通行が選に問いを投げる。

「残念、ハズレだ」

彼の声は水流の音に紛れながらそれだけ答えると、その水で出来た球体ごと一方通行の方へと勢いよく突撃して来た。

しかし、一方通行の方にこれに対処するような素振りは無い。

だが、彼に向かってくる物体には変化があった。向かってくる巨大な水球は彼に接触するその直前にその形を大きく変えたのだ。まるでその球体から何本もの腕が伸びるように数十本もの水柱が出現し、四方八方から彼を襲う。

しかし、これでも一方通行が動く気配を見せない。

そして四方八方から同時にその攻撃が届いた瞬間、その大量の水は一方通行の能力によってその形を変化させた。

それは一本の槍を槍を形成し、その矛先をまだ浮いた水の中にいる神命へと向ける。

「やべっ、水を拒絶、身体を透過」

慌ててそう神命がそう叫ぶとその直後、彼の体をその槍は通り抜けそれを形成していた水は辺りを水溜りへと変える。

「あー、危ない危ない」

案外余裕そうな声で神命は呟く。またそれを証明するかのように、彼の体には傷どころか水滴一つすら当たっておらず、その服は乾いたままである。

「オマエ、何系の能力者だ？」

「その質問、よく聞かれるな。だがそんな質問にわざわざ答える程俺がお人好しに見えるか？」

神命は再び投げられた聞き飽きた質問にやる気無く答えた。

「見えねェ、だが最後にはオマエが何者かどんな能力か自分から話したくなる」

「それは楽しみだが、残念ながら多分そうなる前に俺はこの場から消えてると思うな」

「肉片一つ残さずかァ？」

「そんな意味で言った訳じゃないんだが、まぁどうせ俺には……」

言い切る前に一方通行が神命に向かって攻撃仕掛けてきた。

「何で俺の相手をする奴はみんな俺の話を最後まで聞かないんだ?」

呆れたように呟く神命。

「それはオマエが人の話を最後まで聞かねェからだろ?」

「ああ、それ言えてるな」

納得した神命の顔に恐ろしい勢いで拳が繰り出される。それをまた凄い反射神経で首を横に反らし神命は避ける。

「知ってるか?どれだけ強力な攻撃でも、当たらなければどうと言うことはないってさぁ?」

「オマエ俺を馬鹿にしてンのか?」

一方通行は神命の肩の上に伸びている腕をそのまま横薙ぎに振るう。しかし、これも神命は身を屈める形で避けてしまう。

「じゃあこの俺に攻撃の一つでも当ててみろよ」

「誰にそんな口利いてんだ?」

「最強だろ?」

「ちっ、ムカつく野郎だ」

「それもよく言われるな、不思議な事に」

次に一方通行は地面を思い切り右足で踏みつける。すると地面は大きくひび割れその間から石や砂が細かいものから大きなものまで神命目掛けて飛んでくる。しかしこれにも神命は冷静に対処する。

「石と砂を拒絶、身体を透過」

そう呟くだけで飛んできた石と砂は彼の体を通り抜ける。

「当たってないぞ、調子でも悪いのか？」

「黙れクソが、避けることしか能の無い臆病者の癖にほざいてんじゃねェぞ」

「反論はしないぞ？全くその通りだからな、だがその臆病者に一回もこう……」

会話は途切れた。否、途切れたと言うよりも遮られたと言った方が正しい。

「一方通行、すぐにその戦闘を終了して下さいとミサカ１０７７８号はこの戦闘が今後の実験にどれ程の影響を及ぼすか推測しながら戦闘の制止を試みます」

一方通行で隠れて神尊からは見えないが、前方から聞こえる声の主は聞き覚えのある少女のものだった。

「うるせぇクズが、今いい所なンだよ。コイツを一発でも殴らねェと気が済まねェ」

しかしいつもの散文的な口調で少女は話を続ける。

「しかしその一発の攻撃が今後の実験に大きな影響を与えるかもしれませんとミサカは懸念の意を表します」

「ちっ、またかよ」

「唯でさえあなたは五日前にもオリジナルと戦闘を行っているのですから少しは自重してもらいたいものですとミサカは心情を吐露します」

「分かった、分かったよ止めりゃいいンだろ。ったく堅苦しいったらありゃしねェな」

そう言って少女とは反対の方向、神命が居たはずの方向へ体を向ける最強。しかし、そこには既に神命の姿は無かった。

「クソが……」

一方通行はただそれだけ言い放った。

「はぁ、まあこんなものかな」

神命はとある鉄橋の上で呟いた。

「一応第六位とは言え超能力者と戦闘したんだ、少しは実験も狂っただろ」

やり終えた達成感と疲労感に浸っていたのだ。

「今日はとりあえず寮に帰るか。まだ時間はあるし、次の行動は明日だな」

しかし翌日、彼のやる気とは裏腹に彼の耳に驚くべき情報が入ってきた。

それは昨晩『学園都市最強の超能力者』が『学園都市最弱の無能力者』に敗れたというものだった。

第十五話　絶対可避の勝負の結末（後書き）

今回の戦闘はお互いに本気を出していませんね。
まあそれは後々の戦闘のネタが減るのを抑えるためなんですが。

感想等あったら送ってください。

第十六話　澱んだ過去と昼下がり

魔術――

科学とは違う異世界の法則によって様々な超常現象を引き起こす技術。

しかし、その技術はいわば科学とは相容れない、対角線上の技術。

それ故に科学が生み出した超能力とも相容れることの無いもの。

そしてその超能力者――才能ある者が魔術を使用しようとすると拒絶反応を起こす。それは才能ある者への罰であり、時にそれは死をも招いてしまう。

しかし、ここで疑問が浮かび上がる。何故こんな事が証明されたのか、何故相容れないはずの科学と魔術の産物が交わろうとしてしまったのかだ。

その答えはとある二つの実験に隠されていた。

二十年程前――

それは嘗ての学園都市とイギリス清教のそれぞれ一部で起こった。

『新たな能力者を作り出す』実験。

その実験では、魔術と超能力を共に使いこなす者を作り出そうとしたが、その結果は尽く失敗。　超能力者が魔術を使用するとその規模にもよるが、身体に過負荷がかかりその反動が被験者に降り注いだ。

その反動が身体のどこにかかるかは完全に不定であり、場合によっては死。よってこの実験で超能力と魔術を併用することは不可能、そう結論付けられた時点でこの実験はイギリス清教と同じく英国に存在する騎士派という組織の妨害によって凍結した。

しかし十年前、不可能と結論付けられたはずのこの実験が、再び決行された。

何故か、それは学園都市に異質の能力者が初めて取り寄せられたからだ。

『原石』

学園都市のような人工的な手段に依らず、超能力を発現させた天然の異能者。偶発的に周囲の環境が『開発』と同じ効果をもたらした

場合に発生する異例中の異例。その存在は稀少で世界に僅か５０人程しか存在しない。

その『原石』の初の素体がこの学園都市に非公式に取り寄せられた。

学園都市の科学者はこの『原石』がもたらす結果に大いに期待し、その研究を志願した。既存の能力者との比較実験――その数え切れない程の実験の火蓋を切ったのがこの実験だった。

しかし、その結果は失敗続きだった。どんな魔術を使ってもその結果は同様だった。既存の能力者との比較、それも試みられたが全く異世界の法則に対し科学者達はさじを投げた。それは魔術師にとっても同じだった。

科学と魔術、双方の明らかな情報の不足、それが発覚しこの実験もまたその『原石』の研究価値の保持の為すぐに凍結された。

そしてその『原石』はその後も数多くの実験に身を投じる事となる。

その少年の名は、神命　選。

後にカリキュラムも受けずそのレベルを3から5まで独力で上げ、それを到達した時、彼の正体を知る一部の研究者に『研磨原石（ブリリアントカット）』と呼ばれた少年の名だ。

九月一日、それは学園都市中の学校が一斉に始業式を迎える華々しい日であり、一部の学生にとっては夏休みを閉ざした憂鬱で忌むべき日でもある。

そんな日の午前七時頃にこの学園都市の外壁の二箇所から二人の人物がほぼ同時に侵入したらしい。

こんな情報を耳にした神命だが正直そんなことはどうでもいい。どうせ侵入者は警備員や風紀委員が対処に回るだけで、彼が出る幕はないからである。

その日の昼下がり、始業式であり午前授業であったせいか、神命が寄った駅周辺の地下街は多くの学生で賑わっていた。

学園都市には地下街が多い。と言うのも日本には地震が多く、またその国土も狭い。よってより高度な地下施設の建設技術が必要であり、この学園都市の至る所が掘り返されたのだ。その究極形態が第二十二学区と言えよう。が、彼がいるのは二十二学区ではない。

神命がいるのは第七学区の地下街の中の一つだ。ここには数多くの

娯楽施設が詰め込まれているが、彼は気にも留めない。

彼が入ったのは学食レストランの一つ。しかしここに入った理由は特に無く、なんとなくである。この店には学園都市に存在する多くの学校の学食が取り揃えられている。多くの学校が密集する学園都市では自分が通っている学校以外の学食を食べてみたいと言う声が多く、このような店は別に珍しいものではない。

その店の中で神命は画板のように大きなメニューを広げ、紅茶のおいしそうな学校を一つ選び適当に注文した。紅茶さえあれば何でもいいと考えている神命はこの店に入る前、同じく地下街にある喫茶店に寄ったのだがかなり混んでいたためこちらの店にしたのだ。

注文をしてから数分後、頼んだ料理が届けられた。手前の皿には二つの丸いパンが、右手にはポタージュ的なものが、一番大きな皿にはちょっとしたサラダとオムレツが乗っていた。そして彼の手には暖かい紅茶の入ったティーカップ。

彼はまずその紅茶を一口飲むと満足したようにテーブルに置き、他の料理にも手を付け始める。

今日は月極とは一緒ではない。既に学校は終わっているはずであり、いくら地下街にいるとしても携帯くらい通じるはずだが着信は無い。頭に疑問符を浮かべる神命だが、それはそれで穏やかな日が過ごせそうだと忘れることにした。

そんな事を考えていた彼に視界の隅のテーブルからちらちらと視線を向ける少女がいた。その少女はこの学園都市では全く見かけない修道服を着ており、その柄は丁度彼のテーブルに置いてあるティーカップのような白地に銀の刺繍が施されたものだった。

また、彼女の席には彼と同年齢くらいのツンツン頭の少年と霧ヶ丘女学院の制服を着た少女が座っており、その会話が神命の耳にも少しだけだが聞こえていた。

「とうま。これ何でも選んじゃってもいいの？」

「あー、高いのは禁止な」

彼らは先程神命が広げていたメニューと同じものを広げ、その一つに少女が指をさした。

「私はこれがいいかも」

「んー？どれどれ」

少年はその指の先に注目して一瞬だけ固まった。

「……、」

そしてメニューを閉じると、その角でいきなり少女の頭を引っ叩いた。

「痛ったぁ！？どうしていきなり人の頭を叩くの！」

「言ったはずだ、高いものは禁止だと！ってかツッコミ待ちじゃなかったのか今のは！」

その光景を見ていた神命は、そのツンツン頭の少年の顔を何かの資料で見たことがあるのを思い出したが、その詳細を喉まで出かかっているのに思い出せず、代わりにこんな状態が『ＴＯＴ現象』と言う現象だという無駄知識を思い出していた。

「何か見たことあるんだよなぁ……」

何とか思い出そうとするが出てこない。

「ああもう駄目だ。何も出てこないな……」

大人しく諦めることにした神命。

そんな事を言っている内にテーブルにある全ての食器が空になった。その後更に二杯の紅茶を飲み、少し休むと彼は店を出る。その時ツンツン頭の少年達は既に店の中にはいなかった。

店を出て少しベンチで座っていようか、そう考えていた時だった。突然頭の中に直接声が聞こえてきた。

（念話能力（テレパス）か）

その声は自分を風紀委員だと最初に告げ、この地下街にテロリストが紛れ込んでおり、特別警戒宣言が発令され、間もなく隔壁を降ろして地下街を閉鎖する為避難するようにと続けた。

「マジかよ」

人が折角心地よい昼下がりを堪能しようとしていたのに、と溜め息混じりに言って出口に向かおうとする。

通路の先には先程のツンツン頭の少年と他二名の姿も見え、既に出口へ向かっているようだった。

しかし、その動きは突然声によって妨げられた。

『――――見ぃつっけた』

それは女の声だった。ただし、何も無いはずの壁から聞こえた。

その三人の壁際、丁度少年の目線の辺りに手の平サイズ程の泥がへばりついていた。それは少し離れた神命からでも確認することが出来る。

それは単なる泥だった。

ただし、その泥の中央に、人間の眼球が沈んでいたことを除いては。

第十六話　澱んだ過去と昼下がり（後書き）

上条さん初登場。

第十七話　薄明かりと忍び寄る影

『――――見ぃつっけた』

その声は壁から聞こえた。女の声だ。

壁にはただ、茶色い泥がへばり付いていた。

その中には人間の眼球が沈み、その視線はツンツン頭の少年とティーカップのような修道服を着たシスター、霧が丘女学院の制服を着た少女の三人に向けられていた。

『うふ。うふふ。うふうふうふふ。禁書目録に幻想殺しに、虚数学区の鍵。どれがいいかしら。どれでもいいのかしら。くふふ、迷っちゃう。よりどりみどりで困っちゃわぁ』

その声に虚数学区の鍵と呼ばれた少女はその声にただキョトンとしているだけだった。現実味の無くガラスで作ったレプリカに見えているのかも知れない。

しかし禁書目録と呼ばれた少女はその眼を冷静に眺めていた。

『ま、全部ぶっ壊しちまえば手っ取り早えか』

先程まで妖艶でしかしどこと無く錆び付いたような声は、場末の酒場でも聞けないような粗暴な声色へと切り替わる。

ツンツン頭の少年はこの奇妙な物体が超能力によるものなのか、魔術によるものなのか判断出来ない様子であったが、その目をじっと眺めていた少女がすぐにその答えを提示した。

「土より出でる人の虚像――そのカバラの術式、アレンジの仕方がウチと良く似てるね。ユダヤの守護者たるゴーレムを無理やり英国の守護天使に置き換えている辺りなんか、特に」

しかしその言葉に少年は更に困惑した表情を浮かべる。

その様子を少し離れた所から見ている少年――神命　選にもその会話は聞こえていた。

（何だあいつら？魔術を知ってるのか？）

彼も一応は魔術の存在を知ってはいるが、持っているのは基本的な知識だけでしかない為、そのシスターが言った言葉の意味を理解することは出来なかった。

だが、彼が今気にしている事はその事ではない。壁に張り付いている物体から聞こえた声が放った言葉の中に、ある単語が入っていた事だ。

『幻想殺し（イマジンブレイカー）』

彼はその単語を聞いたことがあった。その能力を持つ少年について調べたこともあった。

何故か？それはほんの二週間程前、神命が対峙したとある最強。その最強がその夜ある一人の無能力者に倒されたと言う情報が耳に届いたからだ。

あの最強を倒した？どうやって？色々な疑問が浮かびその詳細を調べた時に出てきたのが、この『幻想殺し』という単語とある少年のデータだった。

確か、その少年の特徴はツンツンとした髪型、そう丁度目の前にいる少年の様な髪型。その体型は中肉中背、そうそう丁度目の前にいる少年の様な……。

「あれ？あいつじゃね？」

一度は会いたいと思っていた少年がこんな所にいるとは、何故すぐ

にあの特徴的な髪型で思い出さなかったんだと色々な思考が頭の中を駆け巡る中、とりあえずちゃんと会って話そうという結論に神命は至った。

まだ、その幻想殺し達はゴーレムがなんとか、魔術師がなんとかと言ってるが内容を理解するほどの知識がない神命は気にせず近づく。

「って事は……この魔術師がテロリストさんって訳か」

幻想殺しがこう喋った後、再び壁の物体からの声が響いた。

『うふ、テロリスト？テロリスト！うふふ。テロリストっていうのは、こういう真似をする人達を指すのかしら？』

声が止むと壁の泥と眼球は、ぱしゃっと音を立てて弾け、壁の中に溶けて消えた。

瞬間、

ガゴン、と音を立て、地下街全体が大きく揺れた。

「何だ！？」

神命は叫んだ。

まるで嵐の中に放り出され漂う小さな船の様に学生達はよろめいた。

さらにもう一度、今度は砲弾を撃たれたかのような揺れが神命達を襲う。

天井に敷き詰められるタイルの隙間からぱらぱらと粉塵が舞い、蛍光灯が二、三度ちらつくといきなり全ての照明が消えた。そして非常等の電源が入り、地下街を赤く照ら始める。

それまでのんびりと歩いていた学生達はパニックに陥り、猛牛のように一斉に出口へと走り始めた。

今度は低く、重たい音が響き始めた。

警備員が予定よりも早く隔壁を降ろし始めたのだった。そして、その重く分厚い鋼鉄の壁は学生達の波の最後尾を引き裂くように分断した。閉じ込められた。

取り残された学生はその高くそびえる城壁を叩き必死に助けを求めている。

『さあ、パーティーを始めましょう――土の被った泥臭え墓穴の中で、存分に泣きやがれ』

女の声が聞こえ、さらにもう一度大きな振動が地下街を襲った。

女の声と振動が止むと神命は辺りを確認し、やはりまず幻想殺しのところに向かう。

「……、むこうはこっちの顔を確かめてから襲ってきたみたいだし、迎え撃つしかなさそうだ。インデックス、風斬とどっかに隠れてろ」

幻想殺しは連れの少女二人に指示する。

（敵がインデックスや風斬に手を出す前に、こちらから討って出る。くそ、敵が何人いるかだけでも分かれば策を練る事もできそうだけど……）

そんな事を考えている彼に神命は話しかけた。

「今のは何だ？魔術か？」

適当に食いつきそうな単語を並べてみる。

「！？」

予想通りの反応。

「ああ、勘違いするなよ。俺は魔術師じゃない、単なる超能力者だ」

「魔術を知っているのか？」

「ああ、多少知ってる」

神命が魔術を知っていることに驚く幻想殺し。

「自己紹介が遅れた。俺は神命　選、一応能力者をやってる」

「俺は上じょ『上条　当麻だろ？』……神命、何で俺の名前知ってんだ？」

自分の名前を言い当てられたことにまたも上条は驚く。

「まあ色々あるんだ、色々と。それより今の声の主って魔術師か？」

「ああ。どうやらこの地下街に紛れ込んだのがそいつみたいだ」

「さっきの会話からすると、あんたらが狙われている？」

「その通りだ。これからこの二人を安全な所に避難させようとしていた所で……」

そこで上条の後ろに隠れていた修道服の少女が口を挟んだ。

「とうま、この人ちょっとおかしいかも」

「おいこら、初対面の人にそんなこと言ったら失礼だろ！！」

「でも、この人どういう原理か分からないけど、地脈のエネルギーを無理やり捻じ曲げてかき集めてるんだよ」

「「地脈？」」

二人の頭上に疑問符が浮かぶ。

「地脈っていうのは、簡単に言うと大地に流れるエネルギーの川みたいなものなんだよ。その力は大きくて魔道書の原典の魔力の源として利用されているんだよ」

「で、俺がそのエネルギーを集めていると？」

「おいインデックス、神命は魔術師じゃない、況して能力者なんだ。そんなことしたって何の得も無いだろ？」

「でも、そうなんだよ」

そして何故か、風斬と呼ばれたもう一人の少女が神命の方を何か言いたそうに見ているが、彼はそれに気づかない。

「そんなことより急がなくていいのか。狙われてんだろ？」

「そうだな。とりあえず場所を変えよう。ここからじゃ外へ出られないしな」

と、次の瞬間手近な曲がり角からカツンという足音が聞こえた。

そこで、条はインデックスと風斬を、インデックスは上条と風斬を庇おうとしたため足がもつれたらしい。二人は転んでしまい、上条が下になる形で重なってしまった。インデックスの腕に押しつぶされそうになっている三毛猫が鳴きながら前足をばたつかせている。

かつかつと今も足音は近づいて来る。

曲がり角の向こうから、女の声が飛んできた。

「あら?猫の鳴き声が聞こえますわね」

「黒子。アンタ動物に興味ないんじゃなかったっけ?」

「かくいうお姉様は興味がおありでしたよね」

「べ、別に私は……」

「あらぁ。わたくし、知ってますのよ。お姉様には寮の裏手にたむろってる猫達にご飯を上げること日課がある事を。しかし体から発せられる微弱な電磁波のせいでいつもいつも一匹残らず逃げられて、猫缶片手に一人でポツンと佇む羽目になっている事も!」

「何故それを……!?ってか黒子!アンタまたストーキングして……っ!」

曲がり角から出てきた二人の少女は四人を発見して足を止めた。二人の名前は御坂　美琴と白井　黒子であり、もちろん敵ではない。

「アンタこんなトコで女の子に押し倒されて何やってる訳?」

「あらあらこんな時間から大胆ですこと」

それに対し上条の上から起き上がることもなくインデックスは御坂と張り合っているようだが、神命はといえば、

「お、久しぶりだな。ええと……黒井?」

「白井ですの。でもまあ、お久しぶりですの。あなたは相変わらずのようですわね」

何か横では上条が、二人の少女に問い詰められひぃっ！となっているが気にはしない。

「風紀委員の仕事か？」

「ええ、現在は地下街に取り残された方達の脱出の手伝いを行っておりますの。これでも一応『空間移動』の使い手ですので」

「結構面倒なことになってるみたいだな」

「まったく、テロリストの侵入を許すだなんて、わたくしも気を入れ直す必要があるようですわね。今朝は二組の侵入者がいたと聞きますし……」

話しているとようやく上条達のごたごたも終わったらしい。先程までオロオロしていた風斬はほっとしたように胸を撫で下ろしている。

「そういえば何でアンタはここにいるのよ？」

御坂が神命に質問する。

「昼食食べに来ただけだけど。っていうかそろそろ人命救助に向かったほうがいいんじゃないか？ここも戦闘の危険があるだろうしな」

「そうですわね。今は人命が最重要ですの。予定を繰り上げて隔壁を降ろしたのなら、もう時間がありませんわ。早く避難を済ませませんと」

現在も隔壁の辺りに逃げ遅れた学生達数十人が開くはずの無い鋼鉄の壁をこじ開けようと無駄な努力を続けていた。

「分かった。白井、お前が閉じ込められた人達を脱出させてる間は、俺が時間を稼ぐから、お前はあいつらを外に出してやってくれ」

上条が言った瞬間、インデックスと御坂と白井がそれぞれ三方から同時にどつかれた。

「アンタが真っ先に逃げるの。ってかアンタ達がピンポイントで狙われてんでしょうが。一番危険な人間を戦場に残すと思ってんのかアンタは」

三人の中を代表するように御坂が言った。

「……っつてもなあ」上条が頭を?いて、「俺の右手はあらゆる能力を無効化させちまう。白井のも例外じゃねーぞ」

「そういえば一度失敗してましたわね。でもわたくし飛ばせるのは二人が限界ですわよ」

すると今度は誰がこの場に残るかで口論となった。上条は最初風斬とインデックスを脱出させることにしたが、すぐに御坂に却下された。次に風斬と御坂が脱出する案が提出されたが、またもインデックスに却下された。

上条が散々悩んだ挙句、インデックスと御坂が脱出することになった。もちろん御坂とインデックスは反論しようとしたが、すぐさま白井に地上へと連れて行かれる。

「まずは二人か、悪りぃな風斬。お前だけ残しちまって」

「……う、ううん。私は別に……最後でも良い、です」

「そういえば、お前はどうするんだ、神命？」

「俺か？俺は出ようと思えばいつでも出られるからな。風斬って言ったっけ？どうする、よければ上に送るが……」

言いかけた神命の言葉は途中で遮られた。

再び地下街全体が揺れたからだ。

だが今回は爆心地は近そうだった。薄暗い通路の奥からは、何やら銃声らしき爆発音と、人の怒号や絶叫らしき声まで流れてくる。

「いよいよ本命のお出ましか……風斬、お前はここで白井が来るのを待っててくれ」

「上条、俺も行く。一応これでもレベル５だからな」

「お前レベル５だったのか？」

「最初に超能力者だって言っただろ？因みに第六位だ。ついていっても足手まといにはならねえよ」

「そうか。じゃあ援護を頼む」

「行くぞ」

二人は一人の少女を残し薄暗く非常等が照らす通路を駆けて行った。

第十七話　薄明かりと忍び寄る影（後書き）

何気にこの話ってオリキャラ混ぜるの難しい気がする。

第十八話　暗がりに潜む者

シェリー＝クロムウェルは銃声と硝煙の渦巻く中戦場を優雅に歩いていた。

彼女の前には、巨大な盾のように石像が立っていた。石像は地下街のタイルや看板や支柱などを無理矢理丸めた粘土のように整えたものだった。その大きさは全長４ｍもあり、その頭は地下街の天井に押し付けられ斜めに傾いていた。

その石像の前には、地下街の喫茶店にあったテーブルやソファーなどを固めて作られたバリケードに身を隠すように警備員（アンチスキル）がいた。漆黒の装身具に身を固めた彼らは、バリケードから顔を出すようにライフルを撃ち続けている。彼らは装填の隙を作らないように三人一組になり一方のチームが装填をしている間に、もう片方のチームが射撃を行っていた。まるで織田信長の鉄砲隊のようだ。

（腕はそこそこだが、品が無いわ）

シェリーはつまらなそうに評価を下した。

彼女の白いオイルパステルが宙を泳がせるとそれが命令文となり、巨大な石像――ゴーレム＝エリスが歩を進める。

何百発もの銃弾がエリスに直撃しても、それは決定打にならない。

地下通路は狭くエリスは完全に通路を遮り、シェリーには弾丸は当たらない。

カチン、という金属音が響いた。

警備員の一人が業を煮やし手榴弾のピンを抜いたのだ。彼は石像の向こうにいるシェリーへとダメージを与えようと、石像の石像の股下をくぐるように手榴弾を投げようとして、

「エリス」

その直前、シェリーはオイルパステルを空中で一閃した。

石像が地を踏み鳴らす。またも地下街が小船が波に揺られるように大きく揺れた。それは警備員が手榴弾から手を離そうとした瞬間の出来事だった。タイミングを失った彼の手からピンの抜けた手榴弾がポトリと彼の足元へと落ちた。

怒号、そして爆発。

爆発から逃れた者達はバリケードから飛び出してしまい、ライフルを手放してしまっている。

再びオイルパステルが空気を切る。その石像を止めるには戦力が足りなさすぎた。

神命　選と上条　当麻は非常灯に薄暗く照らされた通路を走っていた。

通路の先からは銃声のような爆発音と人間の怒号や絶叫が響いてくる。

「警備員と交戦中か」

神命が喋っている間も叫ぶ声は続き徐々に近づいていた。

「いたぞ！！」

角を曲がった神命が叫んだ。

「おいおい、酷い有様だな」

戦場、本物の戦場だ。上条はあまりの惨状に口を手で覆っていそうになった。目の前に広がっている光景、傷付き、折れ曲がり、引き裂かれた人間が柱や壁に寄りかかっていた。

その数は二十人弱。

（っつか、どんな野郎なんだ。こんだけの警備員相手にここまでや

れる魔術師ってのは）

上条は絶句する。詳しい事情を知らない彼でも、何となく『科学勢力』と『魔術勢力』があり、一対一できちんとバランスを取っていたのは知っていた。

だが、蓋を開ければこの様だ。

それは神命にとっても同じだ。科学側がこうも簡単にやられてしまうとは、彼も思っていなかった。

「どうする上条、先を急ぐか？」

しかし上条は答えない。そこへまだ動ける警備員の一人が怒号が飛ばしてきた。

「そこの少年！一体そこで何をしてるじゃん！？」

その声にその場にいた数十名の警備員達が振り返った。

「くそ、月詠先生んトコの悪ガキじゃん。どうした、閉じ込められたの？だから隔壁の閉鎖を早めるなって言ったじゃん！少年、逃げるなら方向が逆！Ａ０３ゲートまで行けば風紀委員が詰めてるから、出られないまでもまずはそこへ退避！メットも持っていけ、無いよりはマシじゃん！」

警備員の女性は、怒鳴りながら自らの装備品を上条へと投げつける。

（……、）

上条はもう一度周囲を見渡す。

上条は神命の方を一度だけ見て小さくうなずき、さらに奥へと歩を進める。

「どこへ行こうとしてんの、少年！ええい、体が動かないじゃん！誰でも良いからそこの民間人を取り押さえて！！」

警備員が手を伸ばすが彼の体には届かない。他の警備員達も彼を止めようとするが、唯の高校生一人を止めることも出来ないほどに体力が残されてはいない。

「やめろ、黄泉川」

黄泉川。それは上条に怒号を飛ばした警備員の名。神命は彼女とは以前逃走劇を演じたことがあり、知り合いである。

「神命、何であんたまでここにいんじゃん。早くあの少年を止めるじゃん！！」

「お前こそここから逃げたほうが良いんじゃないか？こんな状態でお前達警備員に何が出来る？それにあいつだって何も考えないでここまで来た訳じゃない。何の覚悟も無しにここにいる訳じゃない。何の目的も無しに奥に進んでいる訳じゃない」

上条とはついさっき会ったばかりだ。彼の気持ちを知ったように口を利くべきではないのかもしれない。しかし、上条はあの一方通行を倒した。それは死ぬ覚悟があってこその行動だろう、彼だってその正体を知らずに立ち向かった訳ではないはずだ。その時は第三位の為に戦った。

なら今回は?その答えはさっき知った。恐らく今回も、いやこれからもその少年は死を覚悟し多くの出来事に立ち向かっていくだろう。上条は止まらない。それこそ知った口を利くなと言われそうだが、それでも神命は続ける。

「あいつのためを思うなら止めるべきじゃない。いいか、あいつの安全は保障してやる。だから、お前はここから逃げろ」

そう言って彼女の前から立ち去ろうとする神命。後ろからは彼らを止める声が響いてきたが彼らは振り返ることはない。

神命は先に行った上条との距離を詰めるように小走りにその場を去る。

(くそったれが……)

上条　当麻は、思わず舌打ちをした。

彼はその右手を握り締める。

そして前を見据えてただ走る。たとえ正攻法で攻めた所で勝ち目がなくても、相手が魔術師だというのなら、切り札たるこの右手を使えば戦局をひっくり返せるかもしれない。それにさっき出会った神

命という超能力者と共闘すればあるいは、と考えながら。

上条がさらに通路の奥へ向かうと、何かがおかしい事に気づいた。

（物音が……しない？）

通路の奥では銃撃戦が繰り広げられているはずだが、それにしては静かすぎる。

嫌な予感しかしなかった。

（まさか……）

薄暗く、赤い照明に照らされた通路の先へ彼は走る。その先にあったものは、

「うふ。こんにちは。うふふ。うふふうふ」

錆びた女の声が通路に響く。漆黒のドレスを着た、荒れた金髪にチョコレートみたいな肌の女が立っている。

そして彼女の盾になるように、石像が立っていた。まわりにあるあらゆる物を強引に押し潰し、練り混ぜ、形を整えたような巨大な人形。

彼女と石像の周りにはバリケードらしきものの破片が四方へ散らばり、七、八人の警備員が倒れていた。細かく震えるように手足が動いており、まだ息はあるようだ。

「くふ。存外、衝撃吸収率の高い装備で固めてるのね。まさかエリ

スの直撃を受けて生き延びるだなんて。まぁおかげでこちは存分に楽しめたけどよ」

「どうして……」

……そんな事ができるんだ、と上条は絶句した。

「上条、犯人はあいつか？」

追いついた神命が質問すると、上条は黙ってうなずく。

対して、金髪の女は特に感慨も持たず、

「おや。お前は幻想殺しか。虚数学区の鍵は一緒ではないのね。でも代わりに奇妙な生き物を連れているわね。本当に学園都市はよりどりみどりね、こんな能力者までいるなんて」

女は面倒臭そうに金髪をいじりながら、

「別に何でも良いのよ、何でも。ぶち殺すのはあのガキでもある必要なんざねえし、テメェを殺したって問題ねえワケだ！！」

女が思い切りオイルパステルを横一線に振り回す。

その動きに連動するように、石像が足を振ると、上条は耐えられずに地面へ倒れ込んでしまう。だが、傍らにいる神命と金髪の女は平然と立っていた。

「お、お前……っ！」

「お前でなくて、シェリー＝クロムウェルよ。覚えておきなさい……って言っても無駄か。あなたはここで死んでしまうんだし、イギリス清教を名乗っても意味がないわね」

なに？と上条は眉をひそめた。

イギリス清教と言えばインデックスと同じ組織の人間だ。

そんな彼に、シェリーは薄く笑いかけてこう言った。

「戦争を起こすんだよ。その火種が欲しいの。だからできるだけ多くの人間に、私がイギリス清教の手駒だって事を知ってもらわないと、ね？――――エリス」

第十八話　暗がりに潜む者（後書き）

主人公が空気すぎる。

人物・用語解説をこれから作って行きたいと思いますので、そちらにも目を通していただければ幸いです。場所は目次最上部のシリーズ一覧のとある小説の世界設定《Ｗｏｒｌｄ　Ｍａｐ》です。

（まだ未完成ですが）

第十九話　其々は其々の目的の為に

「戦争を起こすんだよ。その火種が欲しいの。だからできるだけ多くの人間に、私がイギリス清教の手駒だって事を知ってもらわないと、ね？――――エリス」

シェリー＝クロムウェルは薄く笑いかけてそう言った。

そして突然持っていたオイルパステルを宙に走らせ、その動きに引かれるようにエリスと呼ばれる巨像が地を踏みしめ、その大きすぎる拳を上条に向けてきた。

まわりにある物を掻き集め、押しつぶし、練り混ぜ、そして形を整えただけのようなその巨像でも警備員の張っていたバリケードを一撃で粉砕する程の拳だ。上条は避けようとしたが、先に伝わった振動はそれを許さなかった。

「石像を拒絶、身体を透過！！上条、どけっ！！」

神命が強引に上条を押しのけた。上条は横へそのまま３ｍ程吹き飛び、先程上条が居た所には神命が立っていた。そこへエリスの拳が恐ろしい強力を持って襲い掛かった。

「か、神命ォォおおおお！！」

上条は叫んだ。しかし、上条の絶叫とは裏腹にその場には気の抜けるような声が響いた。

「ああええと……別にそんな叫んばなくてもいいぞ？」

「神命？」

あれ？とこけそうになる上条。

「俺の能力って魔術にも一応対応してるんだな。そうじゃなかったら今頃死んでたな……」

「おい、死んでたな……じゃねえ！心配したんだぞ！！」

「ほら、俺の能力って避けることに特化してるから。基本心配しなくても大丈夫だ」

右手の親指を行き勢いよく真上に突き立てる神命。

「何かものすごくその指へし折ってやりたいんだけど」

「上条、もう一発来るぞ」

再び巨大な拳が横薙ぎに二人を襲う。上条はふら付きながらも後ろに下がってそれを避け、神命はさっきと同じくこれを透過した。

「くそ、どうにかしてあいつに近づけたら……」

上条が呟いた。恐らく上条の右手の幻想殺しを使えば、あの石像も

例に漏れずその動きを止めるだろう。しかし、今は近づく手段が存在しない。

カツン、と。

唐突に、神命達の後方から小さな足音が聞こえた。

激しい揺れとその衝撃で周りの物体が次々と音を立てて壊れその形を失っていく中、順路だけを示す非常灯では照らしきれていない闇が支配する通路の奥から聞こえてくる足音。

その音からだけでも、その足音の主は訓練された人間ではない、それどころか怯えた足取りで一歩一歩地を踏みしめるようなその足音。

二人には嫌な予感しか過ぎらなかった。

「……あ、あの……」

聞こえたのは少女の声だった。

闇の中から赤い非常灯へ、その声の主のシルエットが浮かび上がる。太股に届く長いストレートにゴムで束ねた髪が横から一房飛び出し、線の細いメガネをかけた少女――風斬　氷華だった。

「馬鹿野郎！！何で白井を待っていなかった！？」

上条は叫んだ。

「……あ、だって……」

「いいから早く伏せろ！！」

神命の叫びに風斬はキョトンとした顔をした直後、

エリスがその拳を今度は地面に向けて放った。先程までまだ平らでタイルが敷き詰められていた通路の床は深く抉られ、その分の大きな床の破片が大量に宙を舞った。

ゴン！！と。彼女の顔が大きく後ろへ跳ねた。

宙を舞った破片の中の一つが風斬の顔面に直撃したのだ。

なにか、肌色のものが散らばり、メガネのフレームはその原型を留めておらずレンズも粉々に砕けて、吹っ飛ぶ。

風斬は大きくブリッジを描くように後方へのけぞり、何の抵抗もなく人形のように倒れた。

「か、ざ……風斬ィィいいいいいい」

上条は急いで彼女の元へと駆け寄り、神命もその後に続く。

しかし、二人は近づく前にそのあまりの光景に思わず立ち止まってしまう。

その惨状の所為ではない。そこに広がるあまりにも異様な光景の所為だった。

確かに風斬の傷はひどかった。頭部の右半分を根こそぎ吹き飛ばされている。コンクリートの塊が当たったとは思えないその傷は、ま

るで体表面で爆弾でも爆発したような状態だった。

しかし、問題なのはそこではない。

そんなこと、この光景の前ではほんの些事にすぎないと思えるほどの問題がそこには転がっていた。

二人は改めてその傷口を確認する。

頭の右半分を吹き飛ばすような滅茶苦茶な傷、だが、その中身は空洞だった。出血はない。それどころか、肉も骨も脳髄すらも何も無い。

しかしその代わりに、その空洞の中には黄金に輝く三角柱が浮かんでいた。一辺が２ｃｍ程の正三角形で高さは５ｃｍ程度のその三角柱はまるで磁石でも使っているかのように浮き、回転していた。よく見るとその表面には長方形が敷き詰められており、キーボードのようにカタカタと見えない手で押されているかのように動いていた。

「何なんだ、これは……」

あまりに異様すぎて神命はただ立ちすくんでいた。超能力と言うにはこの姿はあまりに異様。当の超能力者である神命にもこの事象は説明がつかない。

「う……」

どうしていいか分からない上条の前で、風斬が小さなうめき声を上げた。また、それに反応するように彼女の中の三角柱もくるくると回転している。

あのシェリーですら、その光景にぎょっと肩を固まらせた。

風斬の顔に痛みや恐怖のような表情は無い。片方しかない目で上条のほうを見ると、まるで寝起きのような仕草で、

「あ……れ？めがね……めがねは、どこ、です……か？」

自分がメガネをかけていた辺りに指で触れようとしてようやく、彼女はその異変に気づく。

「な……に、これ……」

彼女の指が空洞の淵をなぞっていく。

「い、や……ァ！な、に…これ！？いやぁ！！」

彼女はショーウィンドウに写った自身の姿に絶叫した。そしてバランス感覚を失ったかのように危うい動作で立ち上がると、混乱していたのか、あろう事か巨大な像――――エリスの方へ走っていった。

その動きにシェリーは我に返るとオイルパステルを一閃した。

その瞬間、巨大なコンクリートの塊の腕が振り回され、それに直撃した風斬の身体はくの字に曲がったままノーバウンドで３ｍ程吹き飛ばされる。

ぼとり、と生々しい音が響く。

風斬の左腕が半ばから捻じ切れ、わき腹は大きく口を開けていた。

それでも、彼女の、風斬　氷華の体は蠢いた。

「あ、あ、ア、あああああああ

「お、おい……上条、大丈夫か！？」

神命が話しかけてきた。勿論、大丈夫ではなかった。

「くそっ、一体何がどうなってんだ？」

「あの風斬とか言ったっけ？あいつの力は能力なのか？」

「分からねえ。だけど、あの傷だ。早く風斬と合流するか、シェリーの後を追わないと不味いことになる」

「ああ、じゃあ俺はあのシェリーとか言う女を追う。上条は風斬を頼む」

「分かった。あいつには分からないことが多すぎる。だから俺は一先ず風斬のことを調べてみようと思う」

そう言うと上条は制服のポケットから携帯を取り出した。

「じゃあ俺はもう行く。気をつけろよ」

「ああ」

それだけ言うと二人はそれぞれの目的を達成するため、それぞれの道へと走り始めた。

第十九話　其々は其々の目的の為に（後書き）

少し短い回。

第二十話　闇を塗り変える光の中で

神命　選は非常灯が薄暗く照らす地下街の通路を走っていた。

先程上条と役割を分担し、今は学園都市へ侵入した魔術師――シェリー＝クロムウェルの後を追っていた。

「くそ、あんな図体して何でこんなに移動が早いんだ」

上条と別れてから結構な時間走っているはずなのだが、シェリーの姿は全く見える様子は無い。今もその巨像が地を踏みしめる音が聞こえては来るが、地下街の通路で反響してどこから聞こえてくるのかはよく分からない。

「一体どこへ行ったんだ。よくあんな巨体でよくこんな狭い通路を通れるものだな」

しかし、そんなことに関心している場合ではない。風斬と言う少女が先程大怪我を負っていた（そもそもあんな状態を怪我と呼べるのかどうかも怪しいのだが）。よっていち早く魔術師に追いつき、対処しなければならない。

そもそも風斬　氷華とは一体何者なのだ？

一緒にいた上条でも彼女の正体については全くと言ってもいい程知らなかったし、彼女自身もそれは把握出来ていなかった様に見えた。

（あの魔術師が言っていた『虚数学区の鍵』と言う言葉も気になる。虚数学区は分かるがその鍵とはな……）

虚数学区。この単語について学園都市には様々な噂が渦巻いている。例えば、「学園都市の『始まりの研究所』であり、関連施設の増設の結果が学園都市である」「特殊な能力で空間のずれた場所に隠されている」「樹形図の設計者の演算中枢は虚数学区の架空技術で作られているため再現できない」等、その数も豊富だ。

だが、その正体はそんな生半可なものではなかった。

その実態は、無数の能力者が発生させるＡＩＭ拡散力場の集合体そのものであったのだ。

一体そんなものを作って学園都市は何をしようとしているのか、その単語の意味を知った時から抱いていた疑問の答えを彼女が持っているのだろうか？

（そう言えば、『ヒューズ＝カザキリ』って単語もあったな……どちらにせよ嫌な予感しかしないが）

ヒューズ＝カザキリ――虚数学区と一緒に度々出てくることのあったもう一つの単語。彼はまだこの単語が指す意味を知らない。

しかし今は、そんな事を考えている暇は無い。ここで彼女が消えてしまう。そうなればその謎を解く鍵も失われてしまう。

（さて、どこにいるのやら）

そう思った矢先、突然十字路の左奥から悲鳴と地響きが聞こえた。その悲鳴の主は間違いなくあの少女だろう。

「そっちか」

神命は勢い良くその角を左へ曲がる。そこもまた非常灯で照らされた薄暗い場所。その奥から悲鳴は聞こえてくる。

その奥にあの魔術師のシルエットがあった。

「そこまでだ、魔術師――シェリー＝クロムウェル」

しかし彼女は答えず、その代わりに手に持っているオイルパステルを宙を縦に切り裂く。するとそれに対応してエリスと呼ばれる石像がこちらに正面を向ける。

「着たわね、能力者。全く、こんな化け物なんか守ったって一銭の得にもならないのに」

妖艶ではあるが、それでも錆び付いたような声で女は言った。

その彼女と石像の後方で蠢く物が見えた。風斬だ。その外見は最後に見たものとは違い、頭部の空洞も、脇腹で大きな口をあけていた傷も今はなく、ちぎれた筈の左腕も復活していた。

ただし、その身体は大きくねじれており、今もその激痛に悶えていた。その様子は、死の痛みを感じながらも死に逃避することも出来

ない生き地獄そのものだった。

しかし突然、彼女はその動きを止めた。そして、彼女の意思で動かしているとは思えないような動作で身体のねじれを強引に戻すと、無表情で静かに上半身を起き上がらせた。驚いたことにその傷口は、ビデオの早送りでも見ているかのように見る見るうちに塞がっていく。

「ね。やっぱり化け物じゃない」

シェリーがそう言うと、我に返った様子の風斬がその表情を歪ませる。

「黙れ」

神命はそれだけ言うと、一直線に石像のほうへと走り出した。

シェリーは再びエリスに指示を出すと、巨大な拳が神命に迫ってくる。

しかし、彼は避けない。石像が生み出す大きな振動に臆するような動作も無くただひたすら走り続ける。

拳が神命に直撃する。だが、彼が吹き飛ぶことはない。すでに彼は石像に対して拒絶の能力を使い身体を透過させている。

その光景に少し驚いた顔を浮かべる。しかし彼が彼女に攻撃を加えることはなかった。彼が向かったのは風斬の方だ。

「風斬、大丈夫か?」

その何気ない問いに風斬は戸惑う様子で答えた。

「え、あ、はい……大丈夫です」

彼女の中でも、既に自身が人間ではないことに気づいているのだろう。そんな自分の人間ではない部分を見られどう接していいのか分からなかったように見える。しかし、神命はその言葉を聞いて安心したように言った。

「そうか。なら良かった」

しかし、そんなやり取りを相手が待ってくれる事はなく、すぐさま次の攻撃を放ってくる。

だが今回、この攻撃に神命は反応しすぐにその対処に向かう。彼は既に石像に対する絶対的な回避能力を身につけてはいるが、丁度神命と風斬、そしてエリスが一直線上に並んでいたため、神命が攻撃を避けるとその攻撃が風斬に当たってしまうからだ。

神命は即座に風斬の元へ近寄り彼女を両手で抱え上げるとこう呟いた。

「石像を拒絶、身体を透過、その効果を風斬に付与」

そこへエリスの拳が突っ込んで来た。が、やはり攻撃は当たらない。

「ちっ、また面倒な能力使いやがって。いいわ。ぶち殺してやる！お前の肉片はエリスの身体の一部となるのよ」

そしてシェリーは手のオイルパステルで横に一閃。エリス本体での攻撃は諦め、今度は地面を抉るようにその拳を振り下ろし、抉れた地面が二人目掛けて飛んでくる。

それに対し選は、

「大気を選択、空間に固定。飛んでくる岩石を拒絶、身体を透過、その効果を風斬に付与」

飛んでくる岩石は二人には当たらない、が、

（このままじゃ専守防衛だな。かと言ってここでプラズマなんか作ったらかなりの範囲が空気が薄くなって倒れている警備員の一人くらいは窒息するだろうし、光って言ってもこんな暗さじゃなぁ。警備員のライフルの一つでも持ってくるんだったな）

ここには神命が武器に出来るものが存在しない。落ちている瓦礫を投げつけたとしてもエリスに吸収されるのがオチだろう。この状況を打破できるのは……

「幻想殺しか……」

資料にはあらゆる能力が効かない能力とあったが、恐らく彼の言動からしてそれは魔術にも効くのだろう。決定打に欠ける今の状態では切り札と成り得る代物ではあるが、残念ながら彼は今ここにはいない。

「ここは上条宜しく肉弾戦しか無いか」

神命は空気を蹴ってエリスと距離を取り、風斬を安全そうなもの影

に隠す。

「おらおら、逃げてばっかじゃエリスには勝てないわよ」

そんなシェリーの声に神命は面倒臭そうに答える。

「そんなことは分かってんだよ」

そう無造作に言い捨てると、神命は次の能力を使う。

「石像の拒絶を解除。今からお前を大好きな大地と一体化させてやるよ」

神命は走り出す。しかし大地を踏みしめる音はしない。彼が走るにつれ見えない坂を上っていくように彼と床との間には隙間が生まれていく。

「エリス――」

そう呟くと、魔術サイドの彼女でも今の神にはエリスの攻撃が効くと分かったのか、エリスに命令を下した。

エリスは大きく足を踏み出しその腕を振るう。

それを神命は潜り抜けるように軽々と避ける。そして彼はある物に触れる。彼が触れるのはエリスと呼ばれる石像。これまでずっと能力で拒絶し続けた物体。その物体に触れて彼は呟く。

「地面を拒絶、身体を透過、その効果を石像に付与」

そう言い切った瞬間、石像の足が地面に減り込んだ。そしてそのまま腰、胸、腕、首そして頭と瞬く間にエリスは地面の中に消えてしまった。

「どうだ？お望み通り大地と一体化してやったぞ？」

地面に着地した神命は言った。

一瞬だけ驚いたシェリーだったが、すぐにその表情は見慣れた歪んでいるものに変わった。

「あまりエリスをなめないでもらいたいわね」

そう言って彼女はオイルパステルを振るう。その直後、地面が大きく揺れた。そして神命の立っている地面の周りが大きく盛り上がり、手も様なものが神命の身体に掴みかかった。

「！？」

土の塊に掴まれた彼の身体からはミシミシと耳障りな音が聞こえてくる。

「くそっ、石像を拒絶、身体を透過！！」

突然彼の感触を感じなくなった土の塊は、何も無い人一人分の空間を思い切り握り締める。彼が胸に手を当てよろめきながら床に立つと、彼を掴んでいたものの正体を確認した。

それは土に塗れより巨大に、より禍々しくなった石像の成れの果てであった。

「案外丈夫なんだな、その石像」

「言ったでしょ、大地は私の見方。その大地の中で私に刃向かおうとするのが間違いなのよ」

神命の状態を嘲笑うかのようにシェリーは答えた。

（肋骨の数本にひびでも入ったか）

そう神命が考えていた時、隠れていたはずの風斬が口を開いた。

「もう……いいです」

諦めの感情交じりに彼女は言った。

「どうせ私は傷付いても死なない化け物ですから……私を庇う様なことなんてしてもらわなくてもいいんです……」

割れて床に散乱しているショーウィンドウに写る自身の姿を見つめながら彼女は言った。

「もういいんです……私なんか守ってもらわなくても……それにあなたはさっき会ったばかりで私を守る義理なんて無いじゃないですか……」

今にも泣き崩れそうな声と表情で風斬は言った。

「馬鹿馬鹿しいな。そんな事を考えていたのか？」

一瞬の間も無く、神命は言い放った。

「別に風斬が人間かそうでないかなんて関係ねぇよ。お前が自分を化け物と呼ぶのを俺は止めたりしない。お前はそれを受け入れる覚悟があるならな。そもそも俺は目の前で困っている人間を見過ごせる程非常な人間じゃないんだ。それは上条だって同じだろうしな」

「でももう友達なんて呼ぶ資格は私には無いんです……」

「でもあいつはお前のことを友達だと言い張るだろうな」

一呼吸して神命は続ける。

「お前が化け物？もしそうだって言うんなら俺はあいつの友達を守るだけだ。どっちにしろ俺はお前を守る、ただそれだけだ。簡単だろ？俺は風斬とは会ったばかりだ、だけど俺がお前を友達と呼ぶ資格が無い、俺が友達を守る権利すら無いなんて、悲しいことは言わないよな？」

風斬はキョトンとして神命の顔を見た。

気迫のようなものは感じられなかった。だがその中に眠る信念のようなものが少しだけ見えた気がした。

しかし彼女の表情を確認することも無く、また、彼と対峙する魔術師――シェリー＝クロムウェルから視線を離すこともなく神命はこう言った。

「だけど今回の英雄（ヒーロー）は俺じゃないらしいな」

彼が言い終えると、二人の後ろの通路から足音が聞こえた。足音だけではない。まるで車のヘッドライトのような強烈な光の渦もだ。その光の中に神命は話しかける。

「遅いぞ上条」

「悪ぃな神命。遅くなっちまった」

「本当だ。ようやく役者が揃ったな」

神命は上条に顔を向けることなく彼と会話を続けた。もうそんなものは必要はない、とそんな表情で。

「何かぞろぞろと引き連れて来たな」

上条の後ろには八人の警備員が傷付いた身体に鞭を打つように着いて来ていた。

「……どう、して……どうして私みたいな……私みたいな化け物の為に駆け付けてくれるんですか！？おかしいですよ……私なんかの為に……」

不思議そうに風斬　氷華は問いかけた。

彼らが風斬の正体をどこまで知っているのかは分からない。が、少なくとも一般人ではない事ぐらい掴んでいるはずだ。

だからこそ、彼女は問い質したのだ。

どうして、と。

「ばっかばかしい。理由なんていらねえだろうが」

上条は一秒すら待たずに答えた。

「別に特別な事なんざなにもしてねーよ」

溢れんばかりの光の中で彼は言う。

「俺はただ友達を助けに来ただけだ」

風斬は一瞬、その言葉を理解できなかった。

だって彼女は人間ではない。化け物なのだ。身体の中は空洞で、皮膚一枚の中には何も無く、銃で撃たれても石像に吹っ飛ばされても死なないような身体なのに。

彼らにはどうでもいいと一言で切り捨ててくれるのか。

自分はここにいてもいいのだろうか。

彼らは自分の存在を笑って認めてくれるのだろうか。

呆然とする風斬に少年は言う。

「涙を拭って前を見ろ。胸を張って誇りに思え。ここにいる全員がお前に死なれちゃ困ると思ってんだ」

風斬は、顔を見上げる。

あれだけ闇に包まれていた世界はもうどこにも無い。

「今からお前に見せてやる。お前の住んでいるこの世界にはまだまだ救いがあるって事を！」

彼女は知る。

確かにあの金髪の女は暴虐の嵐によってこの地下街を闇に閉ざした。

けれど、彼らは光を用いて闇に立ち向かう。

暗がりの中に溺れる誰かの手を掴む為に。

少年は告げる。

「そして教えてやる。お前の居場所は、これぐらいでは簡単に壊れないって事を！！」

第二十一話　心に焼き付く言葉と決意

『馬鹿馬鹿しいな。そんな事を考えていたのか？』

『ばっかばかしい。理由なんていらねえだろうが』

化け物だと、そう言った私に二人の少年が一言でその現実を切り捨ててくれた言葉。

『俺はお前を守る、ただそれだけだ。簡単だろ？』

『涙を拭って前を見ろ。胸を張って誇りに思え。ここにいる全員がお前に死なれちゃ困ると思ってんだ』

自分の正体が人間ではないと分かった上で、二人の少年が自分の存在を認め居場所を提示してくれた言葉。

風斬は、顔を見上げる。

あれだけ闇に包まれていた世界はもうどこにも無い。

「今からお前に見せてやる。お前の住んでいるこの世界にはまだまだ救いがあるって事を！」

彼女は知る。

確かにあの金髪の女は暴虐の嵐によってこの地下街を闇に閉ざした。

けれど、彼らは光を用いて闇に立ち向かう。

暗がりの中に溺れる誰かの手を掴む為に。

少年は告げる。

「そして教えてやる。お前の居場所は、これぐらいでは簡単に壊れないって事を！！」

「エリス――――」

石像の影に隠れたシェリーは、怒りに震えた声で、

「――ぶち殺せ、一人残らず！」

叫ぶと同時、オイルパステルが宙を引き裂く。

「させん！！配置Ｂ！民間人の保護を最優先！！」

警備員達は透明な盾を持つ前衛とライフルを撃つ後衛の二人組みで動いていた。

ギギギザザギギ、と目の前の盾が悲鳴を上げる。エリスの身体に辺り乱反射した弾だけでこの様だ。しかしそんな中でもエリスは歩を進めて来る。

「少年、本当にやる気なの？怖気づいたって言っても誰も咎めないじゃん」

「やらなきゃなんねぇってのが正しいけどな。俺の右手には触れただけであのゴミ人形をぶっ壊す能力が備わってんだ。それに今はレベル５だっているんだ」

「そりゃあ、確かに月詠先生もそんな事は言ってたけど……」

「どの道このままじゃいつかアレはここまで歩いてくるぞ。そうでなくても弾は無限じゃねえんだろ？盾持ってるアンタの手だってそう長くは持たないんじゃねーのか」

そんな上条の心配の中神命が、

「弾丸を拒絶、以後現在俺が存在する半径１０m以外から飛んでくる弾丸の運動を停止」

弾丸の嵐の中、銃声にその声を掻き消されながらも呟いた。

直後、さっきまで悲鳴を上げていた盾が一斉に静かに黙り込んだ。

「何だ!?」

上条が叫んだ。

「どうだ?少しは楽になったか?」

そう聞き返してきた神命は、彼らの一番前で弾丸の嵐の真ん中に一人立っている。

見ると神命の前方１０m程度の位置に彼を中心として円を描く様に放たれたはずの弾丸が散らばっていた。エリスの身体に当たり乱反射してきた弾丸のみがその円の上空で一瞬だけ停止し、そこから自由落下していたのが確認出来た。

「褒めてもいいんだぞ?」

自信有り気に言う神命に上条が疑問を投げかける。

「これもお前の能力なのか?」

「ああ、存分に打ちまくれるだろ?それと、間違っても右手で俺に触れるなよ。その瞬間俺以外全員即死だからな。冗談じゃ済まされ

ないぞ」

盾を構えていた警備員達が次々と攻撃に回る。

「すげえな。お前って万能か？」

「いいや、俺にはあの石像には決定打を与えられないからな。そういうことで、俺が石像を何とかする。その間にお前はあの魔術師に一発ぶちかましてこい、いいか？」

「ああ、分かった」

そこへ警備員の一人――――黄泉川が口を挟んだ。

「ちょ、ちょっと待つじゃん。それで失敗してもウチらは少年を回収できない。その時は弾幕張るしかないじゃんか。そうなると少年ごとあの石像を撃つ事になるけど」

警備員の言葉に、風斬は愕然とした。

「……待って……待って、くだ、さい。……あ、あの……何を……」

「決まってんだろ。あの化け物を止めてくる」

ズン、という石像の重たい足音が響いた。

「ダメ、です……そんな……っ！危険、すぎ……！！」

そんな風斬を他所にじりじりと、石像は歩みを進めていく。

「指示を出す。最後に少年達に確認するけど、構わないの？」

「……、ああ」

「上条に同じく」

何をすべきかは、すでに打ち合わせてあったようだ。故に、答えは一言でいい。余計な言葉などという未練はこの場には存在しない。

「無理しやがって、格好良すぎるぞ少年」

小型の無線機を取り出し警備員は小さく笑った。

「いいよ、付き合ってやろうじゃん。代わりに何があっても成功させろ。そして生きて帰って来い。そのための協力ならいくらでもしてやる」

その言葉に二人は口元にわずかな笑みを浮かべた。

「準備せよ（プリパレーション）。――カウント3」

警備員が無線機に何かの命令を下した。その前では今も銃弾の嵐が吹き荒れている。

「――カウント2」

上条はほんのわずかに上体を起こした。

「止めるなよ、風斬」

ほとんど錯乱しかけている風斬に対し、上条は落ち着いた声を出す。

「お前が俺の事を避けてた理由な、きっとこの右手にあるんだと思う。この右手は、異能の力なら善悪を問わず、あらゆる力を打ち消しちまうから。きっと、お前の事も例外じゃない」

だから不用意に手を伸ばして押し留めようとするな、と上条は言う。

「――――カウント1」

シェリーも何か仕掛けてくることに勘付いたのか、さらに狂ったようにオイルパステルを振り回す。

しかし、この瞬間だけは、上条はシェリーの事など入れていなかった。

彼はただ、目の前にいる少女を見ていた。上条の右手の力を知り、自分が少年を避けていた理由を知って驚いた風斬の顔を。

「そんなに気にすんなよ。別に触れ合う事ができなくたって、お前が友達だって事にゃ変わりないだろ？俺は必ず帰ってくる。いいか、必ずだ」

「……あ。帰ってくる……？」

「おう。またインデックスと三人で、どっかに遊びに行きたいしな。そうだ、神命が一緒でもいいかもしれないな。あいつの事はまだよく分かんねえけど、良い奴に決まってる。人数は多い方が楽しいしな」

そう言って、彼は一度だけ笑った。

それから彼は前方へと視線を移す。

その視線の先には、倒すべき敵と頼るべき仲間がいる。

「――――カウント０」

「走れ！！上条！！」

瞬間、

エリスに向かって弾丸をばら撒いていた警備員達が一斉に撃つのを止めた。

その所為か、地下街には神命の叫びだけが木霊した。

シェリーにとっては予想外の展開だろう。

効果はあった。エリスの身体が前のめりになったのだ。これまで銃声を浴び続け、まるで強風に逆らうように前に重心を傾けていたからだった。

同時、二人の少年が走り出す。ターゲットに向かって一直線上に上条が先行する形で。

エリスと上条の距離は約７ｍ。

「くそ。やりなさい、エリス！！」

矢のように走る上条と神命に対し、慌てたようにシェリーはオイルパステルを振るう。

命令に忠実にエリスは拳は握る。

そのまま拳を振るってしまっては完全にバランスを崩してしまうと言うのに。そして案の定、拳を振るったエリスは更に前のめりになっていく。この距離なら神命達は絶対に巻き込まれないはずだ。

倒れ込んだ所を狙おうと上条は拳を握り締めた。

しかし、

ズドン、と上条達とは関係なく地面を殴りつけたエリス。

「なっ……！？」

エリスの拳を中心に、地面に半径８ｍ強の蜘蛛の巣状の亀裂が入る。トランポリンのように地盤は揺らぎ、地下街全体に不気味な軋みが伝わる。

その反動でエリスはばね仕掛けの様に起き上がると、今度は地面を這う虫を潰すが如く上条に拳を放とうとする。

「お前の相手は俺だよ」

そう聞こえた直後、上条の身体が左に大きくぶれると、シェリーの視界に上条の背後にいた神命が映り込んだ。

エリスの拳は空を切り、再び地面に突き刺さる。

神命はその腕をまるで階段でも上っているかのように軽快な跳躍で

駆け上がっていき、石像の頭部に達した時、

「天井を拒絶、身体を透過」

そう呟くと頭部を蹴り上げ天井の中に手を潜り込ませる。そして何かを掴み手を天井から引き抜いた。掴んでいるのは無数の電気配線。それを強引に引き伸ばしてぶら下がる様に降りてきながらまた呟く。

「現在いる地下街壁を拒絶、身体を透過、効果を配線に付与」

すると先程まで強引に引き伸ばされていた電線が大きくたるんだ。それを手繰り寄せながら床に着地し石像に巻き付ける。彼の手から離れると能力の効果から解放された電線はピンと張り、しっかりと壁に固定されている。神命はその動作を恐ろしい早さで完了させた。

「一丁上がりって所か」

やり終え、満足気に彼は言った。

その間に上条は石像の傍らから滑り込む様にシェリーに接近しようとする。

シェリーは当然それを阻止しようとエリスに命令を下す。エリスは腕を伸ばし、上条を拳が襲う。巻きついていた電線の一部が断線した。しかし拳は上条には届かない。身体を固定されてしまったエリスは腕を動かすしかなく、攻撃を当てるには長さが足りなかったのだ。

そして上条はエリスの向こう側、シェリーが警備員の銃撃から逃れる為の小さな闘技場に辿り着いた。

その直後、エリスの身体から火花が散った。警備員が銃撃を再開したのだ。

「え、エリス……」

彼女は焦りと緊張の入り混じった声を出す。今エリスを下手に動かせばシェリー自身が弾丸を浴びる羽目になるかもしれない。同じ理由で彼女はこの場から逃げ出すことも出来ない。

彼女の手の中にあるオイルパステルが不器用に宙を漂っていた。エリスをどう動かして良いのか分からないのだ。そんな事をしている間に銃弾の嵐の中を神命が平然とした顔で通り抜け、その小さな闘技場へと姿を現した。

「さって、と」

上条は言う。そして、肩の調子でも確かめるように、右肩を大きく回す。

「ようやくここまで漕ぎ着けたな」

神命は言う。そして、準備体操でもしているかのように、首を動かす。

「は、」

絶望的な状況に、シェリーは思わず引きつった笑みを浮かべていた。

「はは、何だそりゃ。これじゃ、どこにも逃げられないじゃない」

「逃げる必要なんかねえよ」

響く銃声の中で二人の少年は眼を合わせ、頷き合うと、

「テメェは黙って眠ってろ」

上条　当麻は、一切の手加減無しにシェリー＝クロムウェルを殴り飛ばす。

彼女の細い体は、風に飛ばされる紙屑の様に地面を何度も転がった。

第二十一話　心に焼き付く言葉と決意（後書き）

魔術サイドと話術サイドが交差する予定はありません。
そうすると神命が空気になってしまうので。

何か最近、以前に比べて文体が雑になってる気がする。
そもそも繋ぎが下手。って言うか6巻自体上条と風斬の心情メインだからオリキャラが……

定期考査近いんで更新遅れます。

第二十二話　絶望に埋め尽くされない心

「テメェは黙って眠ってろ」

上条　当麻は、一切の手加減無しにシェリー＝クロムウェルを殴り飛ばす。
彼女の細い体は、風に飛ばされる紙屑の様に地面を何度も転がった。

銃声はまだ止んではない。

シェリーが倒れたことでエリスはその動きを止めているが、決定打を与えた訳ではない。上条達はエリスの方へと向き直った。不用意に幻想殺しで破壊してしまうと上条が流れ弾の餌食になってしまうかもしれない。

「ふ。うふふ」

そこで女の笑い声を聞いて、二人は勢いよくシェリーの方へと振り返った。彼女は笑っている。倒れたままで笑っている。ただし、その手にオイルパステルを握り締めて。

ビュバン！！と、まるで抜刀術のようにオイルパステルが地面を走る。

「な……ちくしょう！二体目を作る気か！？」

それを阻止するために慌てて二人は走ろうとしたが、

「うふふ。うふうふ。うふうふうふふ。できないわよ。ああしてエリスが存在する以上、二体同時に作って操る事などできはしない。大体、複数同時に作れるのなら初めからエリスの軍団を作ってるもの。無理に二体目を作ろうとした所で、どうやっても形を維持できない。。ぼろぼろどろどろ、腐ったみてーに崩れちまう」

けどなぁ、とシェリーは獰猛に笑って、

「そいつも上手く活用すりゃあ、こういう事もできんのさ！！」

直後、シェリーの書いた文字を中心に半径約２ｍの地面が崩れ落ちた。その穴の中にシェリーは飲み込まれるように姿を消した。

「くそっ！！」

上条と神命は急いで穴に駆け寄るが、穴は深く、底は見えなかったが、微かに空気の流れを感じる。

「やられたな。地下鉄が通っているようだ」

神命が呟くと、先程まで静止していたエリスがバラバラと崩れていった。複数体を同時に作れないのだから、下で新しく作ったのかもしれない。目の前のエリスが崩れ去ると同時に、警備員の銃撃も止

まった。

「しかし妙だな……」

「何がだ？」

上条の言葉に神命が問いを投げる。

「あいつの狙いは俺と風斬を狙って今まで交戦してたんだ。その俺達が目の前にいるこの状態で、そう簡単にこの場から去ると思うか？」

「いや、思わないな。俺だったらここで仕留める」

「だろ？なら何で奴はこの場から消えたんだ？」

二人の少年はしばらく険しい顔をしながら、これまでシェリーがばら撒いた言の葉を集めていく。

『戦争を起こすんだよ。その火種が欲しいの。だからできるだけ多くの人間に、私がイギリス清教の手駒だって事を知ってもらわないと、ね？――――エリス』

戦争を引き起こす、その目的の為にシェリーは学園都市とイギリス清教の要人を襲った。

『別に何でも良いのよ、何でも。ぶち殺すのはあのガキでもある必

要なんざねえし、テメェを殺したって問題ねえワケだ！！』

しかし、その目的を達成するためには風斬以外の人間でも代用できるのだとしたら。

『うふ。うふふ。うふうふうふふ。禁書目録に幻想殺しに、虚数学区の鍵。どれがいいかしら。どれでもいいのかしら。くふふ、迷っちゃう。よりどりみどりで困っちゃわぁ』

シェリー＝クロムウェルは逃亡したのではなく、新たな標的を狙いにこの場を立ち去っただけだったとしたら。

そしてその標的、この場にいる上条　当麻と風斬　氷華を除き、唯一この場にいないもう一人の標的とは、

「くそ……。インデックスか！！」

「インデックス……あの修道女か？」

「ああ。くそ、早く地上に出てあいつを探さないと……」

神命はエリスの残骸の向かい側にいる警備員の一人――――黄泉川愛穂の下に駆け寄って、

「おい、黄泉川。この地下街の封鎖は解かれないのか？」

「今すぐには無理じゃん。私達の管轄は地下街の管理とは異なるじ

ゃん。こちらも連絡をつけているけど、命令系統というものもあるし、開くにはもう少し時間が掛かるじゃん」

「くそ！！」

その言葉に上条は毒づいて壁を蹴る。その姿に風斬がビクッと身体を震わせるた。この場にはあの魔術師の姿はなく、何故慌てているのか分からないといった様子だ。

「…あ、あの……さっきは、ありがとう、ございました」

「ん？別にお礼を言われるほどの事でもねーと思うけど」

「……そっちの……か、神命さんも……ありがとう、ございました」

「俺か？別に俺も礼を言われるようなことはしてねえよ。それより風斬の体調はどうなんだ？」

「あ、はい。……平気だと、思います、けど。えっと……それで。何が、あったん……ですか？」

その言葉に上条は少し黙り込む。しかし、隠していても仕方が無いとゆっくりとその口を開いた。

「シェリー＝クロムウェル……あのすすけたゴスロリ女は逃げたんじゃない。次のターゲットとしてインデックスを追い始めただけだ」

「え……？」

「警備員と掛け合ってみたけど、地下街の封鎖はまだ解かれないっ

て。ったく、あの分厚いシャッターが開かないと外へ出られないのに」

「俺は能力で出られるけど、それだと能力の効かない上条がここに残ることになる」

「シャッターを壊すことは出来ないのか？」

「無理だな。俺は自分ではそれほどの破壊力を持つ攻撃を作れない。そんなことできたらとっくにあの石像相手に使ってる。作れないこともないが、そうするとここにいるお前や警備員が窒息死するが、そんなことは嫌だろ？」

「でも神命はここから出られるんだろ？インデックスの元に向かうことは出来ないのか？」

「それも難しいな。俺はインデックスの居場所を知らない。だが、あの魔術師は最初みたいに学園都市中を検索できる。俺が探し出す前にインデックスを見つけるだろうな」

それに、と神命は付け加える。

「どうせインデックスを殺すにはあのエリスとかいう石像を使うんだろう。俺はあいつを相手取るのは少々骨が折れる……って言うか折れたしな。そいつを止めるには上条がそっちに向かうか、あの魔術師を倒すしかない。俺としてはまだこの地下街にいるであろう魔術師を倒すほうが手っ取り早いと思うが」

「ならやっぱ、行くならここしかねえか。くそ、すぐそこの隔壁を開けてくれりゃ簡単に先回りできるってのに、何で追走なんて後手

に回らなくっちゃいけないんだ！」

上条はシェリーが空けた大穴の前で舌打ちをする。

「ま、待って……本当に行くんですか？」

多少のリスクを背負ってでも警備員に連絡するべきだと風斬は言った。彼女は知っているのだ、あの金髪の女の恐ろしさを、何度も身体を壊されたからこそ。

あれは正真正銘『化け物』だ。

それを知っていながらも、彼らは揺るがない。

そこで彼女にある考えが浮かんだ。

「……大丈夫、です。あなた方が、行かなくても……助ける方法は、あります」

風斬の声に二人は眉をひそめた。彼女は言う。

「化け物の、相手は……同じ、化け物がすればいいんです」

その言葉に上条は息が止まった。しかし彼女は続ける。

「私は、あの化け物に、勝てるか分からないけど、少なくとも、囮

ぐらいは出来ます……。私が殴られている間に、あの子を逃がすことが……できます。私は、化け物だから、それぐらいしか、できないけど……」

上条は絶句した。それから彼の表情は驚きから怒りへと塗り替えられていく。

「お前、まだそんなこと言ってんのか！良いか、お前がはっきり口にしねえと分かんねえなら、一から十まで全部教えてやる。お前は化け物なんかじゃねえんだよ！俺が、神命が誰のためにここまで駆けつけたと思ってんだ！それぐらい分かれよ、何で分かろうとしねえんだよ！」

上条　当麻の言葉には、一つの嘘も含まれていなかった。

「そんな風にされて嬉しいとでも言えるような人間に見えんのか、俺達が！あんな化け物にお前が殴られているのを背を向けて逃げるような人間だと思ってたのか、インデックスが！ふざけんな！たとえお前が俺達を見捨てたって、俺達はお前を見殺しにしたりはしねえんだよ！できるはずがねえだろ！！」

神命が上条の制止に入る。

「おい上条、もうその辺にして頭を冷やせ。風斬だってそんなこととっくに知ってる。俺だって上条と同じなんだ、言いたいことは山ほどある」

風斬はエリスの残骸に目を向け言った。

「……だけど、それで良いんです。私は化け物で良い……」

風斬　氷華は、今度は顔を上げ上条から視線を離さずに告げる。

「私は、化け物だったから……あの石像に何度殴られても、死にませんでした。私が……化け物だからこそ、私はあの化け物に立ち向かえます……」

だから、と彼女はそこで、一度だけ言葉を区切って、

「私は……私の力で、大切な人を守ります。だから、私は……化け物で、幸せでした」

彼女はそう言って、にっこりと笑うとシェリー＝クロムウェルの空けた大穴の縁から飛んだ。

上条は何かを叫んでとっさに手を伸ばそうとしたが、彼はその手を止めた。あることに気づいたからだ。

彼が伸ばした手は右手だった。あらゆる異能を打ち消し、風斬　氷華という化け物をこの世から消し去ってしまう、絶対の右手。

風斬の身体が大穴の中へと消えていく。その途中でそっと微笑みながら。

上条は風斬の消えていった穴の前で呆然としていた。

「行っっちまったな……」

神命が話しかけた。

「くそ、どいつもこいつも……」

「そう言うな上条。だがこれからどうする？こうなった以上俺はこの穴の下に行く。今なら風斬に追いつけるかもしれないし、あの女もいるかもしれない。それに俺はそいつの行動目的に少しだが心当たりがある」

「……そうなのか？」

「ああ、だから俺は魔術師を倒すことであの化け物を止めようと思う。上条はとりあえずこの地下街から出てインデックスの元に向かえ。良いか、今はただこの地下街か出ることだけ考えろ」

「分かった」

「それとここからは完全に別行動だ。連絡手段が欲しい」

二人は互いの携帯電話をポケットから取り出し、向かい合わせる。

そしてこの薄暗闇には場違いな軽快な効果音が響いた。

「これで地上では連絡を取り合えるな。じゃあ俺は行く。必ず、必ずだ。あいつらを救って来い！！」

「言われるまでもない！」

そして神命は大穴の闇の中に勢い良く飛び込んだ。

第二十二話　絶望に埋め尽くされない心（後書き）

あれこんな展開どこかで……気のせいか。
って言うか話が進まねぇぇえええええ。

前の言いましたが、定期考査が近いので更新が遅くなります。

第二十三話　境界線上の闘いの終結

神命は地下深く繋がっている穴を風斬の後を追って降りてきていた。

穴の先は予想通り地下鉄に通じており、下には二本のレールが敷かれ、非常灯が薄暗く辺りを照らしていてぼんやりと周辺が見渡せる。

次第に目が慣れ、辺りの光景を確認してみる。後ろには崩れて穴となった分の地面の土砂が山を作っていた。前方には何かの足跡のように一定の間隔で地面が抉れていた。恐らくあのシェリー＝クロムウェルという魔術師がここでエリスとか言う石像を作り直したのだろう。地面と一緒に敷かれているレールも潰れていた。

（魔術師はこの足跡を辿って行けば追いつけるとして、風斬の通った痕跡は……）

より目を凝らして辺りを見渡してみるが風斬の姿は愚か、何の痕跡も見当たらない。魔術師の後を追ったのか、別ルートでインデックスの元へ向かったのかは判別できなかった。

（まあとりあえず、あの魔術師を追うか）

神命は走り出す。地下鉄の構内は等間隔四角いコンクリートの柱が

並び、二本のレールを隔てている。足跡は闇の奥へと続いていた。しかし、あの巨体を引きずっているには全く震動も感じない。それは世に言う嵐の前の静けさだった。

（しっかし、本当に静かだな、静かすぎる。いくら離れていたとしてもあの巨体を震動なしで移動させているとは思えない。まるでエリスでの移動を行っていない……待ち伏せでもしてような……）

そう考えた瞬間、神命のすぐ側にあった支柱の一つが崩れた。コンクリート製の支柱とは思えない、まるで積み上げられたレンガを無造作に崩すような不自然な崩れ方。

「おっと、危ねぇ」

神命は軽快な身のこなしでその瓦礫を避ける。

「流石に、そう簡単に潰されてはくれないのね」

瓦礫がズンと大きな音を立て、コンクリートの粉塵が舞う中、深い闇の奥から女の声が聞こえた。神命はその方向に目を向けると、そこには薄汚れたドレスを引きずるようにシェリー＝クロムウェルが立っていた。

「ふ。うふふ。うふふうふ。エリスなら先に向かわせてるわよ。今頃はもう標的の元へ辿り着いているかしら。それともう肉塊に変えちまってるかもなあ」

結論から言うとエリスを操るにはオイルパステルを振るう必要はなかった。それどころか遠隔操作も可能だったのだ。無論その分、頭の中は処理で大変なのだろうが。

「残念だが、お前がここで待ち伏せをする意味は無くなったようだな。お前はあの石像を一撃で破壊する幻想殺しを恐れて、ここで足止めするつもりだったんだろう？だが上条はすでに地上へ出るルートを探している最中だ。見つけ出すのも時間の問題だろうな」

「ちっ……」

シェリーは舌打ちをしてオイルパステルを振るう。すると天井から床を照らすように光が降り注いだ。神命はすぐに天井を見上げる。そこには魔方陣が描かれていた。魔術は素人レベルの神命にもこの魔方陣が発動することくらいは容易に理解でき、即座にそれに対処する。

「瓦礫及び光を拒絶、身体を透過。大気を選択、空間に固定」

神命が叫んだ瞬間、彼の姿は虚空へと消えた。足音も聞こえない感じるのは殺気だけのはずだ。神命は空気を踏みしめ無音でシェリーの背後に回り込む。

誰にも気付かれないはずの行動だった。が、

シェリーは何も無いはずの、透明化した神命しかいないはずの空間に身体の向きを変え、オイルパステルでその空間を一閃した。その軌道は神命の脇腹に直撃する。

「ぐほっ、痛ぇ。くそ、何で居場所がばれた！？」

何も無いはずの地面にズサーッと音を立てて砂埃が舞い、その中から疑問の声と共に神命がまるで空間から滲み出るかのように姿を現

す。

（完全に気配は消したはずだ。相手の位置を探るような結界でも張ってたのか？）

普段の彼とは違い、少し動揺を見せている。そこへシェリーが、

「そんな巨大な力の束なんか引き摺ってたらどんな魔術師でも普通気づくわよ。お前、私を舐めているの？」

「力？ＡＩＭ拡散力場の事か？」

「そんな科学用語を魔術師の私が知ってるとでも思っているの？」

じゃあ一体何なんだよ、と溜め息を付きながら神命は立ち上がる。

「あーもう面倒臭ぇ、地上へ出たほうが楽だったか。いやいっその事地上へ出るか……」

「ごちゃごちゃ言ってんじゃねえぞ、能力者！！」

シェリーはすぐにオイルパステルを振り回し次の攻撃を繰り出す。今度は神命のいる場所を挟み込むように両側の壁に描かれた魔方陣が作動し、壁や天井に亀裂が入る。そして大量の岩の塊が神命の頭上に降りかかる。

「だから効かねえって」

神命は一度瓦礫の山の中に消えたが、呆れたように頭を？きながらすぐにその姿を現す。

「あああもうこのままじゃ埒が明かねぇ。とりあえず、この騒動を起こした理由を聞こうか？まさか科学と魔術、双方のバランスが保たれているこの状況で、戦争を起こすってのがイギリス清教全体の総意って訳じゃないよな？」

神命の問いにシェリーはただ笑みを浮かべているだけ。そしてにやにや笑いながら、告げる。

「超能力者が魔術を使うと、肉体が破壊されてしまう。聞いたことはないかしら」

「ああ？」

質問と回答が噛み合っていない。そのことに神命は少し眉をひそめる。

「何故そんな事が分かったのか、その答えを貴方は知っているかしら？」

知らないわけがない。

神命がこの学園都市に来て、一番初めに与えられた実験内容だ。沢山の子供が傷付き、そして死んだ。沢山の子供が彼の目の前で呪文を口にする。口から血を吐き出し、手足に大きな傷跡を刻んだ。

そんな中で自分だけが生かされた、生かされてしまった。

それから行われる数多くの実験の為に、特別だといわれ続けた自分の為に、

何の特別な才能も持たない多くの人間が犠牲になって。

忘れたくても忘れられるはずがない。

そんな遠い過去の思い出を口の中で噛み締めながら、神命は次なる問いを投げる。

「それはイギリス清教の一部の部署での出来事だろう。今はどうなってる？」

「潰れたというか潰されたというか。科学側と接触していた事が知れたその部署は、同じイギリス清教の者によって狩り出されたわ。互いの技術・知識が流れるのはそれだけで攻め込まれる口実にもなりかねねえからな」

シェリーが一度間を空けた。それだけで彼我の間は静寂に包まれた。

「エリスは私の友達だった」

張り詰めていた静寂の中で、彼女はポツリと言った。

「エリスはその時、学園都市の一派に連れてこられた超能力者の一人だった」

エリスという名を聞いて、神命は再び眉をひそめた。エリスという名はあの石像に付けられていた名だ。だとすれば、彼女はどんな心情を抱いてその名を口にしていたのだろう。それは神命が考えても出るはずのない答えだった。

「私が教えた術式のせいで、エリスは血まみれになった。施設を潰そうとやってきた『騎士』達の手から私を逃がしてくれるために、エリスは棍棒（メイス）で打たれて死んだの」

その言葉は暗い地下鉄の構内に大きく響き、そして再び静寂が張り詰める。

シェリーはゆっくりとした口調で、

「私達は住み分けするべきなのよ。互いにいがみ合うだけでなく、時には分かり合おうとする想いすら牙を?く。魔術師は魔術師の、科学者は科学者の、それぞれの領分を定めておかなければ何度でも同じ事が繰り返されちまう」

その為の戦争。

「そしてそれを防ぐために戦争を起こして、魔術師と科学者の両方に理解させようって言うことか。互いが接触し合えば、これからも多くの犠牲が伴うと……」

だが、と神命は言って話を続ける。

「お前の予感は的中しちまったみてぇだな」

「何?」

シェリーの笑みが止む。

「繰り返されたんだよ、あの実験は。ほんの十年前の事だ。学園都市側でその実験は再開されたんだよ。この俺を使って……」

「あんた、一体何を言って……」

「知らなかったのか？二十年前の実験、俺は知っていたぞ」

「馬鹿な……もう科学側と手を結ぼうとする魔術師はいなくなったはずよ」

シェリーの顔からどんどん余裕が失われていく。

「シェリー……シェリー＝クロムウェル。お前の名だが、俺が最初その名前を聞いたとき違和感があったんだよ。どこかで聞いた事がある、とな」

そして神命は構内の右側の壁に目を向けて、

「ついでに言っておくと、俺はこのそこら中に描かれている魔方陣を見た事がある。正確には、これに似たようなものだがな。それは俺が十年前の実験に参加していた時のことだ。その場に魔術師がいたかどうかは分からない。だがその実験にお前の術式が使われていた事は事実だ」

「ならばこそ、余計に住み分けが必要なのよ。何故お前はそう思わない？」

「思ったよ。この世に魔術なんてものが存在し、科学と交差する度にこんな悲劇が繰り返されるなら交わる必要なんてないとな。だが無理だと気づいた。この街の長がどんな男なのかを知ってからな。だから俺は別の道を歩む。その道で世界を変える。残念だがお前の考えは納得しかねるな」

「別に賛同して欲しい訳じゃねえ。私は私の道を進む。その為にお前はここで終わってもらわなきゃ困るんだよ」

そう言って彼女はオイルパステルを空中に滑らせる。同時にこの空間全体が魔方陣の光で明るく照らされていく。

「地は私の味方。しからば地に囲われし闇の底は我が領域」

（こいつ自分もろとも土に埋まって、ここを墓穴とする気か！？）

「全て崩れろ！泥人形のように！！愚者を飲み込め！泥の中へと練り混ぜろ！私はそれでテメェの身体を肉付けしてやる！」

最後のスイッチを入れるようにシェリーは叫ぶ。

地下はその耐久性を失ったように亀裂が入り、土砂に押しつぶされそうになっている。

しかし神命はその場から一歩として動こうとはしない。すでに対策はしてある。そしてその対策を施している時から彼の勝利は確定しているようなものだ。

壁が、天井が、一斉に崩れ始める。その光景をシェリーは笑いながら見ている。

辺り一面が土砂と粉塵で覆われ、何も見えなくなった。だが、

「お前は何も分かっちゃいねぇ」

そう神命が叫びながらシェリーの目の前に現われる。シェリーは驚き視線を神命に合わせ、オイルパステルを振り回すが遅かった。神命の放った拳はシェリーの腹に勢い良く突き刺さる。

髪もドレスも振り乱しシェリーの身体が構内を二転三転と転がっていく。そして何mか吹き飛んだ末にようやくその動きを止めた。万策尽きたのか、その顔には余裕の二文字は微塵も感じられなかった。

「……くそ、ちくしょう」

シェリーはよろめきながら立ち上がり、一歩二歩と後退しながら忌々しそうに呟いた。

「戦争を、『火種』をおこさなくっちゃならねえんだよ。止めるな！今のこの状況が一番危険だってどうして気づかないの！？学園都市はどうもガードが緩くなっている。イギリス清教だってあの禁書目録を他所へ預けるなんて甘えを見せている。まるでエリスの時の状況と同じなのよ。私達の時でさえ、あれだけの悲劇が起きた。これが学園都市とイギリス清教全体なんて規模になったら！不用意に互いの領域に踏み込めば、何が起きるかなんて考えるまでもないのに！」

シェリーの声は暗い地下を何度も反響し、神命の耳に何度も響いた。耳だけではない、心にもだ。

しかし、

「くだらねぇ。お前の考えは古いんだよ。幻想殺しが、禁書目録が、風斬　氷華が、お前に一体何をした？お前は誰かを救おうとする前に、誰かを傷つけようとしてるんだよ。怒るのだっていい。悲しむ

事も俺は止めない。だがその感情の矛先を向ける方向は間違いだ。そもそも矛先を誰かに向ける事すらおかしいんだ。俺だってお前と同じ様な感情を持ってる。今の状況をひっくり返したいと思ってるんだよ。だがお前が足掻いた所で、俺達が嫌う闘いが起こっちまうだけなんだよ。どうしてそれを理解しないんだ！！」

こんな言葉でシェリーの何が変わるのだろう。たったこれだけの言葉を並べただけで彼女の決意が、誓いが変わるとは思ってはいない。神命はただ、沸きあがってくる感情を言葉で伝えただけだ。ならば何が彼女の心を変えられるのだろうか。

「……分かんねえよ」

シェリーはぎり、と奥歯を噛み締めた。

「ちくしょう、確かに憎いんだよ！エリスを殺した人間なんてみんな死んでしまえば良いと思ってるわよ！魔術師も科学者もみんな八つ当たりでぶっ殺したくもなるわよ！だけどそれだけじゃねえんだよ！本当に魔術師と超能力者を争わせたくないとも思ってんのよ！頭の中なんて始めっからぐちゃぐちゃなんだよ！」

相反する矛盾した絶叫が、暗い構内に響き渡る。

「信念なんか一つじゃねえよ！いろんな考えが納得できるから苦しんでいるのよ！たった一つのルールで生きてんじゃねえよ！ぜんまい仕掛けの人形みたいな生き方なんてできないわよ！笑いたければ飛ばせ。どうせ私の信念なんか星の数ほどあるんだ！一つ二つ消えた所で胸なんか痛まないわよ！！」

対して神命は一言で、

「何で気づかねえんだよ、お前」

「……何ですって？」

「結局、お前が言いたいことは、お前が抱く信念なんてたった一つしかねえじゃねえか。そんな事俺にだって分かるぞ」

彼は言う。

彼女すら気づかなかったたった一つの答えを、

「お前はただたった一人の友達を守りたかっただけじゃねえか」

そうだ。

彼女の中に渦巻く星の数ほどある信念も、元はたった一つの想い。全てはそこから発散し、全てはそこへ収束する。結局、今も昔も何も変わってなどいなかった、ただそれだけだった。

「それを踏まえてもう一度良く考えてみろ。お前も見ただろ。上条達がどう互いに接していたかを。お前の目にはどう見えた？あいつらが争いを起こすように見えたか？ただ微笑み、触れ合うだけのあいつ等が。寧ろお前が望むのはああいう光景なんだ。住み分け？そんなもの必要ないな、少なくともあいつ等には」

シェリーが本来望んでいたのはそういうことだ。もう一生叶うはずのない願いはそういうもののはずだ。何者にも変えられない、変えられるはずがない。

だからこそ彼は続ける。

「お前の手なんか借りなくても、この世界はちゃんと回っている。だからもうあいつの、上条の大切なものは奪うな。これ以上誰かの大切なものを奪うな。嘗てお前がされたように」

シェリー＝クロムウェルの肩が揺れた。いや、揺れたのは彼女の心なのかもしれない。

彼女の顔は苦痛に歪んでいた。だが進み続ける。それはたった一人の友のためだ。

「――――我が身の全ては亡き友のために！！」

放たれるのは魔法名。

たった一つの信念だけが刻まれた名。

「いい名だ、覚えておこう」

神命はそれだけ呟いた。

シェリーは壁にオイルパステルを走らせる。たとえそれが神命に一つの傷を与えられないと知っていても、彼女は止まらない。

崩れ始めるコンクリートに神命は目を向けたが、その前にシェリーが神命の懐へ飛び込んでくる。神命はそれに迎え撃つ、ある信念と共に。

「いいぜ別に。俺はもういろんなもんを背負ってんだ。一つや二つ背負うものが増えたって変わりはしない。だから俺はお前のその信念も背負いきってやる！！」

そう言って神命はシェリーの持つオイルパステルを拳で粉々に砕くと、その勢いを殺さずに彼女の顔面に拳を突き刺した。

さっきとは違い、彼女は何の抵抗もなくいとも簡単に吹き飛び、地面を跳ね回った。神命は倒れたシェリーに近づいていく。どうやら気を失っているようだ。彼は仕方なくその場を後にする。ただこう呟いて、

「背負いすぎて進めなくならんなきゃいいけどなぁ……」

神命は地上に出て、とある廃墟の前に立っていた。その近くには何かコンクリートや泥や土等の山が出来上がっていた。恐らくエリスの残骸だろう。彼が駆けつける前にこちらも決着が着いていたらしい。

神命はビルの屋上を見上げた。そこにはあの三人がいた。風斬は何故か半透明になっているように見え、あのインデックスとかいう少

女と会話しているようだ。それからしばらくすると会話が終わった。風斬は何故か哀しげな表情を浮かべている。

そして彼女が神命のいるビルの下を見た。神命には彼女と目があったのかどうかは分からなかったが、一度だけ彼に微笑んだ。昼に彼女が上条と一緒にいた時のように。

そして消えた。彼女のいるべき場所に帰っていったのだろう。

それから上条とも目が合った。上条は何か話したそうな顔をしたが、今は話さなくてもいいだろう。話さなくても言いたい事は伝わる。

神命はビルに背を向け空を見上げた。太陽は西へ傾き空は朱色に染まっている。月も既に暗くなり始めた空を照らし始めている。

「今日は歩いて帰るか」

彼は一言だけ呟いて歩き始めた。

第七学区には窓のないビルが建っている。

「これで満足か？」

ドアも窓も廊下もエレベーターも通風孔すら存在しないビルの一室で、土御門　元春は空中に浮かんだ映像から目を離して吐き捨てるように呟いた。

巨大なガラスの円筒の中で逆さに浮かぶアレイスターは、うっすらと笑っている。

「かくして人間は駒のように操られ、また一つ虚数学区・五行機関を掌握するための鍵の完成に近づいた、という訳だ。正直、オレにはお前が化け物に見えるぞ」

虚数学区・五行機関

「まさかその正体がＡＩＭ拡散力場そのものだなんて誰も思わないだろう。学園都市に住む二三〇万人もの学生の周囲に自然に発生する力が虚数学区を作っているなどと。そしてそれを制御するための鍵こそが風斬氷華、という訳か。まったく、風斬については、あくまで虚数学区の一部分とはいえ、あんなものに人為的に自我を植えつけて実体化の手助けをするなど、正気の沙汰とは思えない」

と、それまで黙っていたアレイスターの口が開いた。

「これも虚数学区を御するための方策だ。『何をするか分からない』無自我状態よりも、敢えて思考能力を与えた方が行動を予測できるし、上手く立ち回れば交渉や脅迫なども行える」

「そこまでして、虚数学区を制御する事に意味があるのか」土御門は、やがて問いただした。

「確かに虚数学区は学園都市の脅威だ。だが、脅威とは内側だけにあるものではないぞ。今回の一件によって、世界は緩やかに狂い始めた。理由はどうあれ、イギリス清教の正規メンバーを警備員と能力者の手を借りて撃退したんだ。聖ジョージ大聖堂の面々はこれを黙って見過ごすとは思えない。まさか、お前はこの街一つで世界中の魔術師達（まじゅつしたち）に勝てるなどとは思っていないだろうな」

土御門の脅迫めいた声に、しかしアレイスターは笑みを崩さない。

「魔術師どもなど、虚数学区さえ掌握できれば取るに足らん相手だよ」

「あれ、だと？」

アレイスターの言葉に土御門は眉をひそめる。ふと土御門は背筋に嫌な感覚が走り抜けた。

（待て、よ……）

もう一度、彼はＡＩＭ拡散力場の集合体、虚数学区・五行機関について考える。

それは赤外線や高周波のように、そこにいるのに見る事も聞く事もできず、

人間とは別位相に存在する、ある種の力の集合体によって構成される生命体。

土御門元春は知っている。

その存在を、魔術用語で述べるとどんな言葉になるのかを。

（まさか、天使）

いや、虚数学区の住人――風斬氷華を『天使』と表現するなら、彼女達が住んでいるとされる『街』とは、つまり……。

「アレイスター……お前はまさか、人工的に天界を作り上げるつもりか！？」

「さてね」

対して、アレイスターはつまらなそうに一言答えるのみ。

「ふん。これがイギリス清教に知れれば即座に開戦だな。今にして少し思う、オレはシェリー＝クロムウェルに同情すると。お前の言動を吟味する限り、ヤツのポジションは単なる悪役ではない。れっきとした、自分の世界を守るために立ち上がったもう一人の主役だろうさ」

「馬鹿馬鹿しい妄想を膨らませるな。私は別に教会世界を敵に回すつもりは毛頭ない。そもそも君の考えにある人造天界を作るには、まずオリジナルの天国を知らねばならない。それはオカルトの領分だろう。科学にいる私には専門外だ」

「ぬかせ。お前以上に詳しい人間がこの星にいるか。そうだろう？だがこの一件、思わぬ邪魔が入ったようだな。第六位。奴の介入はお前のプランには入っていたのか？」

「いや。だが、彼の行動はプランに思わぬ躍進を与えてくれたよ」

「何！？」

「何を驚く？彼も第六位の座を与えられている身だ。私のプランに含まれていないはずがないだろう？」

「そうではない。思わぬ躍進だと？今回は幻想殺しにシェリー＝クロムウェルを倒させることに意義があったんじゃないのか？」

「不満なのか？君が彼の何を知っているというんだ？それこそあの風斬という少女の事よりも知らないんじゃないのかね？」

「確かに、オレは奴の事をよくは知らない。ただ最高原石を先に見つけておきながら、そいつよりも先にこの学園都市に取り寄せられたお前のお気に入りの宝石だって事くらいしかな」

「それはただの言い掛かりに過ぎん。手に入れられるものから手に入れた、それだけだよ」

土御門は、唇を歪めて、

「魔術師・アレイスター＝クロウリー」

土御門は一度そう言って間を空け、二人の間に沈黙が走る。

「今回の一件で世界は緩やかに狂い始めた。イギリス清教のメンバーをわざわざこの街に招き入れ、撃退したんだからな」

土御門は、わずかに笑って、

「オレにはお前が考えている事など分からないし、おそらく説明を受けても理解できないだろう。だが、あの幻想殺しを利用するというなら覚悟しろ。生半可な信念ぐらいで立ち向かえば、あの右手はお前の世界を食い殺すぞ」

彼が告げると、ちょうどタイミングを計ったように空間移動能力者が部屋に入ってきた。

三〇センチ以上も背の低い少女にエスコートされ、土御門はビルから出て行く。

誰もいなくなった部屋の中、逆さに浮かぶ男は一人呟いた。

「ふむ。私の信じる世界など、とうの昔に壊れているさ」

第二十三話　境界線上の闘いの終結（後書き）

少し間が開いてしまいました。

とりあえず6巻分は完結。

これからも間が開くと思いますが宜しくお願いします。

第二十四話　似ても似付かぬ二つの月

「はぁ……どこでどう転べばこうなるんだ……」

現在　２０：２０。

神命　選はとある建物の外壁に背中を預け溜め息を付いていた。ここから少し離れた所からは何やら物騒な物音が聞こえてくる。しばらくするとその音に紛れて、一人の二十歳くらいの女性が声を上げて建物の中から飛び出してきた。

「待たせてしまったわね。神命少年！車の準備に手間取ってしまったわ」

その姿を神命はうんざりした様子で見据えて、もう一度深く溜め息を付くと声を大きくして言った。

「どこでどう転べばこうなるんだよ！！」

どうしてこうなったのか?、その理由を説明するには少々時を遡る必要がある。

――9月6日　18：38

――長点上機学園寮　三階　神命　選の自室

『……ザザ……聞こえ……すか……こちらは、ざざざ……アナタ、達の……言葉は、これで、合っている……ざざざ、でしょうか……。私の、ザザ……地球から、火星へ……ザザ』

神命　選はソファに腰掛けながら、彼の気まぐれにより学園都市から与えられた多額の奨学金にものを言わせて買った無駄に大きな薄型テレビから流れてくるニュースに耳を傾けていた。

『以上が、火星方向より電磁波の解析結果となります。学園都市第二十三学区を中心とした専門委員会からの公式報告は未だに発表されず、各方面で様々な憶測が飛び交っており――』

そうテレビの声がそう言った時、それは突然飛んできた。

「星が見たい」

唐突なリクエストだった。

「……はぁ？」

「だーかーらー、星空が見たいの！！」

「……どうぞ？」

そう言って神命は窓の方を指差した。

「そーじゃなくて、私は二十一学区の天文台で綺麗な星空が見たいの！！」

「突然どうしたんだ？高嶺らしくないな」

「何それ？どういう意味？」

「いや……だってお前……」

神命は月極について過去を振り返ってみる。

考えてみると月極と外へ出かける事はあまり無かった気がした。主な原因としては、待ち合わせしても彼女が現われないからだ。そうでなくても神命は忙しく、出かけるような暇も無く予定が合わないのにだ。

しかし、良く考えてみると月極　高嶺はこれでも一応、思春期を迎える高校生だ。いくら深夜に携帯に掛けてこようが、その話の内容が容姿に似つかわしいもので無かろうが、思春期真っ盛りの女子高生なのだ。世に言う、『ろまんてぃっく』な妄想の一つや二つ持っていても不思議ではない年頃なのだろうかなどと、愛娘を持った父親のような考えを浮かべ、一種の悟りの境地に達していた神命は、

「いってらっしゃい」

「……」

「何だ？父さんと一緒がいいのか？」

「誰がお父さんですって？」

「じゃあ一体何なんだよ？」

聞くと、なんだか顔を赤らめ、もじもじしながら何かをぼそっと呟いた。

だが、当然の如く神命の耳に、そんな小さな呟きが届くはずがない。

「？」

神命はもう一度、はっきり聞こえるように言うよう月極に催促すると、一度神命とは反対の方向に体を向け深呼吸をするような素振りを見せてから、再び神命の方へと向き直して言った。

「選と……」

「俺と？」

「す、選と一緒に星空を見たいの！！」

すると選の方とは逆方向に視線を向ける月極。その手は彼女の着ている霧が丘女学院の制服のスカートを握り締めている。

「纏めるとだな、俺と一緒に二十一学区の天文台に星空を眺めに行きたいのか？」

黙って首を縦に振る月極。

「まぁ、今日は暇だから別にいいけど？」

少し考えてから、神命がそう返事をするとスカートを握り締めていた月極の手が緩んだ。

「じゃ、じゃあ、すぐに出かけるわよ！ほら、ぐずぐずしないで！」

「分かった、分かったから。俺の引き千切らんとばかりに引っ張るな」

どうやら機嫌は良くなったみたいだな、と安堵する神命だが、

（嫌な予感しかしねえ……）

空は既に暗くなり、星々が輝き始めていた。

そんな事があって、ここは第二十一学区である。

比較的平地が多い学園都市の中でこの学区は山岳地帯であり、貯水用のダムが多く存在している。そこから学園都市全域にパイプが張り巡らされ、飲料用・工業用等ほとんどの水が供給されており、学園都市の水源と言える。

そんな学区にある山の頂上の観光用として一般公開されている天文台に二人はやって来ていた。

「わぁ～綺麗」

月極は目を輝かせながら、硬貨を入れると一定時間使える望遠鏡を覗き込んでいた。

一方、神命は先程の火星のニュースのせいなのか（普段の客足がどれ程なのかは知らないが）予想以上に人の数が多いことに驚いていた。そのせいで夜だと言うのに建物内は結構騒がしくなっている。

「選も見てよ。星座が綺麗に見えてるわよー。ほらほら～」

月極に腕を掴まれ半ば強引に覗かされた夜空には沢山の星が浮んでいた。

「秋の四辺形に、アンドロメダ座……確かに有名所は一望できて綺麗だな」

「でしょー」

そう言いながらすぐさま望遠鏡を奪い取る月極。

（これなら一人で見に来ても良かったんじゃないのか？）

と疑問を抱き始めた神命は、窓の外を見てみる。そこには月が出ており丁度窓枠が額縁となり夜空を切り取っていた。

（俺はこれだけで十分なんだけどな……）

時計に目をやると19：23。完全下校時刻は6時なので既にバスや電車は止まっているはずだ。あまり帰るのが遅くなりたくないという考えの神命は、後半時間程したら月極を連れて帰ろうと思い近くの椅子に腰を下ろす。完全に娘に振り回される父親である。

椅子の隣には何故か値の張りそうな西洋の甲冑が置いてある。天文台に甲冑があると雰囲気が出るのか？という謎は神命には解決でき

ず、とりあえず壊さないように気をつけようと心に誓う。

しかし、そこで今回の出来事の発端が現われたのだ。

突然一人の魔術師が、大量の警備員（アンチスキル）を引き連れて天文台の中で銃撃戦を始めたのだった。つい五日程前にも結構危険な魔術師と戦闘を神命は行ったのだが、ニュースになっていない分穏便な魔術師なのだろうか。それだけならその場から逃げ出すだけで良かったのだが、何故なのだろうか？その魔術師は神命の近くにやって来てその進行経路を塞いでいる。

その間にその魔術師の肩越しに見えていた警備員達は各々銃を構え発砲を始めた。そして放ってきた銃弾（銃弾と言っても暴徒鎮圧用のゴム弾だが）の一部が流れ弾となり神命の座っていた椅子の隣にあった甲冑に当たった。固定されていたため流石に甲冑全身が崩れるような事は無かったが、その手に持っていたごつい槍がその手から離れたのだ。

「っぶねぇ。危うく刺さりそうになった」

神命は済んでの所でその槍を空中で掴んだ。

「嫌な予感は現実にはさせん！！」

自信満々に言い放った神命だが、警備員の方はと言えば、

「危険人物の増援を発見。我々の防弾服に対抗してか見るからに重量感のある槍で武装している！」

「……おい、違うって。おいそこの魔術師！希望に溢れた表情でこっちを見るな！加勢する気は更々無いからな！！っておい高嶺、何か姿が見えないと思ったらちゃっかり警備員の後ろに避難してんじゃねぇ！そしてふらふらと他の望遠鏡に吸い込まれてんじゃねぇよ！！」

「危険人物の風貌は中肉中背……えーっと、じ、地味でパッとしない黒髪！他にもテロリストが潜んでいる可能性がある。対集団戦を考慮せよ！！」

「おいそこの警備員！！何で一度詰まった！？そして何でそんな特徴で満足してるんだよ！！と言うかよくパッとしないっていう特徴で通ったな！おい仲間と顔を見合わせて『仕方ないよなぁ』的な顔すんな！しばくぞ！？」

そう言って持っていた金属製の槍をくの字に曲げる神命。

しかし、返事として返ってきたのはゴム弾の弾幕。

そうこうしてる内に、高嶺を含むその他大勢は警備員により非難が済み、結局天文台の中にいるのは謎の魔術師さんと神命の二人だけで孤立してしまった。神命としては今月初日の事件で負った怪我を早く治したいため面倒ごとには顔を突っ込みたくないのだが、何かもう後戻りは出来そうになさそうである。警備員さんとしては『なんかもう面倒だから、全員制圧して署で聞けばいいんじゃね？』という方針で固まりつつあるらしい。

「いやぁ、すまないわね。何か色々と面倒な事に巻き込んでしまったみたいで」

「いやもうそんな事はどうでもいいんだけどさぁ、何で俺を巻き込んだんだよ？」

「何か凄く魔術について関わってそうなオーラが出てたから、つい」

（何でこいつこんなに馴れ馴れしいの？）

今日は何かと疑問が多い一日である。

逃げ出したい、という気持ちを必死に抑え込み、神命は何か五日前に科学と魔術の関係を温和に保つとかいう約束をしてしまった気がするのでとりあえず適当に解決することにした。

そして時は進んで現在に至る。

「どこでどう転んだんだよ俺！？」

神命はもう一度だけ叫んだ。

第二十四話　似ても似付かぬ二つの月（後書き）

と言う事で火星編突入。
マイナーな話だけどＳＰ出てるし大丈夫だよね？
終わり方は微妙だけどこれ以上続けると長くなるので。
まあそれは次回で取り返すとして。

テストがまだ半分ほど残ってますので次話投稿までまたブランクが空きます。

第二十五話　小さく遠い知的な標的

どうやらこの魔術師さんの名前はフレイスとか言うらしい。

どこからか車の鍵を持ってきた彼女は第二十一学区の天文台の職員用のガレージからオフロードカーごとシャッターを突き破り絶賛山道爆走中である。そして現在、神命　選はフレイスが運転するオフロードカーの後部座席にすっぽりと収まっている訳だ。

ぞろぞろと後続車両を引き連れて……。

「おいおい、何か後方が盛大に盛り上がってるぞ」

「まずいわね。何とかしてやりたい所だけど、ハンドルから手が離せないわ。そこの少年、振り切るために協力してもらえないかしら？」

「後ろの車両を一掃すればいいんだろ？」

そう言うと神命は静かに車のドアを開ける。

「何をする気なの？」

「ちょっと何台か潰してくる。後、車のスピードはこのままで頼む」

神命は乗っていた車の屋根に器用に上り後続車両を俯瞰すると勢いよくそれに飛び乗った。その後、神命は最後尾の車両に飛び移っていき、

「ガラスを拒絶、身体を透過。少しハンドルを借りるぞ？」

そう言ってフロントガラスを擦り抜け、神命はハンドルを握った。当然、警備員達にとっては予想外の事であり、目の前の出来事に唖然とするが、すぐさま我に返り抵抗しようと試みる。しかし、動いた時には遅かった。

握っていたはずのハンドルが強引に毟り取られていたからだ。

ハンドルが握れなければ運転は出来ない。慌てて自動操縦に切り替えようとするが、その前に神命は動いていた。彼は徐に懐からハンドガンを取り出すと、その銃口を向ける。警備員にではない。向けられたのは車体のボンネットの方向。彼は何の躊躇いもなく、止めとばかりに三発の弾丸を放つ。安全の最低限の機能だけを残し、車体からは煙が上り始める。

その後、彼はそれと同じことを他の数台にも施しフレイスの運転するオフロードカーへと戻った。

「少年、手に持ってる物は？」

「これか？……ハンドル」

「ハンドル！？少年、後ろで一体何をしてきたの！？」

「不良の真似事とでも言っておこうかな。ブレーキには手を出してないからな。多分死んではないと思うが……」

神命は手に持っているそれを無造作に外に投げ捨て、バックミラーで確広報を認するとただブレーキを踏むだけしか出来ない後続車両は、もうそこには居なかった。

「撒いたか？」

「ちょっと待って！？おかしい！！不良って、サドルを盗むのとは訳が違うから！！何、貴方。一般人じゃないと思ってはいたけど、どう考えてもこれはおかしい！！」

「おい、やべーぞ。ヘリまで来てやがる。ったく仕方ねぇな。ちょっとまた行ってくるわ」

「その程度のノリで落とせる物なの！？」

そんなフレイスの言葉は気にせず、神命は再び車体から離れる。

ただ口を開けたままのフレイスは放っておいて、カーチェイスは第二ラウンド目へと突入した。

その少女は無線機に耳を当てていた。

歳は神命と然程変わらないだろうが、何だか妙に色っぽい雰囲気を醸し出している。どこかの学校のブレザーを着ているのだが、それが不自然に感じるほどだ。

少女はくすくすと笑っていた。

無線機が傍受しているのは、警備員が通信に使用している周波数だ。

しばらくそれらを聞いていた少女だが、やがて耳から無線機を離す。

そして、周囲にいる複数の人影に向かって、こう言った。

「やはり、波の警備員に任せているだけでは話にならないわね」

「微細博士。行きますか」

「そうね。やるしかないわね」

フレイスさんの運転する自動車は第十七学区にある工業地帯に入っていた。その設備の多くが無人制御の自動工場であるこの学区で、施設と施設の隙間に車をねじ込むようにして、身を隠しているのである。

「それにしても大変だったな。まさかヘリまで来るとは思わなかった」

工場の外壁にもたれて笑っている神命。

「確かに魔術に関わってそうで使えそうだからと言う理由で君を選んだけど、ここまでやるとは思わなかったわ。そして、ここまで求めてなかったわ。まさかヘリに飛び乗って、墜落させるなんてね……」

対してフレイスさんはと言えば、ペースを完全に乱されて少し動揺中である。

「こういう事には慣れてるからな。とりあえず警備員は撒いたけど……もう帰っていいか？」

「え～何で！？さっきまで協力的だったじゃないの！？」

「いやほら、ヘリを落とすとか人生で初めてだからさ。少々疲れたんだよ。そうでなくても肋骨に数箇所ひびが入っているんだ。頑張った方じゃないか？」

「確かにヘリを落とすとか二十年生きてきた私でもやった事ないけど……時に少年、最近世間を騒がせている火星からの信号は知っているかしら？」

「うわっ、強引に話を濁された……火星からの信号？それなら今日もニュースで流れてたな」

「そうそれね。神命少年は火星に生物っていると思う？」

「火星にはいないんじゃないか？確かに氷は存在するが、大気が薄いから気温が低い。純粋に火星で発生した生物に関しては否定派だな」

「じゃあ、微生物のレベルにまでランクを下げたらどうかしら？」

確かに微生物の中には、地下１０００ｋｍ以上の場所で発見されるものもいるし、上空５０００ｍから見つかるものもいる。一般に生命活動が阻害されると思われる環境下でも生きている極限環境微生物なんてものもいるくらいだ。

「火星でも生きられる微生物はいるだろうな。実例として昔アメリカの探査機に付着していた微生物が月へ取り残されたが、長期間生存していたなんて事もある。だが、さっきも言った通り火星で生物が発生するかは別だ。どっちにしろ俺の答えはノーだよ」

「そうね。そして、火星で生命体が自然発生する必要はないわね」

「？」

神命は首をひねると、フレイスはくすりと笑って、

「密着微生物って知ってる？」

「いいや？」

「簡単に言えばさっき君が言った月への探査機に付着していた微生物の火星版と言ったところね。でも、今回は時代が違う。探査機の装備もより複雑化しているわ。地質資料調査用のレンズを保護するために少量の水を積んでいたり、軟着陸用小型ブースターの点火装置に、酸素ボンベが搭載されていたりするの。どちらも微生物が生存するに当たって必要な項目よね」

「仮にそうだったとして、何故今回の火星からの信号と繋がる？民間で衛星を飛ばせるような時代だぞ。今回の事件は単に火星方向に衛星を配置して信号を飛ばしただけなのかもしれない。況して火星に降り立った微生物が信号を送ってくるなど到底不可能だろう？」

微生物が火星で生存する事ができるだけの環境を持ったとしても、どうやって信号を送るのか、そんな知能を有しているのか等多くの疑問が残る。そもそも火星から信号が送られてきたのかどうかすら怪しいのに。

「電磁波の送信手段についてはね、無人探査機のアンテナを使ったんじゃないかしら。少なくとも、火星の地表で得たデータを地球へと送る装置を搭載していないと、無人探査機として機能しないものね」

「じゃあ何故微生物が『信号を送ろう』なんて考える事ができるんだ？所詮微生物は微生物だろ？」

「うーん……」

と、フレイスさんは腕を組んで悩み始めた。ただし、答えが分からないのではなく、言って良いのかどうかを悩んでいる様子だ。

「……本当は科学サイドの事だから、あんまり得意げに話したくはないんだけどね」

「何だ？」

「地球上の微生物が、火星の環境下で本来とは違う進化を遂げた……って言ったら、どう？」

「微生物がそう考えられるだけの脳を手に入れたってことか？」

「そこまで大掛かりな進化は必要ないわ。そうね、微生物って、移動する際に繊毛っていう細かい毛を動かすでしょう？その細かい毛の動かし方のパターンが、ちょっと変化するぐらいで良いの」

「それだけでどう思考と繋がるんだ？」

「スプリング式のコンピュータって知らない？電気的な方法を使って、棒形素材を揺らす事で演算処理を行う機材。何やら、凹と凸で〇と一を表現するって話だったじゃない。実際のコンピュータはマイクロメートル単位の棒形素材で構成されていたはずよね。それ、繊毛のサイズとピッタリ一致してるのよ」

「俄かには信じがたい話だが、その微生物の繊毛の振動で高速演算を行っている……一応筋が通っている気がしないでもないな」

「ただ、いくら普通とは違う進化を遂げたからと言っても、微生物単体では演算能力に限りがあるわね。恐らく、複数の微生物が纏まって、並列的に演算する事で、思考と呼べるレベルにまでたったしたんだと思うけど」

何だそれは、と神命は吐き捨てる。

「じゃあ、そいつらの目的は何なんだ？何の為に信号を送ってるんだ？」

「それはね」

フレイスさんは迷わずに、口を開く。

恐らく、ここでもそれ相応の根拠を踏まえた推論、今回の出来事の根幹となるいくつかの何かが姿を見せるのだろう。

神命は息を呑んでフレイスの言葉に耳を傾ける。

張り詰めた空気の中で彼女は言った。

「いやぁ、それについては予想も出来ないわ」

「……」

その言葉に、神命は凍りつき、しばらくして我に返ると、

「何それ!?ここまで来て何その答え!散々引っ張って来てこれかよ!!半端!もの凄く中途半端!車を運転し始めた時とか、俺の知らない単語を並べられた時はすげぇ驚いたよ!だからまたそれと同じく俺の驚くようなトンデモ事実が飛び出して来るんじゃないかと思って期待してたんだよ!!」

「えーと、その、ごめんなさい。正直言ってほら、私って魔術サイドの人間だから、科学の方はそんなに詳しくなくて……」

「ここまで解説しておいて!?もう魔術サイド云々言われても全然信憑性湧かねぇよ!!」

「きっと、あれよ。自分がどこから来たのか確かめたくなった……とか、じゃない、か、な……?」

「うわっ、これまたもの凄く適当な回答が帰ってきたよ!!しかもとても投げ遣りな!!もういいよそれに関しては。で、フレイスの目的はどうなんだよ?」

「どう意味かしら?」

「その密着微生物が、どうしてフレイスがここにいて、どうして警備員に追われているかの理由にどう関係しているのかって意味だよ」

「何だ、その事。さっきの話と繋がっているからよ」

「?」

「学園都市の連中は私の目的が気に食わないんじゃないかしら」

「だからその目的って一体なんだよ」

「そうね」

フレイスは簡単に頷くと、神命に向かってにっこりと微笑むと言った。

「私の目的はね、そういう『考える微生物』を絶滅させることなの」

思いもしなかった答えに神命は戸惑った。

「……絶滅、だと？」

「ええ」

「何で知能があるだけのの無害な微生物を駆逐する必要がある？まさか、いずれ更なる進化を遂げて、地球に攻め入って来るなんて考えている訳じゃないよな？仮に微生物を殺すって言っても、火星にいる存在だぞ。手に付いた細菌を石鹸で洗い流すとは訳が違う。ミサイルでも打ち込むのか？それとも火星に行って直接殺す気なのか？そもそも、火星にいる微生物がこのまま永久に生きられるとは考えられないな。火星の水も酸素も有限だ。放っておいてもいずれ絶滅する。そんな存在をどうしてこのタイミングで消す必要があるのか、俺には予想出来ないが？」

「……、」

神命の問いに返事が返ってくる様子は無かった。

フレイスはただ、隠している車にもたれ掛かりながら、

「とにかく、私がやる事は変わらないわ。私はその為に計画を練り、準備をしてきた。魔術サイドの人間である私が、科学サイドの総本山の学園都市に足を踏み入れている時点で、覚悟の程は理解してほしいものね」

彼女の口調は極めて真剣だった。

再び二人の間に沈黙が走る。

しかし、その沈黙を遮るようにカラン、という物音が響く。

音の方向は神命の前方１ｍ程の位置。

見ると、そこには彼の嫌う缶コーヒーのような円筒形の物体が落ちていた。彼はコーヒーの銘柄など一つとして知らない。だが、そこに転がる物体の表面に印刷された銘柄は何度も見たことがあり、どんな味がするのかは知っていた。

Ｓｔｕｎ　Ｇｒｅｎａｄｅ――

神命はそれを見るなり、急いでその物体を遠くへ蹴り上げるが、それは彼の足から離れてすぐに爆発した。

「ちっ、スタングレネードによる音とひｋ――」

彼が言い切る前に、スタングレネードから発せられた音と光に彼の

声は掻き消された。

（警備員か！？）

近くからいくつもの足音が聞こえる。辛うじて聴覚を封じられる事だけは免れたようだが、目には強烈な光による残像が焼きついてしまっている。

そんな状況の中、聞こえてくるのは足音だけではなかった。

銃声。

「くそ、フレイス！無事か？」

神命がそう呟いた時だった。

「……定められし五色は五角の頂点を象徴するもの。故にその補色となる対の五色は、五角の頂点、その属性を増幅するものなり」

その声は視覚の奪われた神命にも、はっきりと聞き取る事が出来た。

フレイスさんの声だ。

「赤の後ろに緑を重ねて輪郭を縁取る。テジャスの三角形よ、その強調された象徴によって、自然の力を大きく現せ！！」

徐々に視覚が回復していく中で、神命は見た。

フレイスさんは片手でオイルライターの火をを点け、もう片方の腕で緑のカードを取り出す。そのカードを人差し指と中指で挟み、オ

イルライターの小さな火を輪切りにするように、水平に振るう。
すさまじい音が炸裂した。
オレンジ色の爆発が起こる。しかし、その爆風はフレイスさん自身や神命はおろか、左右の壁すら焦がすことなく敵だけを正確に薙ぎ倒し、路地の外まで吹き飛ばした。
「神命少年は無事みたいね」
「ああ」
その時だった。
「チッ。やってくれるわね、アナログ魔術野郎め」
声が聞こえた。
完全に回復した視力で、神命はその声の方向を確認する。
そこには、爆風で薙ぎ倒された警備員とは少し違う風貌の男達を邪魔そうに避けながら、こちらへ歩いてくる少女がいた。
「微細乙愛（びさいおとめ）。その歳で例の研究を任されているとは大したものじゃない」
「私の素性を調べていたと言う事は、やはり目的は『アレ』ね」
微細と呼ばれたその少女は、どこかの学校の制服のブレザーを着ているが、その姿に違和感を覚えるほどに妖艶な雰囲気を纏っていた。

彼女の手には楽器ケースのようなものが握られている。

「そっちがお得意のアナログ技術を持ち出したのなら、私がデジタルな代物を取り出しても文句はないわよね」

パチンという音と共にケースの留め具を外し、細いケースの中から取り出されたものは、

「……鞭か？」

黒い革で出来た１m前後の鞭だった。彼女はそれを掴むと、調子を試すように二、三度振り回す。

「デジタルなんて言うから銃の一丁でも取り出すかと思えば、鞭とはな。とりあえず、鞭は拒絶っと」

そう言うと肩を鳴らすように動かし、静かに演算を始めてから言った。

「さて、ようやく主要人物の登場といった所か。何か知らないけど、ここで止まってもらうぞ？俺の休息の為にな」

第二十五話　小さく遠い知的な標的（後書き）

と言うわけで火星編二話目。

またしても強引な終わり方ですが、火星編って短い分区切りと言う区切りが見つからないのでこんな感じに。

感想お待ちしています。誤字等があればご指摘を！

第二十六話　進化と退化の転換期

神命　選とフレイスは第十七学区にある工業地帯でとある少女と対峙していた。

微細　乙愛。彼女の手には、黒い革製の鞭が握られている。太さや長さからして対猛獣用のものだろう。彼女は調子を確かめるようにそれを何度も地面に打ち付けている。

その姿を見て神命は言った。

「お前は一体何者だ？警備員（アンチスキル）でもなければ風紀委員（ジャッジメント）でもない様子だが……」

「あらまぁ」

彼女は視線を神命からフレイスに切り替えて言った。

「無関係な人間に協力は仰いでも事情は話さない。アナログな魔術野郎らしい卑怯なやり方ね。その調子だと、自分のやっている事は正しい事だと勘違いしているのかしら」

「黙りなさい」

フレイスが遮った。

「あなた達は『アレ』の恐ろしさを全く理解していないのよ。『アレ』が地球上に蔓延する前に、私は『アレ』を全滅させてみせる」

フレイスは続けて、

「……こいつらは、火星の密着微生物を調べるために、手っ取り早く『同じもの』を地球上で作り出そうとしたのよ。密着微生物の原型は、地球上にある既存の生物。わざわざ火星の地表をどうこうするよりは、『地球上で火星と同じ環境を生み出す施設』を作った上で、そこにオリジナルとなった微生物を放り込んで進化させた方が、手っ取り早くサンプルを手に入れられると思い込んでいたのよ」

「随分な言い方ね。事実、私達の機関は一定の成果を挙げている」

「……演算機能を一切持たず、ただ火星の環境に耐えられるほどの莫大な繁殖力だけを継承した、あの突然変異体が成功だと？」

「……、」

「そんなものが地球環境へ放り出されれば、『アレ』はあっと言う間にこの惑星を覆い尽くす。『アレ』は心を持った生き物なんかじゃない。プランクトンの異常発生によって引き起こされる赤潮が魚介類へ深刻なダメージを与えるのと同じく、『アレ』は他の全ての生物を苦しめる元凶となるのよ」

「大した受け売りね。一体どこの誰から仕入れた情報かは知らないけど」

微細は動じなかった。

「科学を知らないからこそ、あなた達は科学を恐れる。『アレ』に地球を脅かすような力は無い。そして私達の保管能力は完璧なのよ」

「そんな言葉を信じると思う？」

「信じなくても構わない。いずれにしても、あなた達はここで全員倒れるのだから。

微細は笑いながら、鞭を構えなおす。

しかし、微細が動く前にフレイスが動いた。フレイスは赤や緑、青、黄等のカラフルのカードを懐から取り出した。微細が仕掛けてくる前に先手を打とうとしているのだ。

彼女は手に持っているカードの一枚を選ぶと、迅速に魔術の発動に入る。

が、その時、

シッパァァン！！と、鋭い音が放たれると共に、フレイスの持っていたカードが地面に落下した。

フレイスと微細の間は、１０ｍ程も空いていたのにだ。微細の手にしている鞭の長さは１ｍ程度の長さの物だ。直接攻撃は届かないはずなのに。

「ッ！？」

驚いて手を引っ込めるフレイスに、追撃をかける様に微細はその場で鞭を二、三度振るう。その瞬間、フレイスの右手に赤い腫れが走る。右手だけではない。続いて頬や、左脹脛にも同様の衝撃が襲い掛かる。ストックしていたカードも全て床に散らばってしまった。

「大丈夫か、フレイス！！」

神命は叫ぶと微細の方向へ走り出し、迎撃に入る。その時、神命は見た。微細が制服の中から缶コーヒーのようなものを取り出しているのを。

「もうそんなもの効かねぇよ」

神命が言ったが、微細は構わずそれを神命目掛けて投げつける。スタングレネードは神命の至近距離で爆発したが、その効果はゼロ。神命はすでにスタングレネードに対する絶対の回避する術を使用している。

彼女は再び鞭を振るった。瞬間、神命の腕に赤い腫れが走り抜ける。

（どうやって攻撃している？既に鞭は拒絶しているはずだ。鞭の攻撃ではないなら、何所かにその動きと連動して攻撃を行う装置でも配置しているのか？）

しかし、辺りを見回してもそれらしき物は見当たらない。

ならば、

「光を拒絶、身体を透過」

言い放つと同時、神命の姿は虚空へと消える。

神命の姿が消えた事に、少し驚いき一歩後ろへ退く微細だが、鞭を握る手が緩まる事は無い。寧ろ先程より強く握り締め、何度も空中を打ちつける。

だが、その衝撃が神命に伝わる事はなかった。

その間に神命は微細へと近づき、彼女目の前に来た所でその姿を現す。その瞬間を逃すことなく鞭を振るう微細。だが、その攻撃は神命の方向とは全く別の場所に向けてのものだった。

シパァァ、という音が炸裂する。

だが、その音の方向は鞭が振るわれた方向からではなく、神命の方から響いてくる。

別に鞭が神命に触れてはいないはずなのに、彼の頬にまるで刃物切られたかのような傷ができ、口の中に鉄の味が広がっていた。鞭には赤い血が付着し、月明かりを薄っすら反射している。

（鞭の射程内に入ったにもかかわらず、俺に直接鞭は振るわなかったな）

頬に滲む血を服の袖で拭き取りながら、攻撃の方法を冷静に分析していく神命だが、その答えは見つからない。

（鞭と攻撃が連動しているのは間違いないが、やはり鞭での直接的な攻撃ではないか。だが位置を捕捉出来ていない相手には当たらないようだな）

考えながら、再びその姿を虚空へと消すと彼我の距離を十分に取る。

「何らかの能力か……」

「教える必要はないわね」

彼女が鞭を両手で引っ張ると、ギチギチと革特有の寒気のするような音を上げる。

その時だった。

キィィ！！とタイヤが擦れる音が炸裂した。

「フレイス！！」

建物と建物の隙間に止めてあった４ＷＤのオフロードカーの運転席に、フレイスさんが乗り込み、ハンドルを握っていた。

「乗りなさい、早く！！」

咄嗟にオフロードカーの側面に張り付く神命。

「出せ！！」

勢いよくアクセルが踏まれ、車は急発進する。

微細も鞭を振るったが、猛獣用でも所詮は鞭であり、車一つを止められるだけの威力は無い。

ドアを開け、後部座席に収まった神命は、瞬く間に小さくなっていく微細の姿をバックミラー越しに見つめていた。

オフロードカーは走りに走って、現在はデパートの地下駐車場に止まっている。

その中に神命とフレイスの二人はいた。神命は座席を倒し、腕を枕にして寝転がっている。

「これからどうする？」

暗い雰囲気の中、神命が口を開いた。

「どうするも何も、追うに決まってるわ」

「そうか……」

その後に、「そうだ。最後にこれだけは聞いておこうか」と続けて神命は言った。

「どうしてフレイスは、この学園都市まで来たんだ？」

フレイスはハンドルに抱きつくようにして、顔を伏せながら言った。

「それはさっき説明したはずよ。聞いていなかったの？私はこの町の研究所が火星と同じ環境を整え、思考能力を持った密着微生物を人為的に製造しようとしている過程で作られた出来損ないが、大気中に漏れ出して繁殖を始める前に――」

「違う」

神命が遮る。

「何をしにここへ来たのかじゃない。何故ここに来てこんな行動を起こしたかだ。魔術師であるフレイスがわざわざ学園都市に微生物の駆除活動にボランティアしに来たって訳じゃないんだろ？科学サイドの総本山に足を踏み入れてまで、何のために戦っているのか。俺はそれが聞きたいんだ」

フレイスは黙り込んだ。

そしてわずかな静寂を挟んで、フレイスはゆっくりとその唇を動かした。

「そうね……」

フレイスはハンドルから身体を起こすと、今度は座席に体重を預け、一度ゆっくりと息を吐いてから言った。

「『暗闇を拭う夜明け』っていう魔術結社を知っているかしら？」

「？」

「知らないわね。知っている訳が無い。……同じ魔術サイドの中でも、『黄金系』発祥の地のイギリス国内でも知っている者は少ない。それぐらい衰退した、ちっぽけな魔術結社。そして、私が所属している結社の名前よ」

そう言いながらフレイスは、懐から数枚のカードを取り出した。これだけだとサッカーで使うイエローカードやレッドカードにしか見えない代物だ。

「五大元素を色彩化して、色を混ぜたり補色させる事で自然界にある五種類の力に間接的に干渉するもの。元の『黄金系』では広く用いられてきた魔術の一つよ。それを今でも私達の結社では使っているの。でも……」

「でも？」

「魔術もね、科学と一緒で日々進歩しているのよ。この術式も今ではめっきり使われなくなってしまったわ。こんなもの使わなくても、もっと強力な魔術が使えるんじゃ衰退するのが普通よね」

俯き加減でフレイスは続ける。

「確かに世界を救いたいだとか、他に存在する全ての生命を守りたいだとか、そんなものは全て建前」

フレイスは自嘲気味に、

「本当は、ただの売り込みなのよ。大きな仕事をこなして、それに見合うピカピカの宣伝材料を手に入れて、私達の技術は使い物にならないガラクタじゃないんだぞって叫びたいだけ。……つまらない負け犬の、単なる敗者復活戦なのよ」

「……、」

たとへ彼女の望みが叶ったとしても、それは魔術の技術水準が下がる事を意味している。彼女はそれを自覚した上で、話しているのだろう。

「いいじゃねえか」

「？」

「魔術の事は詳しくは知らない。だが、何事にも流行り廃りはある。何が敗者復活戦だ？単なる梃入れに過ぎないだろ。名声が無くなった？ならまた名を馳せればいい。アナログ技術は廃れる？アナログに出来て、デジタルに出来ないことだって数え切れないほどある。何をどんよりしているんだ？早く車を出せ」

「……でも、いくら少年が強くても、あの鞭女の攻撃の種が分からないんじゃ太刀打ちできないでしょ？それに、銃で武装した私兵も大勢いるのよ」

「だから何なんだ？ここでじっとしている暇なんか無いんだ。前を見ろ、ハンドルを握れ、自分が今何をすべきかなのか考えろ。落ち込むのはそれからだ。巻き込まれた俺の方が熱くなっているのはどうかと思うけどよ、俺の行動にも一つの芯ってものがあるんだ。い

や、そんな大層なもんじゃねえな。俺もあんたと同じで単なる梃入れがしたいだけなのかもしれない。だから早く車を出せ。一緒に、あの鞭女に一泡吹かせに行こうぜ？」

神命の言葉をフレイスはただ静かに聴いていただけだった。

そしてそれに対する返事はただ一言だけ。

「当然よ」

そう言うとフレイスは、ハンドルを握り、アクセルに足をかけた。

第二十六話　進化と退化の転換期（後書き）

火星編三話目。

最初は三話構成で終わらせようと考えていましたが、書いてみると長い長い。風邪気味の中書いたので誤字が心配です。もし見つけたら指摘していただけると助かります。

第二十七話　淡く導く赤い道標

神命　選とフレイスは車から降りていた。

ここは、第十七学区にある工業地帯の一画。数分前まで、二人はここで戦闘を行っていた。相手は微細　乙愛。フレイスの目的と阻止するために現われ、現在地で一悶着あったのだ。

現在はそんなことが起こった事など、分からないほどの静寂がその場を満たしている。

「で、どうする？」

静寂を押し切って、口を開いたのは神命だ。

「どうやって奴等を見つける？見た所、何の痕跡も見当たらないが」

「確かに、目で見ただけじゃ無さそうね」

「と言うと？」

「神命少年は地脈って知ってる？龍脈や世界の力とも言うのだけれ

ど」

「地脈？」

全く知らない訳ではない。と言っても、初めて知ったのはつい先日の事ではあるが、

五日前の９月１日、神命はとあるシスターに出会った。幻想殺しが連れていたそのシスターによると、神命はその地脈とやらのエネルギーを吸収しているらしい。もっとも、その前も現在もその自覚は無いのが。

「ああ、大地の中を循環する様に流れている力の束……だったか？」

「簡単に言えばそうね。その使い道は魔力として魔道書の原典の動力源として使われたり、巨大な建造物を立てる時にその立地や方向を決める為に利用されるわ。その他に、この力によって人にとって居心地のいい場所と悪い場所ができるの。それを応用した人払いなんて魔術も存在するわ」

「で、その地脈が、あの鞭女を追うのにどう役立つんだ？」

神命がそう質問すると、フレイスは神命の方向を指差した。

「何だよ？」

「あいつを追うには君が必要なのよ」

「でも、俺には奴等がどこにいるかなんて検索するような能力は無いぞ？」

「そう……自覚は無いようね。いいわ、説明してあげる。少年は、何て言うか……その、地脈とか世界の力とか、そういう外部の力を吸収……と言うのかしら？とにかく、少年はそういった類の力に干渉する能力……と言うより体質ね。そういう体質を持っているのよ」

「そうなのか？」

言われた事は、あのインデックスとか言うシスターと一致しているので信用できるのかもしれない。

「ええ、私も貴方みたいな体質に出会ったのは初めてだけど、実際そうなっているから仕方ないわね。実を言うと、私が少年を選んだ理由を聞いた時にオーラって言ったのはこの事なの。最初に少年を見た時から、何か違和感を感じていたのよね。ある程度の魔術師は、地脈とかの違和感とか不自然さを何となくでも感じるものなのよ」

「俺が地脈の力に干渉してしまう体質なのは分かった。でも、俺はここにいるんだ。幾ら俺が地脈に干渉してるからって、俺がここにいる限り、奴等を追う手がかりにはならないだろ？それこそ、俺が奴等と一緒に行動していたって事なら話は別だが」

そうだ、と神命は改めて思う。

例え、神命がどれだけ違和感を振り撒いたとしても、それは神命の通った軌跡の周辺だけに当てはまる事だ。違和感を辿っていっても、その先にいるのは彼しかいない。

「そうね。でも、君がここにいても、ちゃんとその違和感はあの女の手掛かりを示してくれているわ」

「どうやって？」

「恐らく、君の血か何かが彼女の持ち物に付着したりしたんじゃないかしら？私もよくは分からないけど、少年の血も小規模ながら地脈に干渉しているのよ」

「……あの時か」

神命が微細に至近距離まで近づいた時だ。鞭で打たれてできた傷の血が鞭に付着したのを彼は確認している。

現在は出血が止まっている頬の傷を軽く撫でながら、神命は思い出した。

「心当たりがあるようね。奴もその血をそのままにしておいた訳ではないでしょうけど、血は洗ってもなかなかその成分は落ちないわ。ルミノール反応って知ってるでしょ？それと同じ感じね」

「よし、移動ルートが分かるなら急いだほうが良い。俺には何も感じないが、その違和感がいつまでも続く訳じゃないんだろ？」

フレイスは大きく頷いた。

「その通りよ。地脈の流れに残った違和感は、雪原にある足跡と同じよ。時間が経てば消えてしまうわ。急ぎましょう」

数分後、彼らは襲撃地点のすぐ側の自動工場の駐車場にいた。

どうやら先程フレイスに蹴散らされた雑魚達しか車を運転出来ず、彼女自身は免許を持っていないらしい。周りに武装した人間は確認できないため、現在はこの工場内部で増援を待っているようだ。

「そう言えば、俺達は最終的にえーっと、『火星の土（マーズワールド）』だっけ？そこで例の微生物を絶滅させるんだよな」

「ええ」

「どうやって破壊するんだ？微生物の入った容器を全て消毒したり、煮沸する……なんて気が遠くなるような事でもするのか？」

「これよ」

そう言ってフレイスが取り出したのは、またもカードだった。しかし、今回取り出されたカードは先程の赤や緑、青、黄等の単色のものと違って、ステンドグラスのように複数の色で構成されている。加えて表面も平らではなく凸凹しているようだ。

「十字架と……薔薇か？」

「『黄金』系より古い、基本の基本とされる学派で開発された霊装よ。乾燥したハーブを粉末状にしたり、聖別した塩を使って模様を作るの。浄化の術式に使われる小道具ね」

「浄化？破壊とは関係ないのか？」

「主な用途は食物の腐敗の防止。五大元素の配分で物質が構成されているものと仮定すると、錆びや腐敗は『バランスの悪い配分』による現象ということになる。だから、そのバランスを再調整する事で腐敗を防ごうという狙いがあるんだけど……」

そこまで言うと、フレイスはくすりと笑って

「あなたは科学サイドの人間だから分かるわよね。食物の腐敗がどういう風に起こるかを」

「微生物や細菌みたいな生物が分解するからだろ？んで、分解した結果が人間に役立つなら発酵、害になるなら腐敗だ。だから乾燥させたり、真空にして、微生物の生命活動を阻害するように加工すれば、腐敗は防げるはずだが」

「当初、この霊装・術式を作り上げた魔術師が、微生物の存在に気づいていたとは思えないわ。ルネサンス辺りの話だしね。でも、結果的にこのカードはミクロな生物に対して強力な浄化作用をもつようになった。例の密着微生物に対しても高い効果が期待できるはずよ」

また、そのカードは絶対の効果を持つわけではなく限界があり、一

定以上繁殖してしまった微生物に対しては浄化が追いつかなくなるらしい。

「いやーそれにしても。あいつ一人しかいねぇな」

「そうね。今の内にこっそり接近して、二人掛かりでボコッちゃいましょう」

「それじゃ明らかにこっちが悪者じゃねえか」

「結局は先手を打った者勝ちよ。卑怯者と呼ばれようが、絶対に手を緩めてあげないんだから」

「こんなに好戦的な人柄だったっけ？まあいい。とりあえずは俺が行って、拘束なり何なりしてくるから、フレイスは外で他の奴等が来ないかどうか見張っててくれよ」

「……分かったわ。気をつけて」

「……何で少し不機嫌そうなんだよ」

そう言って二人は行動を別にする。

「……来たわね」

照明は点いておらず、月明かりだけが頼りの暗い工場内で微細は呟いた。

「随分寂しい所に引き籠ってるじゃねえか。お仲間はどうした？」

月明かりを背負い、神命は入り口に立っていた。

「蹴散らした本人達が言う台詞じゃないわね」

そう言いながら片手では鞭を構え、もう片方の腕ではスタングレネードを掴んでいる。

「おい、ドS女。そろそろ始めようか？俺も後が閊えてるんだ。時間が惜しい」

「そうね」

直後、缶コーヒーのような円筒形の物体が神命に向かって投げられる。

「何度やっても、スタングレネードは効かねえよ」

しかし、その後も続けて二つの爆発が起こる。

（……さて、宣戦布告をしたのはいいが、手品の種が分からないんじゃ近づけねえし……）

考えている間にも鞭の衝撃は飛んでくる。

「っ痛ぇ！！」

一瞬の暗黒の後、左腕に痛みが纏わりつくように広がった。

一発で終わりではない。二発、三発と体に痛みが走り抜ける。

だが、痛がっている暇は無い。再びスタングレネードが投げ付けられる。

「無駄だって言ってるだろ？」

「どうかしらね」

彼の足元で爆発が起きる。

しかし、神命は全く動じない。効かないのだ。効く筈がないのだ。

なのに、

またも前方で爆発が起こる。

しかし、神命には届かない。スタングレネードから発せられるどんな光も、どんな音も。

そんな事は、微細にはとうに知れているはずだ。今までの戦いぶりを見れば誰だって気がつく。でも、やめない。

（スタングレネードは消耗品のはずだ。なのに躊躇無く無駄使いする。ってことはだ、何らかの理由があって投げられているはずだが……それは何だ？）

探しても答えが見つかる様子はない。

「くそっ、そんなもんボカスカ使うんじゃねえよ。煙てぇだろうが！」

その時、僅かだが微細の表情が曇った。

（あれ？俺なんか変な事言ったか？）

逆に驚く神命。しかし、何かに違和感を感じる。

（あいつは確かに俺の言葉に反応した。どこに？）

『くそっ、そんなもんボカスカ使うんじゃねえよ。煙てぇだろうが！』

（俺はただ普通の事を言っただけだ。普通に煙たいと……ん？煙たい？）

そこで神命は気付いた。この場に満ちる違和感の正体に。

「まさか……」

神命は思わず声をあげ、汗を拭う。そこにも違和感は存在した。

攻撃は再開される。

再び鞭に力を込め振り回す微細。それと同時に神命も前に出た。

微細の鞭の衝撃は真っ直ぐに標的へと向かう。しかし、そこでこれまでとは違う事が起こった。いや、起こらなかったと言うのが正しい。何も起きなかったのだ。

「ッ！？」

驚愕を露にする微細。それに対して神命は、

「どうした？鞭もスタングレネードも御仕舞いか？」

もう一度微細は神命にスタングレネードを投げ付け、鞭を振るう。しかし、依然として神命には何も起こらない。

「……考えてみたらこの工場内は煙たかった。だがそれは何故か？答えは微粒子だ。お前は通常のスタングレネードの性能に加え、爆発と同時に微粒子をばら撒く性能を持ったグレネードを使用していたんだ。屋外で戦った時は風もあったし気付かなかったが、空間の限られる工場内じゃあ流石に気付く。ああくそ、肌がざらざらして鬱陶しいな」

服で顔の汗を拭いながら神命は続ける。

「本題は何故微粒子をばら撒いたのかだが、これは簡単だ。鞭の衝撃を微粒子によって狙った方向に伝導させる為だ。それなら射程外

でも攻撃は届くからな」

通常ならスタングレネードの光と音で五感が麻痺し、そんな事には気付かなかっただろう。

「く……っ！！」

微細は歯噛みした。

「だがそれだけでは足りない。微粒子はこの空間の全体を満たしているはずだ。なら衝撃も全体に分散し、攻撃する本人まで傷つけることになる。それを補う超能力が足りないんだ。効果としては衝撃を伝える方向にある程度の指向性を持たせる能力と言った所か。一方通行の下位互換だな」

「でも……それは」

微細は眉をしかめる。

「理屈が分かった所で、この状況で避ける方法は無いはずよ。一体どうやって……」

「スタングレネードが効かない時点でおかしいとは思っていたんだろ？俺の能力は避ける事に特化してんだ。正体が分かっちまえば俺は何でも避けられる。それが例え核だったとしてもだ」

神命はハンドガンを取り出して、喋りながら微細に一歩一歩近づいていく。必死に鞭を振り回す微細だが、体力を無駄にしているだけだった。

「さて、もう終わらせようか。あれだけ鞭で叩かれたんだ。これくらいの仕返しくらい仕方ないよな？」

「……殺すの？」

「どうだろうな」

そう言われて微細は銃口を向けられる。

「子供はもう寝ろ」

銃声が工場内に炸裂した。

続いて、人が倒れる音。

工場の外で、神命とフレイスの二人は落ち合っていた。

「少年、銃声が聞こえたけど大丈夫みたいね」

「ああ」

「あのサド女は？」

「殺した。銃で一発ドカンとな」

「マジで！？」

「……嘘」

「あなた……平然と恐ろしい事言うのね」

「気にするな。因みに奴は中で気絶してる」

実を言うと、銃弾は微細の身体を貫通していた。もっとも、拒絶の効果を付与され傷一つついていないが。

「結局、美味しい所は全部持ってかれちゃった訳ね。少しは私の分も残しておいてくれれば良かったものを」

「まあいいだろ？それより早く目的を達成しに行くぞ。これ以上遅くなると、あいつにまた怒鳴られそうだしな」

「あら、少年も色々大変なのね。では、急ぎましょうか」

現在地は第二十一学区山岳地帯の山頂近くに存在する密着微生物進化促進施設。

午後１１時を回った辺りだ。

「フレイスは微生物の培養機の『火星の土』の破壊を優先してくれ。俺は残党狩りでもしてくる」

「分かったわ」

フレイスは研究所の奥に走っていった。

「早速、潰しに行くか」

神命は吐き捨てるように言った。

そして案の定、何人もの武装兵や研究員が研究所内に残っていた。微細が戦闘不能になったためか、命令系統は滅茶苦茶で、制圧は呆気ないものだった。戦闘中は騒がしかった建物内も今は閑散としている。

フレイスと合流するまでの間、神命は研究所漁りをしていた。

火星で密着微生物が進化し、地球に電波を送っていることに対して、正直まだ半信半疑だったからだ。

しかし、ここに存在するデータを見る限り満更でもない様だ。

そして、ここで行われていたのは地球産の密着微生物を生み出すというものではなく、オリジナルの密着微生物でも生存できる環境を研究し、火星へ微生物が延命できる様な装置を送り込む事を目的としていたらしい。

どうやら火星からの電波の内容は救援を求めるものだったようだ。
遣り取りの音声データも残されている。

（じゃあこいつ等は、ただ取り残された微生物を、感情のある微生物を保護する為だけに動いていたのか？ただそれだけの為に……）

フレイスの言っていた事も一理あるが、ここで行っていたのは単なる救助活動だったのかもしれない。ここまで来て何かしんみりしてしまった。

口からは自然と溜め息が出てくる。

窓には依然として月が浮いていた。夜空で一際輝いているその星を見つめ、神命は呟く。

「やっぱり月はいい。火星は遠すぎる」

第二十七話　淡く導く赤い道標（後書き）

火星編終了。

最近更に文章が浮んでこなくなった気がする。

次回は……どうしようかな。

第二十八話　説明できない生物再び

机の上で携帯が鳴った。

ここは長点上機学園学生寮の三階、神命　選の自室である。

着信音と共に、ガーッ、と音を立て机の上から滑り落ちる携帯を宙で受け止める。画面には浜面　仕上の文字。数秒程度電話に出るかどうか悩んだ末、神命は面倒臭そうに通話ボタンを押した。

もう嫌な予感しかしない。

「神命か！？」

携帯から声が響いた。とても慌てた様子だ。その声の背後からは銃声らしき音も聞こえる。

「浜面か、どうした？」

「実は今、滅茶苦茶ヤバイ状況でさ。ちょっと応援を頼みたいんだ」

「何があったんだ？」

「今、俺達の拠点がある奴に襲われてんだよ。銃も効かねえみたいだし、何か得体の知れない力も使ってくるしで結構ヤバイんだよ。で、神命の力を貸して欲しいんだけど」

銃が効かない相手となると、それ以外での攻撃も効かない可能性が高い。いくら人数が多くても無能力者では対処は難しいだろう。今も携帯からは銃声と共に何かの崩れ去るような轟音が飛び交っている。

「分かった、すぐ行く」

そう言って窓から身を乗り出した。

所変わってここは第七学区にのスキルアウトの拠点の一つである。拠点と言っても、勝手に路地裏を占領し屯っているだけにしか見えないが。

この場に着いた神命は後悔した。そのあまりの惨状に後悔の念を堪

え切れなかった。

何故か？神命の視線の先には、彼がこの世で一番相手取りたくない男が立っていたからだ。

その男の名は――――

「すごいパーンチ」

「ぐぼぉっ」

少年がそう叫んで拳を振るうと、彼の目の前にいたスキルアウトの一人が５ｍ程後ろへ吹き飛んだ。

「くそっ」

そのスキルアウトの周りにいた彼の仲間が銃を手にし、謎の少年に発砲する。だが、発砲されたその少年はといえば、体の表面で弾丸を受け止め、びくびくと震えるだけで倒れる様子は全く無い。

「一人相手にたったこれだけか？全く、根性が足りてねえな」

その少年の背中を視界の隅に置いて、神命は、

（あー、あいつだけは相手にしたくないな。帰るか？いや、帰ろう。見なかったことにしよう。今ならまだ間に合うはずだ）

そう思ってその場を後にしようとするが、

「神命、よく来てくれた！！」

彼の逃避は三人の少年によって妨げられる。

浜面　仕上と駒場　利徳、そして半蔵だ。

「神命！早速だがあいつを「断る」……えっ？」

半蔵の言葉を遮って神命は言った。半蔵は再び、

「早速だがあいつを」

「断る」

即答、清々しい程の即答。

「……何で？」

「半蔵……お前、あいつが誰だか知ってんのか？」

「知らねえ。一体誰なんだ？」

神命は溜め息を付いてから、再度その『あいつ』の方を見て言う。

「第七位」

「マジ？」

「第七位って言うか単なる馬鹿」

「……馬鹿なのか？」

「ああ。だから俺、そろそろ帰るわ」

「「何で！？」」

半蔵と浜面が同時につっこむ。それに対し神命は冷静に、

「だからお前、あいつが何なのか知らないだろ？」

「第七位なんだろ？」

「ああ。だが、それ以前に馬鹿だ。しかも根性馬鹿だ。何か知らねぇけど俺に会うたびに一々喧嘩を吹っ掛けてきやがる」

「つまり？」

「超面倒」

実は、四ヶ月程前のモツ鍋さんのあの事件から、削板が神命と目を合わす度に『根性ぉぉおおおお』と言って、何度か闘いを仕掛け

てきていた。最初は弁当の恨みと、やる気を見せていた神命だが、回数を重ねる程に次第にやる気は失せ、面倒になってくる。神命が話し合いを持ちかけようが『根性ぉぉおおおお』で押し切られる。まさに支離滅裂。

と言う訳で、

「俺帰るわ」

「「待てぇい!!」」

再び同時にツッコミが入る。

「お前ら聞いてなかったのかよ?あいつと関わると超面倒な事になるんだって」

「お、そこにいるのは第六位じゃねえか」

「ほら、お前等のせいで気付かれたじゃねえか!!」

この世で一番関わりたくない男が近づいて来る。

この世で一番空気を読まない男が近づいて来る。

「おい、そう言えばお前、何でこいつ等襲ってんだ?」

幾らコイツが根性馬鹿で、幾ら相手がスキルアウトだったとしても切欠が無ければこんな事はしないはずだ。

「ああそいつ等がちょっとした悪行を働いていたんでな、喝を入れ

てやろうと――」

「いや、喝の一つでちょっとした組織が一つ壊滅に追いやられてんだけど」

「いやな、喝を入れに来てみたらいきなり弾丸を一発もらってな、根性を叩き直そうとして」

「こうなったと？」

削板は首を大きく縦に振って頷く。

削板の後ろを見て、その惨状に溜め息を付く神命。喝の一つでこれかよ、と心の中でつっこむと今度は三人の方へ振り返って、

「で、お前らは何やったんだ？」

半蔵の方を向くと、半蔵は知らないといった様子で顔を横に振る。

駒場の方を向くと、あ、やっぱり良いです、ホント何でもないんで、すいません。

浜面の方を向くと、……お前か。

「おい浜面、お前何やった？」

「いや……俺は……」

「何したんだよ？」

「……車上荒らし」

「そんだけ？」

「ああ、そんだけ」

「なら、お前が悪いだろ」

「でもそれだけだぞ？」

「お前が悪い。だから一発貰ってこい」

「神命、押すなっておい、やめｒ「すごいパーンチ」ごぼぉ！？」

近づいて来る削板の方に背中を押された浜面は、凄い勢いで数ｍ後ろに吹っ飛ぶ。

「じゃあ半蔵も行っとくか？」

「え、何で？俺何もしてな「すごいパーンチ」そげぶっ！？」

浜面に続きノリで吹っ飛ぶ半蔵。

「駒場は……あ、やっぱり良いです。ホント何でもないんで、すいません」

「おい第六位、何でお前がここにいる？」

珍しく空気を読んだ削板が質問してくる。

「いや、こいつらと知り合いだか――――」

「そうだ神命、この間の決着を着けようじゃないか」

「って聞いてねぇし。何お前一人で勝手に闘志燃え滾らせてんだよ」

「そういう事で頼むわ神命」

「お前ら完全に他人事だな。もういいよ、殺ってやるよ、適当に…
…三人はこの場から離れた方がいいぞ」

投げ遣り気味に言葉を吐き出す神命。駒場達は神命の忠告通りその場から立ち去る。

「今ここで決着着けて終わらせてやるよ」

「この前の様には行かんぞ第六位！」

「そろそろ六位とか二位とか微妙な数字は飽きたんでな。その片方くらい切りのいい数字にしてもいいだろ？さっさとくたばってくれ。説明できない力を拒絶、身体を透過」

「すごいパーンチ！！」

「いきなりかよ！？」

だが、説明できない力で殴られた筈の神命が吹き飛ぶ様子はない。

「お前、どうやって俺の攻撃を避けた？」

性に似合わず驚く削板。

「お前の攻撃を無理矢理念動力（テレキネシス）の範疇に押し込んだだけだ。俺が避けるために必要な条件は対象の定義化。言ってしまえば単なるイメージだよ。そう、必要なのは俺の事象に対するイメージ。説明できなければ無理矢理解釈を付け加えれば良い。お前の攻撃は念動力だっていう解釈をな。別にそれが正解でなくてもいい。そういう能力なんだよ、俺のは。特別なのは自分だけだと思っていたのか？まぁ、もっとも、俺の中にもお前の力が念動力ではないっていう考えが捨て切れないからな、ほんの少しダメージは受けてるが」

脇腹の辺りを摩りながら神命は言った。しかし、それでも余裕の表情を浮かべている。

「少しは鍛えなおしていたようだな」

「そういうお前は最初と何も変わっていないようだな。少しは根性見せろよ」

「俺は根性では誰にも負けん。根性ぉぉおおおおお」

「そう叫ばなくても、ここにいる全員がお前より根性のある奴なんかいない、と口を揃えて言う自信が俺にはあるよ」

そう言うと神命は拳銃を取り出して、

「だからもう少し根性ってものを見せてくれ」

そして弾丸が放たれる。勢いよく放たれたそれは、正確に削板の額を狙っていた。

しかし、弾丸が額に届く前に削板はその場所から消えた。正確に言えば５ｍ横に地面を蹴って移動したというのが正しい。問題なのはどう移動したのかではなく、移動したその速さだ。少なくとも神命には消えたとしか判断できない速度だった。

「銃弾は効かないんじゃなかったのか？」

「今のは当たったら死んでいただろ？そんな攻撃を撃っておいてその質問はないんじゃないか？」

「よく気付いたな。確かに俺は弾丸にもお前の説明できない力を拒絶させていた。当たっても脳みそをぶち撒けるだけだ、安心しろ。まあそれだけ能力を使っているんだ。とりあえずさっさと倒れろよ」

神命は続けて引き金を引く。しかし、その度に削板は物凄い速度でそれを交わしていく。

「この俺を殺す気か？」

「殺すかどうかは問題じゃない。そのくらいの気構えがないとお前は倒れないだろ？しかも、手加減された相手に勝って、お前が嬉しがる訳がない。なら殺す気で戦った方がお互いの理に適ってる。さて、いつまで避けてる？避け合うだけが闘いじゃないだ。近接戦闘は苦手なのか？根性無し」

「ずいぶんと言ってくれるじゃねえか第六位。いいぜ、やってやる」

そう言い放った瞬間、削板の姿が消えた。そして次の瞬間には既に神命の懐に入り込んでいた。その間、僅か０，３秒。

しかし、神命はそれをただ見ている訳ではない、と言うか見えてはいないが。彼は削板が動くと同時、呟いていた。

「削板　軍覇本人を拒絶、身体を透過。大気を選択、空間に固定しつつ腕に纏い圧縮」

削板は神命の首を掴んで地面に叩きつけようとする。が、盛大に空振った。

「挑発に乗りすぎなんだよ、お前は」

神命の首を掴み損ねた削板を神命の拳が襲う。能力を使っていなければ、そこらの不良と変わらない程度の拳。だが、

削板に直撃したその拳は、彼の体をコンクリートの地面に減り込ませていく。

「どうした？早く脱出しないと危ないぞ？」

ただの拳ではない。空気を圧縮し纏った、いわば強力な空気砲の様なものだ。加えて、空間に固定しながらの攻撃であるため、完全に腕の動作と連動し、その動作とは違う運動はしない。要するにどういう事かというと、

「俺が腕を動かしたら動かした分だけお前は地面に減り込む。しかも、今のお前は俺に触れられない。よってお前はこの攻撃を避けるしかなかったんだ。今となってはもう遅いが」

そう言っている間にも削板の身体はどんどん減り込み、コンクリー

トには亀裂が入る。まあ、コンクリートをひび割らせる程度に体が頑丈なのは流石最大原石と言えよう。

「さてどうする？このまま潰れて地面の染みにでもなるか？」

その時、一気に地面がひび割れた。神命が力を加えたからではない。削板が力を加えたからだ。地面がひび割れ、削板と地面の間には大きな隙間が生み出される。地面のひびの一部をを削板は掴むと根性だけで持ち上げる。

「おいおいマジかよ」

神命は驚愕を露にする。驚愕と言ってもサーカスの曲芸を見ているような目でだが。

「ふるわァァあああああああああああああああああああ」

削板が持ち上げたのは神命が立っている２ｍ四方程度のコンクリートの板。削板はそれをまるで冬に水溜りに張る薄い氷のように、いとも簡単に引き剥がしたのだ。そして神命が乗ったままそれを勢いよく近くの建築物の外壁に投げ付ける。

がらがらと音を立ててコンクリート片は砕け、壁は崩れ去った。

「おいおい、根性ってこんな万能な代物だったか？」

白煙が立ち上る中、その声は横穴の中から響いてくる。

「根性に勝るものはない！」

削板の方もそれ程ダメージを負っている様子ではなさそうだ。

「これだけやってもその程度か。全く、お前は相手にしたくはない男ワーストワン決定だよ」

「ワーストかよ」

「攻撃が当たらない人間と攻撃が当たっても動じない人間じゃ話にならない。どうする？さっさと潰されてくれれば楽なんだけど、どうだ？」

「断る」

「何で？その方が今後の俺の活動がかなり楽になって互いにとっていいことじゃないか？」

「俺にとっては全く得がないぞ」

「いや、いずれお前にもその恩恵が来る。俺の計画はそういう方向に進んでんだよ。だからとりあえずここで倒されてくれ」

今度は神命から距離を縮めようと前に出る。削板は先程の途轍を二度踏む気ではないらしい。すぐに地面に開いたひびの中から抜け出す削板。

しかし神命がその後を追う様子はない。彼は一直線にその裂け目に向かっていった。神命はそこでもう一度何もない地面を殴りつけた。そして呟く。

「水を選択、形状を制御」

その瞬間、地面から噴水の様に水が噴出した。しかし、神命はおろか地面すら全く濡らす事はない。水は全て神命の周りの空間に浮いていた。

神命はそれを大量のナイフに形を変えると、体の周りに全方向を向くように配置する。

「今度はこっちから仕掛けようか？」

神命は削板のいる方向へ走り出す。

対して削板は、それを迎え撃つように高速で移動し、神命に拳を入れようとする。その動きは、相変わらず神命には見えていない。また、幾ら水でナイフを作ろうとも自身の体はそんなもの受け付けないという確信が削板にはあった。

両者の距離が拳の当たる一歩手前の範囲まで縮まった。

しかし、ここで削板の予想とは裏腹に、何本ものナイフが彼の体に突き刺さる。

「そう無闇矢鱈に突っ込んで来るなよ。その速度で突っ込んで来たら流石にナイフの数本くらい刺さる。それにこのナイフの刃の厚さは水分子数個ほどだ。触れただけでも良く切れるようになってんだよ」

削板の口に鉄の味が広がった。だが、彼の眼が輝きを失った訳ではない。自身の支えとなっているある一つの言葉を彼は叫んだ。

「根性ぉぉぉぉぉおおお

けの事だろ？ならもうそれは済んだんだ。浜面にも俺からきつく言っておいてやるから、もう手を引いてくれよ」

「……そうかよ」

「ああ」

「この借りはいずれ返すぞ？」

「好きにすればいい」

そう言って二人は其々の方向に歩み始めた。

「さて、今度はこの俺が一喝入れる番だな。どう料理してやろうか？」

数分後、この場から然程遠くない場所で約一名の断末魔が聞こえるのだが、それはまた別のお話。

第二十八話　説明できない生物再び（後書き）

削板フルボッコ回。
今のうちに神命は削板をボコボコにした方が今後の計画が楽になった理由があるのですがそれは一体何でしょう？

気が付いたら一週間もほったらかし。
そして相変わらずの全手動駄文製造機っぷり。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4198x/

とある科学の自由選択《Freedom Select》

2011年12月13日03時47分発行